

艦隊刀記録

飛行士

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

頭可笑しいほど頭いい（と言うか運がいい？）主人公が色々ありながら単冠湾で提督
をしてるお話

最初と最近の文が違う件についてご注意下さい

目次

新米提督着任する	着任	
新米提督、関東に出張する	用意	
新米提督着任して一年が経つ	来客	
修理	事件	
報告	東京	
空襲	会議	
能力	新車	
試験	日常	
復帰	提督、単冠湾に戻る	
着任	帰途	
飛行	帰宅	
新米提督、パイロットになる	65	155
パイロット提督、異世界で撃墜される	55	147

提督、関東に出張する	純白	擊墜
新米提督着任して一年が経つ	用意	
修理	来客	
報告	事件	
空襲	東京	
能力	会議	
試験	新車	
復帰	日常	
着任	提督、単冠湾に戻る	
飛行	帰途	
新米提督、パイロットになる	帰宅	
パイロット提督、異世界で撃墜される	65	155

155 147 139 130 122 113 106 98 90 82 74

自由		茶番		姉妹が鎮守府に来る		軍刀		演習		陸軍		明石		銃器		発覚		走行		休息	
----	--	----	--	-----------	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--

228 220 213 206 199 191 184 176 169 162

表情		過去の話をしよう		幌筵		七瀬		風呂		混沌		戦闘		提督、面倒事に首を突っ込む		変身		笑気		睡眠		認識		穂花	
----	--	----------	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--	---------------	--	----	--	----	--	----	--	----	--	----	--

304 297 291 284 277 270 263 256 248 242 235

仕事	秘密	作戦	提督、初めての作戦に参加する	復帰	会話	重傷	調整	提督、幌筵の艦娘に襲撃をくらう	偽装	艦娘	大佐	爆撃
----	----	----	----------------	----	----	----	----	-----------------	----	----	----	----

376 369 363

356 350 343 337

330 324 317 311

新米提督着任する

着任

今日から此処か…にしても、人が居ないな

(今度来た提督つてあいつか。仕掛けにいくか)

：殺氣か？まあ軍の施設で戦時中なんだからある意味当然なのだろうが、出し続ける
の疲れない？

まあいや、この程度なら造作なく前にちつと動くだけで回避できる

「!? クソツ」

「フツ！」

人間の出力できないはずの速度を發揮し前転をし、來たであろう攻撃を半分以上勘で
よける

「んで、後ろには誰もいらっしゃないと…悲しいッ」

さて、お次は工廠裏に気配を感じハツタリをかます

「工廠裏にいるんだろう？なあ？」（五、六人位か）

当然ハツタリなので誰も居なくてもただ独り言ですむ、などと失敗した時の言い訳を

思つたら返答が返つてくる

「なかなかやるねえー」

(マジかよ、ホントにいるとは…)

「あと向こうの山に結構な大人数いるだろ？ そいつらも集めてくれ」

「これは俗にいう『千里眼』というものだ

あと、青い道着らしきものを着ている人が何か言つてるのが見えた
さて泊地入り口に集合させたのだが、なんだろうすごくこう思う
(何故、俺が艦娘の溜まり場への配属になつたんだ?)

艦娘達も何か鋭い目付きで見てくるし正直怖い

「では、適当に自己紹介をするが俺は如月空だ。本日八月十五日付けでここ単冠湾に配属になつた」

「ツチ」

酷くない?ねえ!とまあ、誰に言つているのかわからない愚痴は置いといて、先程の千里眼の原因である体内に居るモノに話しかけ、脳の使用領域を広げこの中最古参と、ある程度の名前と艦種をおぼえる
すると、先程遠目に見た青い道着の人だということが分かつた

「私達は…」

「ああ 大丈夫君たちの事はある程度覚えた」

「「「は?」」」

I t, s 当然の判断だな (・・ω・) 私だつて自己紹介していないのに急に知つてます発言されたら「ストーカーです」つて憲兵さんに言つてる自信あるからな（普通は警察？知らんな）

「最古参であるそこの君の記憶を見てそれを記憶しただけだ」

「君以外は全員ブラック鎮守府から避難してきたらしいな」

「君はと、もともとここに配属され新任の提督の面倒を見るはずが左遷より酷い受け色々とされていたつて感じかな？」

「つまり、」

「皆私、と言うか大本営から來た奴は皆嫌いと」

「そうだ、ならわかるよな？」

「「「全艦載機発艦!!」」」

「「「全砲門開け!!」」」

「かかつてこい！相手になつてやる！」＼ (^ o ^) /

「撃て――！」

幾ら嫌いだからとはいえた火力でたつた一人を攻撃するのはコスパ的にも常識的にもどうなんだろう? 一人思う如月提督だつた

「あぶなっ! 馬鹿じやねえの!? いやバカだろ! いいや、馬鹿だな!」

見事な三段活用(?)で今の心情を叫ぶが、そもそも聞こえていないし飛び交う銃弾や砲弾、爆弾に使用場所を思い切り間違えている魚雷をよけるのに必死でもう死にそうである

(やつてやろうじやねえかこの野郎!)

さて、あれから一日経つて執務をしているが何でこんな剣呑な雰囲気で仕事しなくちやいけないのだろうか?

(話難いし、この場所に居づらいんだよ!)

「そういえば、ちゃんと自己紹介してませんよね」

「ぬあ? あつああ」

「幾ら数日しかいないとはいえた自己紹介は大事です、食堂に行きましょう」

その後加賀と昨日名乗った女性が食堂に集合することを放送し、その後共に食堂に向かつた

『凄く注目されているんだが、どうすればいいだろう』と口調が少し変わっている事に違

和感を覚えない空であつた

「自己紹介をすれば良いんだな?」

「ええ、そうです」

「とつととしなさいよこのクソ提督!」

「はつはい、ごめんなさい!」

「当然冗談ですよ? . . . といいたいが嘘ですごめんなさいほんとに殺意を感じるので

ここから立ち去つてよろしいでしようか? 〈ダメです、あああああああ! (絶叫)

「

((((ちよつ威厳まつたくなつ)))

「つという茶番は置いといてじやあ自己紹介しまーす」

いやほんとこんなテンションじやないとやつてけないです

(腹立つ)

えつと、俺は飛行機乗りになりたくて海軍の下士官学校を受けたら何か知らんが士官学校に受かつてしまい、まあ気ままに勉強しようと勉強して試験受けたら士官学校を二年で練習航海の段階まで飛び級。ここまでが1998年だ

練習航海で横須賀からここ単冠湾次に舞鶴、呉、鹿屋と回つて横須賀約10涅位の時

俺達はこんな話をしてた。

98, 08, 15

練習艦内 甲板下

「今日は大しけである、皆甲板からの落下に気をつけるように」

「ハツ」

「では解散」

「空少尉」

「はい?」

当時教官をしていたのは、私の父親である涼介少佐である

「艦底の予備弾薬庫の状況を確認してきてくれ」

「了解」

そんなわけで、予備弾薬庫というかもはや備品置き場となっている区画へ向かつた

「さむつ」

当然廊下には暖房がないし、夏なのに寒いのはこいつが旧式でしかもここは海中だか
らである、私は誰に言つてるんだ?ああ艦娘達か、話が長くてすまないな
「備品庫異常なし」

「かえ'r」

備品の確認が終わり報告に戻ろうとしたときにドオオオーンと爆音が艦内に轟いた

「フア!?」

《総員退艦準備!》

「

「うそだr」

また魚雷当たつたんだけど死んだよね? 絶対死んだよね? まだ死にたくないよ? (なんで一回目で死ななかつたんだろう? 幸運だつたんだね)

《総員退艦!》

この艦内放送を最後に俺の意識が途切れた

んで俺が目覚めたのは軍病院のベットの上だつた

海に浮いてたらしい ここまでで1998年

だが俺は長い夢を見た気がしたんだ

俺にも幼馴染が居てな? まあ男友達だがな

そいつが何度も色んな感じで死ぬんだ。銃で撃たれたり人ならざる異形の者に襲われていたりな。神経が磨り減るのが分かつたからいつそあいつの代わりに死んでやろうと撃たれるときに射線に出て死んだ。

そつから先は覚えてない。まあ気がしただけだしそもそも本当に見ていたとして夢

だから『だから?』っていう話だ…すまない話を元に戻そう

1998, 08, 20

「ひまだな」

「こちらです」

「?」

軍医さんかなとおもつたんだが姿を見てビックリ!! 元帥さんだつた

反射で敬礼をする

「固くならなくていい」

「とは言いますがね閣下」

閣下は少し考えるそぶりを見せたあとにこう言つた

「じゃあ命令楽にして?」

「命令なのにしろじやなくしてなんですね」

「いいのいいの」

「あとタメ語でおk? いま一人だし君は病人、しかも幼馴染の父親だよ? そう固くならないの」

「おつとう」

そう簡単にタメ語になれるかっ!! (おもつきしタメ語じやねえか)

「で、用件なんだけど」

「はい」

「本日を持つて大尉に昇進だ」

「へ？」

「ちなみにあの船に乗つてた300名中生還者50名」

「その50名全員日付をずらして2階級特進」

「250名は殉職とし即日2階級昇進」

(1/6かよ生存率)

「何かあつたら言つてね？それじゃまた

「さようなら」

と、そんなこんなでなにもしていないので大尉になつてしまつた訳だとするとふと遠くの景色がみえた

(コレは鎮守府？女のお子が100人ほど　何で居るんだろう)

「あつみえなくなつた」

「暇だからテレビ見よう」

俺はテレビの電源を入れるとんでもないものを目にした

「先週8月15日人類は制海権制空権共に喪失しました」

「未知の存在『深海棲艦』と呼ばれる存在によつて」

「奴等は現代の技術ではその兵器を用いても破壊不可能といわれます」

「OFF

「うそうそ」

「こりやもしかして俺達を襲つたのつて、、、

いやそんなはず さてもう一度

「ON

「8月15日午前8時練習航海から帰港途中の練習艦隊が襲われそれを皮切りにたつた30分で地球から人間が安心して移動できる場所は陸だけになりました」

「ORZ」

「な
そん時はショックだつたね、たつた一週間足らずで人類の生存圏は三割になつたから

まあそんな風にグダグダしてて8ヶ月くらいたつたある日・・・

1999, 04, 30

「暇すぎ」 ON

「速報です」

「うん?」

「今まで対抗不可能だつた深海棲艦への人類の希望かも知れません」

「在りし日の艦艇の魂を持つ少女達」

「その名も『艦娘』」

「嫌な予感」

「その時丁度ドアを叩いた人物がいた、そうあの元帥だ

「ああやつほー」

「どーもです、閣下」

「ああその報道見てるんだ、だつたら話は早い」

「もしかして・・・」

「うん、如月大尉」

「はい」

「只今をもつて如月大尉は少佐に昇進ならびに、単冠湾泊地への着任を命ずる」

「了解でありますよ、閣下殿」

「ゆつくり出来た?」

「ええ」

「じゃあ実家に戻つてあと半年過ごしな? 書類はこつちで作つとくから」「了解しました」

とまあこんな感じで退院してから実家に戻った

すると、あの日から半年で2階級上がって桂島泊地で提督してゐる父親と60年前に海軍を退役した祖父がいた

祖父の最終階級は元帥だつた

復帰

「ただいまー」

「「「お帰り～」」」

うーん、ホントうちの家族は他人に興味がなさすぎるんですが…

「どこでお前どうやつてここまで来たんだよ？」

「ああつと軍用車で送つてもらつた」

「はあ、お前さ自分の車ぐらいもつたら？ 一々移動に申請出すのも面倒だろ？」

「だつて車高いじやん」

「あーもう、ちよつとガレージまで来い」

家に帰つてまで怒られたくないんだが…

ついてきたくないし、何なら動きたくない

さて、いやいやガレージ前までついてきたのだが、要件が分からぬ

「で？ どつたの？」

「ちよつと待つてろ」

「ふんっ」とどこか抜けた声でシャツターをあげた

「えつスゲー懷かしいんだけど」

「だろ？お前が帰つて来るつて聞いて急いで整備し直したんだ」

そこにあつたのはジムニー（二代目第一期）550vc（1型）水冷直列3気筒の4速マニュアル

10年前の旧式だ

「そこら辺試しに行つて来いよ。ほい鍵」

そう言つて質素な鍵を投げられた（イメージはロツカーナカギ）

「じゃあいつてくる」

「おう」

「エンジン掛けてと、あれ？」

再チャレンジすると普通にかかつた、燃料を絞つていてるのだろうか？

イヤーこの規則的な音は良いね、トルクを出すためだけに当時でも旧式の部類だったエンジンを積むとは、やはり旧式は安心と信頼の実績があるね

「さてとアクセル踏んで」

「確か近くにちよつとした山道があつたよなそこ行くか」

「さあ始めようコイツの試運転を」

「そいや俺良く乗り物乗ると少し性格変わるつて言われるが多分氣のせいだろう
「へつへつ行ける行ける」

ドリフトからの変速三回連続のヘアピンカーブそしてまた変速

「余裕だぜ」

薄笑いを浮かべた そして鎮守府着任したらこれ乗つて行こうと心に決めた
「そんな事してたら夕暮れだな帰るか」

「バック駐車つてこんなキツかったつけ？」

何回かぶつけそうになつたがぶつけたらどうなつていただろうか
家に入ると父が待つてた

「どうだ？」

「ああ最高の乗り心地だつた」

「どうか、あれをお前にやる為の書類は提出したから安心しろ」

「ご飯よー」

こんな感じにはのぼのと過ごしていたある日祖父に呼ばれた

「おお来たか座れ」

「じいちゃんどうしたんだ？ 急に」

「まああなこれなにか分かるか？」

そういうつて目の前に出されたのは旧帝国海軍の軍刀だつた

「じいちゃんの頃の軍刀だろう?」

「ああ」

「それがどうしたの?」

「要るか?」

：は？軍人の名譽と誇りの軍刀を軽く「要るか？」つておかしいだろ色んな意味で確かに格好いい九八式だがこれはある一定の戦果を挙げしかも上層部に認められた超エリートの所持するモノだ（オタク特有の早口）

「いや大丈夫だよ、自分で頑張るさ」

そんなことを言いながらそろそろ自宅休養から戻つて感覚を取り戻さないといけない時期になつてきた

さて今日から軍に戻るのだが‥‥

「何だろう誰かに見られつている気が‥‥」

（何でアイツ目赤いんだ？）

（あれつて練巡事故の一人じゃないか？）

（ああ一死んでるはずの状況から生還したアイツか）

（キモチワルツ）

(ほんとそうだよな www)

「あれって俺の事か？そんな遠いところで言つてくれるとはまだやさしいな」（とはいえ良い歳してそれはないわ）

「てか目赤いとか中二病かよ」

などと言いつつ時計を見ると集合一分前だつた

「やっぱ！走るかせめて」

脳内でカウントダウンをする

3 2 1よーいドン!! と普通に走つたはずだつた
めつちや早かつた

「あつ」やべという前に

「着いた」

これが本当のあつという間ですね

ガチャツと扉を開き元帥さんの前に立つた

「如月空少佐只今長期療養から復帰、及び通常業務への復帰します！」

そう言つて敬礼した それは真面目に

「ん了解でーす」

超適当に返されたんだがえつマジ？これで終わり？2カ月とはいえ一緒にいるんだ

ぜ？

「じゃあ自己紹介するね」

いるかそれ？

「僕は中島海斗元帥です」

(* ≒ ▽ ≒ *) 顔がこんな絵文字見たいですぜ元帥さん

「ではこの書類をお願いします」

「えつあつはい」（それだけかよ！）

そうして元帥の『秘書艦』金剛型戦艦一番艦金剛とも一緒に書類の『the☆山』を

この後8時間近く掛け処理していくた

試験

「あー 終わった」

徹夜明けみてーな声上げてる知り合いの父親が元帥つてマジ?
「じゃあこれで終わり!!皆お休みー」

軽いなあ、れで軍人なら俺もなれるんじやね?・・・あ俺もう軍人だつたわ
「ではそうしますか」

そう言つて扉を開けた

「テートクーグッナインエー」

「ああお休み金剛」

「シイーユー」

元帥は軽く手を振つた、途中で閉められたが
そうして私も自室に戻り寝る

「こんな感じの生活を2カ月続けて昨日ここに来たわけだ

・・・えつ何か言つちやいけないこといつた?

スゲー静か何だが

「あの・・・」

「ん何?」

「私は重巡青葉です聞きたい事があるのですがよろしいですか?」

「ああうんどうぞ?」

拒否しても絶対駄目な奴やん

「何故最初に飛行学校へ進学しようとしたのですか?」

「・・・格好いいから」

「はあ!? それだけで有事の際死亡率の高い操縦士に?」

「うんそうだけど?」

何だろう色んな所から「馬鹿だな」とか「頭可笑しいんじや無いの?」とか言われてる気がするが気のせいだろうと言うかそう言うことにしよう

「でつでは魚雷が目の前の装甲の当たつたのに生還したのは?」

「知らないし、こつちが聞きたい」

「」

「他には?」

「はっ!?えっと最後の方に上官3人に陰口を言われたと言うのは?」

「本當だ、但し小声で200m位離れてた氣がする」

「200!? 地獄耳なんてモノじやないですよ!?」

「まあね」

とまあ軽くぼかして答える

「後は?」

「いえもう大丈夫です」

「そう、それじ 「提督」

「この後工廠に来てください」

「うん? ああ分かつた」

「やめておけ、この流れはろくでもない」 そう聞こえたがこう返す「ああ知つてゐる、こう
いうのは慣れてるんだ」

「でわざわざ工廠まで呼んで何だい? 話かい?」

「いいえ提督着任恒例の行事です」

「そう、で何で空母1重巡1軽巡1駆逐2しか居ないんだい?」

「それは」

次の瞬間腹に強い衝撃を受け煉瓦造りの壁にめり込む

「あんたを潰すのがこの行事だからさ」

そう耳元で囁いた重巡を徐々に遠のく意識の隅で確認した

何で着任早々こんな目に

「だから言つたろう?」

「ははは」

「よくこの状況で笑えるな? もしかしてドM?」

「んな訳あるか」

「じゃ戦闘狂だな」

「戦闘って面白いよね」（ゲームの話）

（確信）

奴さんには現実の方で理解されたようです

「戻らないの?」

「うるせえ黙れ」

「あれか? 女に負けたから? ダサいし!」

「分かったよ戻りやいいんだろ戻りや!」

こいつがいちいち腹立つんですけどそれは

目を覚ますと若干顔がひきつってる気がするんですが何でか分かります?

「！摩耶さん後ろ！」

「えつ」

その瞬間摩耶と呼ばれた子の後ろから頭部に回し蹴りを食らわせ段ボールの山にぶつ飛ばす

幸い出血は無いようなので安心である

「

「なつ摩耶が一発で!?」

「次は貴様だ」

軽巡の腹部を一発殴つて失神させる

つてか最初に食らつた時出血したらしく口内に鉄の味が広がつて気持ち悪い

「お前！」

こつちに迫つて膝蹴りでもする気なのか？甘いんだよなあ、何度経験したか分からんのだから直感で避けることが出来る

「仮にも上官にお前とはな？」

そのまま足を払つて転倒させる

動かなくなつたが脳震盪だろうか

「次は駆逐か」

「ヒツゴめんなさい許して」

「そこまで言うなら」

「んな事言うわけないでしょ!? 人を殴つておいて笑つているようなクズに！ 死ねええ！」

ナイフで突撃か、それならそのまま手首を掴んで首に手刀当てをするまでだ
えつマジ？ 手刀で気絶とかどんだけ？ てかさつきグキツて言つたけど大丈夫かな？
もう一人はさつきの曙つて子か

「えつ？」

これは処理仕切れてないのか、まあそれはそうだろうな
5分位で四人仕留められたら誰だつてそうなるしさらに俺は今笑つているらしいからな、尚更怖いわ

というわけで、手刀で気絶させる（どういう訳だ）

「にしても見てるんだろ？ 鎮守府の皆さんよお」

足音だ、誰かと思つたら青葉さんか

「ええにしてもあの鎮守府TOP5を5分とは凄いですね」

「お前だけじやないだろ？」

「皆自室から双眼鏡で見てるの知つてるぜ」

「さつすが司令官よく見てらっしゃる」

青葉はおどけて見せるが、特に反応せず頼み事をする

「青葉出来ればこの五人医務室に運んでやつてくれるか?」

「良いですよ?」

あつさりすぎない?仲間五人倒れてるのに平氣かい?

「ああその事なら私達一回皆死にかけてますから」

えつ?青葉さんエスパーかい?

「んつ痛いわね」

「駄目ですぜ加賀さんあんた脳震盪起こしてたんだから」

これは妖精さんの軍医 v e r. である

「そう、つて他の皆は!?」

「静かにしてください、皆居ますよ青葉の姉さんが運んで来ました」

「後で青葉さんにお礼を言わなきやね」

「皆の容態は?」

「摩耶姉さんは衝撃による気絶で、貴方は床にぶつかって脳震盪、天龍さんは腹部への強いショックで失神、更に霞と曙ちゃん達は首チヨップで気絶」と、矢継ぎ早に軍医さんは言う

「霞と曙ちゃん何か漫画みたいね」

「悪かったですね漫画みたいで」

「目を覚ましたかい？ 今日はゆつくり休みなつてあの人があ」

「ちつ頭がいてえ」

「私は首よ」

「やべえ腹超いてえ」「天龍貴女はトイレに行つてきたら？」「違うわ！」

「そういえばあの人つて？」

「ああ恒例行事の相手だよ空つて言つたつけ？」

「あいつこの後どうすんだ？」

「ずっとここに居るつてさ」

「ましで！？」

「いつまで居るかしらね」

「3人のクズ達はあれやつてすぐ辞めたわよね」

執務室

「死にかけたつて言つてたがどういう事だ？」

「分かるんじやないんですか？」

「いいや？」

「これ以上あれを使うと疲れるからな

「ここに居るのは皆後少しで沈むつて時に此処に丁度古鎮守府があつたから」

「皆所属した鎮守府はバラバラだけど皆グラックから逃げて来たからいつそのことここ
で暮らそうって成ったんです」

「へえ」

滅茶苦茶ドシンプルにまとめた青葉に対しそれを見習いたいと思った空であつた
そうしてその日は青葉と仕事を三時間位して20：00になつたので寝た

「おやすみなさい」

「ああありがとうな」

そうして青葉は部屋に戻つた

能力

「さて寝るか」

あれから着任後の手続き書類の最終確認をして発送した
そんなこんなでもう21：00だ

「眠い」

短い一言を発し、そのままモゾモゾ布団に潜るとすぐに寝てしまつていた

「よう」

「んあ？」

「ああもう寝たのか、ここにいると寝た気がしないんだがなあ」

「そいや今日で俺達がお互いを認識して2カ月だな」

そういえば絶叫したのは2カ月前だったか、忙しかつたせいか時の流れが早かつたな
と少し他人事気味に考えつつ返答する

「そうだな」

「そういやお前さ名前とか何かあるのか？」

「あ？そんなもん無いぞ？強いてあげるなら『能力強化』かな？」

「なんだそりや」

「悪かったな」

「全くだ、でも何故？」

「いや君とかつて言いづらいと思つてな」

「お前が言い始めたんだが？」

「まあ勝手に決めてくれて良い」

「何で俺の周りには適當な奴しか居ないんだ？名前なんてネーミングセンスのない人間に『適當で』なんて言つたら酷いもんになるぞ

「分かつた」

「ところでなぜあの子たちに俺のこと言わなかつたんだ？」

「能力なんて使いこなせてなんぼだろ？」

「…はあ、付与なんてそんなアニメじやあるまいし」

「まあそれだけじやないが」

「なにかいつたか？」

「いいや？」

「どうかそんなどより

「ん？」

「もう〇八：〇〇だぞ？ 大丈夫か？」

「えつ！？ マジ！？」

「加賀とやらが起こしに来てるぞ？」

「じゃいくわ」

「はいはーい」

と起きたは良いものの・・・なあにこれ
超鋭い眼光でこつちを睨みこう言つてる

「起きて下さい、提督」

何だその間は まあ着任2日目だから仕方ないのだが

「んおはよう」

「とつとと仕事をしてください」

「はい」（威圧感凄い）

「そういえば貴女頭大丈夫だつた？」（なんか悪口みたいだな・・・）

「加賀でいいです」

「おう」

「一応大丈夫でした」

「良かつた」

「ただひとつ聞きたい事があります」

「何?」

「何故我々を医務室に?」

「…バレてらっしゃる

「いや?俺じやなくて青葉ですよ?」

「そうですかでは…」

おい誰だひとつって言つてたのは

「何故ここから出ていかず留まろうとしているのですか?」

「あー面白そだつたから?」

「やはり馬鹿ですね貴方は死にかけたのですよ?」

「んで?」(ほつとけるかよ)

「あーもういいです」

「そう着替えたいからちよつと出でもらえる?」

「分かりました」

そう言つて出て行つた

さて寝間着から士官服にと…思つたのだが

「あれ?」

そしてまた目覚めたのは医務室だつた
医務室

「目覚められましたか」

「ここは?」

「医務室ですね」

「そう、ですか」

ちなみにこの軍医さんは人間である

何故倒れたかと言うと昨日急に能力を使つた反動らしい

何でも能力には体力を使い体力のない俺じや一晩じや復活できなかつたらしい
全て奴に聞いた、あいつに教えられるとは屈辱だぜ

「大丈夫ですか?」

「ええ」

「なら執務しても大丈夫です」

「ああ後睡眠はよく取つて下さいね」

「分かりました」

「と言うか結局寝間着のままである 着替えなければ
ではつと床に足をつくと

「冷たつ」

「ああここタイル張りですよ」

頼むから先にいってくれ

自室と執務室は隣り合わせの上足元は絨毯だから油断していた

「軍医さんスリッパあります?」

「ほい」

投げるな! 案の定片方上下反転して着地したためとても履きづらい
「ありがとうございました」

「またねー」

手を振つてゐるが、扉を開けて最後まで見ずに閉める。どつかで見た氣がするのは気の
せいだろう

さて戻るか

ここから執務室は目の前の階段を上がり直ぐ右側の突き当たりにあるだが地味に遠

い

「しつ司令官さんおはようなのです」「うん?」

「ああと君は、」

「電なのです」

「そうかおはよう」

「周りの皆は？」

「えっと右から順に雷ちゃん暁ちゃん響ちゃんなのです」

「みつ皆合わせて第六駆逐隊よ」

「よろしく頼むよ」

「何か有つたら手伝うわ」

「いつ行くわよ」

「「さよなら」よ」なのです

うん息ピッタリだがやはり距離を感じる

執務室では加賀さんが黙々と書類の山を片付けていた

カリカリとペンの音が心地良い

「一緒に片付けて下さい」

えつエスパーか？こっちを見ずにだと！？

「雰囲気です」

この鎮守府にはエスパーが沢山居るようです

「さてとやりますか」

・・・らくーん？ その書類にはこう記してあつた

アメリカ合衆国ラクーンシティにおいて起きた生物事件について
1998年9月に起きたラクーン生物事件について我々日本海軍は数名陸路において
技術者を派遣する事にした
ついては貴鎮守府から軍医を派遣隊に編入する事にした

返答は今月20日迄

日本海軍総司令部 C I A C B P より

「マジで!？」

「何ですかうるさいさつきとやつて下さい」

「おつとう」

「てか加賀さんちよつと大淀さん所行つてくる」「えつちよつまつて」

閉めた、人が話してるときに・・・ひでえな、つて自分だつたか
さて急がなきや

「ここ電信室は立て付けが悪いらしくギギギと言うデカイ音と共に開いたが：正直超ビックリしました、はい」

「大淀さん居ます？」

「何ですか？提督」

「この鎮守府には二通りの艦娘が居る

一、人間への恐怖はあるが表に出さない

一、人間への恐怖を表に出しまくる

大淀さんは上らしい（因みに青葉も？）

「あああの少し時間ががあれば後で打つてくれないかなと」

「解りました、」それと大淀で良いですよ

「あつはい」

「そういうや軍医さんに聞くの忘れてた

「じゃ10分後」

「分かりました」

「軍医さん居ます？」

「医務室に行くとシーンとしていた、ボツチ見たいじやんかよ悲しい机の上に何かある

私は只今中庭にいます（○・ω・○）

中庭かよ！

中庭

「軍医s」

「はわわ痛くないのですか？」

「だつ大丈夫よこれくらい」

それにしては凄い涙声なんだが

「消毒もしたし大丈夫だけどちらと足下見なきや駄目だよ？」

「はあい」

「じゃ二人のどこに行くのです」

「うん」

「あつありがとう」

「楽しんできなー」

「随分明るいな態度がまるで違う

「うお!? 居たんですか？」

「居たよ失礼な」

「で何用ですか？」

実はなど前置きをして書類の内容を伝えた

「そうですか分かりました行きましょう」

「そうかでは伝えてくる」

「じゃあ大淀さん頼んだ」

「提督」

「?」

「提督やつてみては?」

「えつマジ?」

「はい」

「やつたああ念願の來たああ」

「えつあつうん」

「でつではどうぞ」

「おう」

「だが出来る気しない」

「早く早く」（それが狙いですから）

（単冠湾泊地から大本営へ八月十六日の書類は受理しましたであります）

「これを10秒で打電した すると・・・」

「えつちよつまつて速くないですか？」

「いや？ 全く、士官学校じや皆遅くて打電速度1位だつたけどね」

「（それなら出来て当然ですね残念です）

「まつまあ速いだけでちゃんと伝わりますからね」

「だね」

「ありがとうございます貴重な体験させてくれて」

「こつこちらこそ」

何か超綺麗な敬礼された何故？

空襲

「さて戻つて加賀さんと書類片付けなければ」

「どこ行つてたんですか？」

執務室にもどると殺氣すら感じられる鋭い目付きが怖いです

「いやーちょっとね」

「ちよつと、何ですか？」

「電信室に行つてました……」

「そうですか」

「ああ」

「早く書類片付けて下さい」

「……はい」

とそんなこんなで日も頭の上近くになつたお昼頃

俺は少しサボり気味に窓の外を見ていた

『なあ』

『ん？』

『何か来てるぞ?』

『何が?』

『窓の外を前にして真っ正面を見てろ』

『なんでそんな事……』

『提督』

「はつはい」

「仕事をして下さい」

「少し待つてくれると嬉しいかな?」

心底嫌そうな目でこちらを見てくる加賀さんには意識を向けずに頭の中の奴に話しかける

『でなんだ?』

『そのまま少し待つてくれ』

直後目の辺りが少し暖かくなつた気がすると視界には青い海と蒼い空を背景に浮かぶ黒い虫のような物が30個程

「大体距離100000高度30000数300程度戦爆連合かなあ」

と、そう呟くと加賀さんが瞬時に反応する

「何て言いました?」

「へ？」

「今貴方は何と言つたのですか？と聞いているのです」

「えーと距離10000高度3000数300程度戦爆連合かな？って言つただけですよ？」

（いえそんな事解る筈はないわ）

（でももし本当だつたら）

何か凄い考えてる

ガタツと言う音を立てて椅子を引き扉に向かつて行つた

「どうしたんですか？加賀さん」

「少し用事を思い出したので大淀さんのところに」

「そう」

その時けたたましいサイレンが鳴つた

この音は敵機来襲の報だ

「くっそ、マジかよ！」

するとスピーカーから

『敵機来襲！距離8000高度3000数300の戦爆連合が只今鎮守府沖を北上中』
『防空艦隊及び基地航空隊第一航空隊は至急出動してください』

と放送がはいつた

(くつそこんな時どうすれば良いんだ！もし、あの娘達が怪我したら……いくら修復すれば治るとはいえ痛いだろ)

そう考へてゐる内に防空艦隊の零式艦戦21型250機と基地航空隊九六式艦戦72機が飛び立つた

(そうだ電信室の倉庫から軍用無線機でも持つてくれれば共に出れなくとも戦況が分かりやすくなるかもしねん)

「さて今日は戦爆連合か」

そう呟くのは先の大戦で自称202機を撃墜したという人物と同じ戦法を使用する

妖精である

「信頼してますよ隊長」

「腕がなるな」

「敵機発見、高度4000に上げるぞ」

「了解」

「徹底的に叩き落とすぞ」

「やつてやりましょう！」

「我々の意地を見せてやろうじやないか」

「おうよ」

「母艦航空隊は高度を上げるらしいがどうする?」

「我々はこのまま3500位で良いんじゃないか?」

「だな」

「敵機の直上だ、全機突撃!」

最強の妖精は20mm一連射で1機を撃墜する

その他の搭乗員も長年の熟練技で敵を落としていく

「母艦航空隊が突撃したぞ」

「我々は後ろから一撃離脱だ」

「飛行隊長!!」

「何だ?」

「第四中隊が3機被撃墜です!」

「何だと!?」

「飛行隊長直上!!」

「なんだと!」（危ねえぎりぎり脱出したが殺しに掛かってきてる、奴さん本気で潰しにかかるてきてるな）

「飛行隊長」

「くつそ取り逃した」 そうある熟練搭乗員は言つた

「基地航空がどうにかしてくれる」

「こちら基地航空隊第一航空隊だ」

「どうした」

『こちら3機が撃墜されたが残りで追つてゐる』

「どうか」

『そちらはどうか?』

「こつちは14機だ」

『そうかでは交信終わり』

「くそ全く墜ちないぞどうすれば?」

「ならいつそ体当たりか爆撃機の弾倉を狙つて爆破だ」

「戦闘機は?」

「俺ら古参に任せろ」

「現在鎮守府沖7000m付近の空域にて敵戦爆連合300機程と我々の航空隊全25

2機が交戦中」

「我々は基地航空機3機と母艦航空機14機が被撃墜」

「被撃墜機はどうなるんだ?」

「消滅です」

「撃墜は？」

「重複もあると思いますが、母艦航空隊が計126機基地航空隊が計36機だと思います」

「残りは？」

「戦闘機が約80爆撃機及び攻撃機は約60機かと」

「そう……か……良かつた」

「大淀君」

「はい」

「第二航空隊に出撃命令上げれん機体は格納」

「それと全艦娘に避難勧告を」（出さなくとも大丈夫かとも思つたが、案外残つてゐるからな……）

「分かりました」

一時間後

「只今上空援護から第二航空隊全機が帰投」

「第一航空隊の全機及び母艦航空隊の全機が帰投中のことです」

「被害はこの書類に」

被害状況について

母艦航空隊 零式艦上戦闘機二一型14機 被撃墜

基地航空隊 第一航空隊

九六式艦上戦闘機 3機 被撃墜

搭乗員

母艦航空隊 13名軽傷 1名顕現不可

基地航空隊 1名軽傷 2名顕現不可

「顕現不可の3名を除いた全搭乗員と艦娘を食堂に集めてくれ」

「分かりました」

「そう言えばその無線機は何ですか?」

「ああ倉庫の引っ張ってきた」

それは『海軍TM式軽便無線電信機』と書いてあつた

「それは確か旧海軍で使用されていた海軍TM式軽便無線電信機でしたつけ
「ああじやまあ10分で食堂集合と伝えて」

報告

あれから10分ほど経つて今は食堂の方にあるステージの艦娘達から見て右側に座っている

「ふう」

少々考え方しながら・・・

「よう」

「えつ何でお前居るの?」

俺は白くて何も無い空間に座っている

前にはお前といつた黒づくめの男(?)が座っている

「お前がここに来たからだろ」

「つまり?」

「周りから見たら寝てるか凄く考え方してる人に見える・・・はず」

「マジか」

「なら考えた名前を言つて戻るわ」

「えつ」(マジだつたのかよ)

「波音でどうだ？」

「分かった」

「なら俺は今から波音だ」

「そろそろ始まるぞ」

「んじや行つてくる」

『さあ始めようか、面倒事を一つな』

そう小声で言いながら演説台のようなものに乗つた

「えー今から先の空襲による被害報告を頼む」

騒然となつたあちこちから「あいつは報告書を知らないのか」とか聞こえる

「静かにしてくれ、いくら書類があつても対策とか考えなきやいかんだろ」

「ということで防空艦隊旗艦加賀さんと第一航空隊隊長及び第二航空隊隊長報告よろし

く

「分かりました」

「了解しました」

「敬語あんまり好きじゃないんだがなあ個人的に」

「我々防空艦隊所属一航艦赤城 加賀 龍驤 凤翔に艦載している機体全265機の内

14機が撃墜、消滅しました」

「続けて我が第一航空隊に所属する72機の内3機が撃墜、消滅」

「我々第二航空隊は損害なしであります」

「了解、それと艦娘、妖精構わず君達行動が全体的に死に急ぎ過ぎだからもう少し生きること考えよう?」

「「「な!」」」

「もし帰還が困難な場合は雷撃処分を望みます!」

「何故?」

「私が足手まといになつて皆が死んでしまつたら怖いですし、皆を危険に晒したくはありません!」

「加賀さん、いや皆にこの際言つとくから聞いて?」

「はい」

「お前らバカじやねえの?」

「はい?」

「だつて戦場で怪我したら殺して?アホのすることだろそんなん」

「何が言いたいんや」

目付き鋭く言つてきたのは関西弁を話すサンバイザー付けて赤い服着た口りつ子である

「皆を巻き添えにするのが怖い？怖いなら逃げりやあ良いじやん、それにまづまづ何で戦場で怪我する前提なん？」

「逆に言わせてもらうけどアンタ戦場怪我せえへんと思どるん？」
「あはは、ないない！んなもん戦場じゃねえだろw」

「てめえ」

「そうです怪我しない戦場はありません、私達はそれを痛いほど知っています」

「でもな？怪我のリスクを減らすことは出来るし、リスクが減りや怪我しても軽く済む」

「ほんとお前らの前任どんだけ馬鹿な戦術組んだんだよ」

「そも大前提として仲間を助けたいなら死ぬんじやなくて生きて帰つてこいよ」

「もう仲間の泣いた顔を、辛そうな顔を見たくないなら生きろ」

「命令はあまり好きじやないけどこれだけ言わせて？」

「生きて！護国の！鬼となれ！」

「良いな！」

開いた口が塞がらない艦娘達の心中は『散々自分勝手な事言いやがつて』と、まあそ
んな感じだろう

「・・・総員解散だこの後は自由にする」

総じて皆帰つて行つたが大淀だけはこちらに向かつてきた

「何故あのような命令を？」

「俺は目の前で誰かが死ぬのを、誰かが恐怖に怯えるのをもう見たくない、そんな身勝手な理由さ」

「そう……ですか」

(もしかしたらこの人は……)

その後もすれ違いや誤解などから喧嘩等も起こつたが、そんなこんなで一年たった
「夜だし、車乗つて近くの山でも行くか！」

（ここ）は俺が軍用車庫の横に併設したもの（レツツでいーあいわい！）
「よいしょっと……あり？」

キーを回すがかからない3回ほどしても駄目だ

今は冬ではないため低温によるものではない

ならば何か？エンジントラブルだろう

ボンネットを開け中を覗くと……

「ふむふむ……なるほど分からん」

「カバー掛けて置いとこ」

しそうがなく執務室に戻り鍵を適当にしまう

「何で掛からんのさあー」

「まあいいや書類仕事でもするか」

そうして手に取つた書類に気になる事が書かれていた

先日行われた外地との無線通信試験について

我々人類はこれ迄無線は深海側に漏洩する危険があるとして使用していなかつたが國連軍情報調査部によると深海は友軍との連絡を独自の方法で行い遠距離については人類が使用していない周波数を利用した無線通信であることが判明

これによりショートランド ハワイ間にて無線通信試験を行つた

これからは情報伝達が速く出来る事となつた

「そーなのかー」

余りにも暇なので自室で銃の整備でもしようと思い立つた（仕事をしろ！）

「さーてど」

右の引き出しからガンクリーナーとペーパーとブラシを取り出す

因みに俺の持つている九四式拳銃は提督になつた時に大本營から貰つた物だ

「えつと銃身弾倉その他諸々つと」

その後二十分掛け分解整備をしたが正直面倒だつた
機械いじりの好きなアイツが居ればアイツにやらせるのだがな
出来れば狙撃銃も欲しい

「つてもうこんな時間か」

机に置いている時計は一一一三〇を指していた

「寝るか」

そうして布団に入つたのだがね・・・寝れんのだよ

「本でも読むか」

寝ながらその後一時間近く読書をしていつの間にか寝ていたようだ
「よう」

「あ？ ああ」

「前に言つてた付与の件だが、この一年研究したが八割がたままでしか無理だ」
「そうかそれで十分だ」

新米提督着任して一年が経つ

修理

「だが能力にまだ慣れないと…」

「だろうなまだ一週間位だしな」

「つ！最近予知夢みたいのを見るんだがあれは何なんだ？」（ああビックリした）

「まんま予知夢さ」

「マジ？俺超能力者や！ワーカーイ」

「いいや人間は時々予知夢を少しだが見るらしい」

「俺はその頻度を上げているだけだ」

「マジかあ期待したのに」（…）

「はいはい」

「そろそろ時間か？」

「ん？ そうだな、んじや頑張れよ」

「おう」（何だろう親みたいだな）

(昨日の車のエンジントラブル原因何だろうな)

「妖精さんに頼むか」

ね
正直ひつくりしたまあ爆音というわけではなく普通の話し声位なのだが油断してると大したことでもないのに「ウオツ！ふあ○く、阿呆かいね！」ってなることがあるよ

「心臓に悪い・・・さてと整備妖精はどこだつけ?」

「どうかしました？」
そう言つて扉を開くと加賀がいた、驚いた顔して

「いいえ何でも」

「そういえば起床ラッパはいつも？」

「いいいつも提督が起きないので皆さんに協力して貰いました」

「そつかー早起きは大事だね」

「それでどうがいい？」

「あー工廠の方へ少し」

——何故？

「整備妖精さんに自分の車を見て貰おうかと」

「なんせ機械関連はからきしなんでね」

「そう〇八〇〇に間に合えばいいわ」

「ありがとう」

さて工廠にきたは良いものの、コミュ障を発揮して話せない

「えつとえーっと」

「どうかしました?」

「うおつ」

「何ですか?」

「君は?」

「私は整備妖精班の班長です」

「そうか」

「なら君に頼みたいのだが整備妖精を一人回してくれ」

「どうかしました?」

「いやね?俺の車が昨日壊れてしまつてね・・・あいにく車には疎いもんで」

「わかりました私が行きます」

「ありがとうございます」

「では八時に車庫でお願いしますね」

「了解です」

「さてとこれか」

「にしても旧式ですね」

その時整備長は思つた（鍵借りるの忘れた）
ということで

「借りに…行くか」

コンコンと扉を叩く音が聞こえた

「どうぞー」

扉が開き整備長が入つて來た

「どうかした？」

「鍵を借りに」

「ああ」

投げたら見当違ひの所に飛んでつたもうヤダ
何かキヤツチしてゐる、運動神經良すぎやしませんか？

「ありがとうございます」

「いやいやこちらこそおねがいします」

「分かりました」

「さてと」

鍵を回してもモーターは回るが発動機は掛からない

「プラグかな?」

ボンネット開けてキャップ開けてプラグ見たら

「これは寿命だな」

「提督終わりました」

「早いな、でどうだつた?」

「分かりましたよプラグの寿命です」

(； 。 Δ。) こんな顔に一瞬なつた　おいおいここも点検しといてよ
「交換部品ある?」

「ええ」

工廠備蓄倉庫

「これとかですかねえ」

「・・・」

それって飛行機のプラグじゃね?

「もしかしてそれって」

「はい零戦（妖精仕様）のです」

「絶対入らんな」

「ですよねえ」

お前わざとだろと思いつつ他の物は有るかと尋ねると

「これとか？」

「それ90式戦車だろ」

「はい」

「じゃ無理だな」

「ですね」

「この近くに車屋ある？」

「北海道本土になら」

「そう」

「なら行つてくるわ」

「ではこちらに俺達の調達の時使つてゐるのがありますので」

「了解あとプラグ一個貸して」

「どうぞ ですが何故?」

「いやプラグの番号分からんから」

「ああ」

「じゃ」

そうして俺は整備長に見送られ出発し北海道のとある港にボートで乗り付けるとタクシーでオートなバックスに向かつた

「おじさんありがとう」

さて来たは良いもののどこにプラグ置いてあるか分からん

「あのー」

「はい」

イケメンの部類に入る人が応対してくれた（チツビーセモテんだろ？死ね！）→非モテの妬みである

「このプラグつてどこにありますか？」

「ああそちらでしたらこちらに」

入り口から入つてすぐ右の突き当たりを案内された（てか、ここかよ！）

「このプラグだと思います」

「ありがとうございます」

番号見たらおんなじのだつたので三本で足りるが予備として計六本買つといた
「ただいまー」

「お帰りなさい」

「これで頼める?」

「はい承知致しました」

30分後

「終わりましたよ」

「ありがとうございます」

「いえいえ」

「じゃあ試運転行つてきます」

「行つてらつしやい」

「さて行きますか」

そう言つて鍵を回すと・・・やつたぜ掛かつた
エンジンを吹かした後ギアを入れて近くの山を一周してきた

「最高」

「あとこれ混合比とかベルトとかオイルも変えてね？」

車庫に入れて執務室に戻った

「提督」

「はつはい！」

「何やつてたんですか？仕事は？」

「車の部品買つてきて直して貰つてました」

「仕事の方は？」

「空き時間に終わらせました」

「ならないです」

良いんだ……（ ； ～ ） 今度飛行機乗りたいな

「加賀さん」

「はい」

「飛行機を操縦してみたいです」

「はい：はい！」

「だから飛行機乗りたいです」

「馬鹿ですか？ いえ馬鹿なのは今更でしたね」

「まあいいです明日私の自慢の子に話しちゃいます」

「俺は馬鹿じやねえ！・・・まあありがとう後お休み」

「ええお休み」

今日は疲れたとか思う間もなく寝た

「よう」

「おう」

「飛行機頑張れよ」

「ここんとこ波音さんがちょっとばかし優しいです

「ああ」

「それだけだお休み」

「お休み」

その後飛行機で赤レンガ造りの建物の上を旋回している夢を見た

新米提督、パイロットになる

飛行

朝起きるとそこにはいるのは加賀さん……では無く妖精さんだつた

「ああえつと君はどちら様?」

「ああ私は加賀艦載戦闘機隊隊長です」

「用件は?」

欠伸をしながら言つた

「昨日加賀さんから提督が飛行機に乗りたいと言つてるのでその教官をしてくれと

「そつか」

「まあ楽にしてて」

「はあ……了解しました」

「では提督」

「?」

「早速飛行服に着替えて下さい」

だよなあ、まあ士官服で飛行機は乗れないわな

「そいや飛行服は?」

「?当然自室もしくは予備が倉庫に」

いやなんで、ここに持ってきてくれんのや

「いやサイズ分かんないですし」

「やつぱりこの鎮守府エスパー居すぎだろ」

「人間観察力が高いと言つてください」

「はい」

その後俺は私服であるジーパンに茶色のパーカー、あと漆黒のロングコートに着替え飛行機の備品庫に向かった

「では身長を教えてください」

「えーといくつだっけな」

あれ? まじでいくつだっけ 最後が士官学校の入学式の身体測定で173cmだつたよな

「ごめん分からん」

「ではそこにある身長計に乗つてください」

ス一つと上のレバーミたいなやつ(あれなんて言うんだろう)を俺の頭の上に当てた

「えーと 178cmですね」

「178cmくらいのやつは確かにこの段ボールの中に……」

「あつたあつた」

それはビニールに包まれていた

「どうぞ」

「あつうん」

出してみると飛行帽やら眼鏡やら飛行服やら諸々一式が入っていた

「更衣室は無いので自室で」

「君達はいつも?」

「いえ一式全て就寝時以外着用しているので」（そもそも艦内勤務ですしお寿司）

「そう」（旧式イヤツホオイ……でもなんでここに旧式あるん?）

そうして俺達二人は俺の自室に戻ることにした

「じゃあちよつと待つてて」

まず飛行服専用下着的なやつを着てそれから飛行服そんでブーツに帽子に眼鏡をと

「ふー終わった」

だが俺飛行機乗れるのか?

俺は人間でも飛行機は妖精仕様

「あー終わりましたね」

「安心してください手は打つてあります」

うんやつぱりエスパーだな

その後明石と名乗る女の子に小瓶を3つ渡された（そういうえばちよくちよく日曜大工に、と工具を借りに来てもここ誰も居なかつた氣がするんだが……）

一つは変化用もう一つは治る用後のは訓練用で二時間の制限があると言われた
後は飛行場に行き訓練を二時間ほどした

三時間程後の自室前

「ああ疲れた」

「そりやね」

「ですがたつた一回でほぼ完璧ですよ」

「後は?」

「経験ですかね」

「そつか」

その後仕事仕事就寝仕事仕事飛行仕事仕事就寝飛行みたいな感じで半月過ぎたある

日……

最近やつと普通の提督が普通の鎮守府に着任したてぐらいの好感度には上がったのか?と思うようになった

まあ実際は一年分の慣れがあるからもう少し上かもしれないが

何だろう?物凄い走る音が聞こえるぞ?バーンと音を立て執務室の扉が開いた

「提督!!」

「どしたの?そんなに慌てて」

「これが落ち着いて居れますか?」

「?」

「ふう」(でも一息着くんだな)

「今待合室に陸軍少将閣下と大佐さんがいらっしゃいます」

「ええ!まじで!」

「早くしてください」

「おう」

「よし完了」

「では待合室へ」

待合室

「えーと、用件は?」

大佐さんは妖精さんらしい

「今回ここに来た目的は先日行われた我々陸軍のアツツ島及びキスカ島侵攻作戦で起きたことについてです」

この後三時間くらい会談が続いたので話をまとめると先日の作戦に陸軍揚陸艦あきつ丸という艦娘がここ单冠湾の沖合10浬程で急に消息不明となつた

陸軍基地からでは哨戒機が届かないからお前らが探せということらしい

まあ少将さんは俺達の事を疑つてはいるようだつたが

「あーもうどうすりやいいんだよ! めんどくせーな!」

「まあ大人しく従つていた方が後々楽ですよ?」

「だろうな」

「今がお昼頃だから昼食終わつたら編成組むか」

「分かりました」

だが基地航空隊には九六式艦戦しかなかつたような?

「航空機は?」

「基地航空機はそれぞれ艦戦艦攻艦爆4中隊づつです」

「そつかじやあ艦攻隊に任せよう」

「では昼食にしましよう」

一時間後 基地飛行場

「では艦攻第一中隊にはこれから各小隊毎に哨戒に出でもらう」

「他の中隊は1日交代で出番がくるから」

「なんかあつたら言つて? 文字通り飛んで行くから」

「「「了解!」」」

「では哨戒開始!!」

「本当に言われたら行くんですか?」

「まあ状況を分かつてた方が良いでしょ」

「ですがもし深海の仕業だつたら?」

「その時は加賀さん達ですね」

「分かりました」

「そうして一月ほどたつた

1ヶ月後

「まだ見つかんないのー?」

「捜索範囲はここを中心に半径20浬ですしね」

すると、甲高い金属音が無線機から聞こえてきた

「おいこれって」

「ええ電信ですね」

前に拾つたあの無線機をいつもはラジオとして使つていたのだが、捜索開始から電信の周波数に会わせていた（無線なのに）

「提督!!」

「ああ」

扉は静かに開けましよう

「哨戒中の九七式艦攻第1中隊隊長機から入電」

「我敵鎮守府らしき物発見す 偵察を続ける とのことです」

「よし」

「だが第1小隊はそろそろ燃料が切れる頃だろう」

「帰還命令を出してくれ」

「俺は第2と第3小隊と共に出る」

「了解」

ようやく例の陸軍艦捜索に前進が見られたな

「お気をつけて」

「ああ」

その後飛行服に着替えて出撃し第1小隊と交代した

パイロット提督、異世界で撃墜される

撃墜

さて、俺は九七式艦攻に（妖精として）搭乗して捜索海域上空を飛行中である
まあ俺は飛ぶのが好きだから操縦手として乗っているのだが、この中で階級の一一番高
い俺が機長とかいう不本意である

「フフーフフンフン」

「機長、少し静かにしてください」

「はい」

「ですが先ほどのは雪の進軍ですね」

「よくわかつたね」

「機長!!」

「うん?」

「大変です」

「何が」

「大海原にいたはずが急に陸地に」

「そんなわけないだろ。周りに陸無いし」

「本当です」

「うそうそってえええ!!」

「本當だ! 陸になつてゐる」

「何してたんですか?」

「無線機を持つて來ていてそれをラジオに使つてたりして」

「正解! 何で分かつたの?」

「勘です、てか操縦に集中してください」

「銃手に怒られました……(̄ ̄ ̄)」

「提督! 三番機イー!」

「はいはいなんですか?」

「鎮守府らしきもの発見!!」

「そう無線機から聞こえて來たと思つたら……

「あれ? 一番機! 右翼が炎上しているぞ!!」

「マジかよ!! これは翼が折れるヤツだな、俺らは脱出する!」

「おう」

赤レンガの建物にライフルを構えたメイドさんがいる

まあまさかねと思つていたらメイドさんが発砲

「は？・嘘だろ？・左翼被弾！！飛行不可！脱出する！」

冗談であつてほしい、ライフルで飛行機撃墜とか正気じやない（日本軍に居た？気にすんなそんなもん）

そんなこと考へてる間に四番機も撃墜

「あと俺らだけか」

「電信妖精さん三機の撃墜場所記録して」

「了解」

「えつ？」

「機長、左翼に被弾。俺の真上のガラスを割つて行つた」

「燃料が漏れてる」

「更にもう一発被弾！」

「駄目だな、皆脱出するぞ」

「了解」

バシュツと飛び出すと同時に翼が折れた、危ねえ

一応これまで鎮守府にあつた九九式小銃を持つてきただが

「着地と」（前に消滅がどうたら言つてたけど俺は大丈夫なのか？）

そう思いつつ解除薬を飲み、スコープの倍率最大にして一発装填、発射
「いつたな」

すると左にズレてメイドさんの右頬1mmを通過
眉間を狙つたんだがな…

「くっそ」

そしてまた覗くと、こちらに銃口を向けて撃つて来ました

能力持つて良かつたぜ反射神経の反応速度を上げてスコープから目を外す
「チツ、スコープが！」

スコープ破碎したんだけど

「なら視力をと」

「やべ」

銃口を直撃したのですぐ放り投げて伏せたら一瞬で爆発した

「なんでだよ！だつたらこの九四式で!!」

まずはここから逃げる

200mほど逃げてから走り撃ち

「何で当たんないんだよ!!」

見事に六発外す

「あと一発か」

「この人寝てて大丈夫か？」

あのあと10分ほど走つてこの建物の正門前まで來た
走つて入ると波音に止まれと言われた
すると意識を切り替え波音が残りの一発を撃つた
シャコンと網が吊り上げられた

「危ないな」

そのまま歩いていくと急に重力が消えた、といふか落ちた
「ヤバい」

着地失敗、足折つた

いつも笑つて過ごすようにしているがこれは笑えない
足があらぬ方向を向いとる

(波音くんや足直して)

(ヤダメんどくさい)

うそやん、終わつた

するとコツコツと足音が聞こえてきて俺の前で止まつた

暗くてよく見えないが人ということはわかつた

「ここは……どこですか？」

初見の人には普通敬語、これ人間の常識

「紅魔館の牢屋です、私は弥生人間だった者です」

人間だった者？ならあんたどういう存在なんだ？

そんな疑問を抱えながら自分も自己紹介した

「俺は如月空です、日本海軍の提督やつてます」

「まあとほ咲夜さんに聞いて下さい、それじゃ

「え？ ちよつ、待つ」

咲夜さんて誰？もしかしてあのメイドさん？

コツコツとまた足音が聞こえて来た

「あの」

「はい」

「私は咲夜と申します、銃の方を預かりに参りました」

まあ普通捕らえてるやつに武器は持たせないわな、ということはここでは捕虜になるのか？

「分かりました、はいどうぞ」

俺は九四式をホルスターに入れ渡した

「物分かりが良くて助かります」

なんだろう可愛いんだけど目が笑つてなくて怖い
やはり侵入者に慈悲はないということか

「では」

しばらくしてまた足音が聞こえてきた

弥生と咲夜さんと海軍の輸送妖精さんだつた

「提督！迷惑掛けてないで帰りますよ」

「え俺の心配は？足の骨折てるんだけど」

「知らないですよ勝手に出撃して怪我しても」

「マジか…酷くねえ？」

まあそりや普通司令官や提督といったら鎮守府で指揮してるもんな
というか君達行動早いな

「茶番は他所でやつて下さい」

怒こられました（—；▽；）

「あ、すいません、それはそりやうやつて帰れば良いんですか？」

「紫つていう人が貴方達に接触する筈です、その人について行つて下さい」

「分かりました、うちの提督が迷惑掛けてすいません」

「ほんの気持ちですが、うちの鎮守府の電話番号です」

電話番号渡してどうする？何でも屋つてか？そもそもまたここに来れるか分からん
のに……。

「それでは、ご迷惑をおかけしました」

背負われた、凄く雑に

その後荷台に載せられ応急処置を受けた

そういえば自分で治せるんだつた、五分で治したつた

まああれから本当に紫という人がきて帰り道を教えてくれた

そして何事もなく終わつた

「あつ九四式置いてきた」

終わつた、もうあんな所は行きたくはない

だつて怖い人達いるんだもの

「まあいいや」

そうして長い長い10月のとある1日が終わつた

純白

今日はいろいろあり本当に疲れたのでもう寝る事にした
(にしてもここは本当に純白という言葉がぴったりだね)

目の前には白のロングコートに身を包んだ白い人がいた
「なあ波音、お前つてそんな白かつたつけ?」

「着替えたんだよ」

「へえー着替えられんだ」

「ああ」

何を当然の事を、と言わんばかりに呆れ顔で言われた

「どうかコートの下は冬用の士官服なんだな」

「はあお前現実でどんな服装だった?」

「黒のロングコートに夏用の士官服」

「そのせいで色が反転したの着てているんだよ」

何を当然の事を、ではなくただただ呆れているだけだったようです

「現実に出れたらもつとましなの着るんだかなあ」

「まあまだ制服なだけよかつたか」

「てかお前何で3月なのに白なんだよ」

「だつてかつこいいジャマイカ」

「コロス」

「はい死んだー」

「じゃなくて!!」

「ノリ良いね」

「馬鹿なの?」

「いいえケフィアです」

「お前いい加減にしろ?」

「ハイ、スマセン」

「それに会議とかの時くらいちゃんと黒着るし」

「はあはいはい」

「あとそろそろ時間だぞ」

「そいや俺が無くした九四式拳銃何でもらったんだつけ

「覚えてなかつたのかよ」

「対策なんだと」

なんの対策か気にならなくもない空だったが聞くと面倒そのので聞かなかつた

「ふーん」

「おい、つてか本当に良いのか?」

「何が?」

「時間、もう七時過ぎたぞ?」

「え、まじ?」

「だから言つただろ?」

「はつ!? そうか! ジヤあな」

(初めの時よりは早くなつたか)

「おはようござります」

「おはよう」

そう挨拶を交わした時だつた、ジリリリンとベルが鳴つたのは

「電話鳴つてますよ?」

「取りたくなあーい」

「何小さな子供みたいな」といつてるんですか?」

「ぶう」

「不貞腐れても可愛くないですよ」

「（。△。）」

「何世界の終わりみたいな顔してるんです？」

「早く取ってください」

「容赦ないですね」

「しようがなく電話を取つてみると

「はいはい？ こちら単冠湾泊地所属のきさ r」

「やつほー空くんお久しぶり」

「なんだ元帥か」

「元帥かつてなんだい元帥かつて」

「2度繰り返さんでも分かります」

「で何です？ 何か用件があつたのでしょうか？」

「ああそうそう」

（この人大丈夫なのか？ 主に頭が）

「一週間後に大規模反抗作戦への会議が行われる」

「へえ、つてん？」

「これだけ伝えに電話したのよ」

「そこまで遠いと書類間に合わないからってな」

「マジかよ」

「ついでに陸軍省に顔出してね」

「なつ何故それを」

「いやさ陸軍省から通達が来たから」

「なんだそういうことか」

「にしても君は凄いねえ」

「何がですか？私はただの少佐ですよ」

「ただの少佐は飛行機には乗らないんだけどなあー」

「え？何で知ってるの？島以外には言つてないのに」

「君の大淀がうちの大淀に定時連絡ついでに打電してたよ？」

「大淀オー！」

「にしてもすごいね初飛行で発艦と着艦を完璧にこなすなんて」

「いや大したことはありませんよ」

「いや普通の人間できないからね？妖精でもできないからね？」

「うそやん」

「ハツそういうえばこの事言わないでください？」

「言つたら話題にされますからつ」

「注目とかあまり好きじやないんですよ」

「とは言つてもねえ」

「まさか」

「いや僕じやないよ？何かいつの間にか皆さんのが周知の事実つて事になつてるよ」

「なんでや！」

「噂つて怖いね、まあもうみんな知つてるから逆に話題にされなくてすむよ」

「そういう問題じやなーい」

「はあはあはあ疲れた」

「まそう言うことで、じやあの」

「そういつて電話は切れた

「えつ？今の元帥閣下だつたんですか？」

「うん中島元帥さんよ？」

「いや元帥さんよ？つて何普通に話してるんですか？」

「いやあの人人が二人ん時はそうしろつて言つたから」

「なんだ良かつたですよ」

「まあ普通はあんなことした時点で死罪だな」

「良かつたですよ常識知つてて」

「そんじやまあ仕事しますか」

「はい」

そういうつて出てきたのは書類と言う名の白い山だつた
「これは終わりませんね諦めましょう」

「諦めないで仕事をしてください」

「……はい」

そのあと餅つき方式で判子だけの書類を昼食の時間までに終わらしたのはまた別の
話

さて食堂へ昼食をたべに行くと、急に気が抜ける

「ああやつと終わつたー」

「お疲れ様です、午後はサインが必要な書類です」

「まだあるのかあー」

まああの方式で判子書類は全て終わり残り100枚くらいになつたのも事実、という

か元がおかしいなんだよ200000枚近くつて

「それにも、加賀さんやよく食べますね」

加賀さんのお皿には山盛り（本気）に盛られていた

「提督が食べないだけです」

「いや確かにここでは駆逐艦位だけどこれでも常人の大盛りはあるんですぜ？」

「何ですか？その悪者の真似して失敗した子みたいな語尾は」

「悲しくなるのでやめてください」

その後書類をまた餅つき方式で終わらして疲れて早寝したのも別の話

提督、関東に出張する 用意

「ああ疲れた」

「はいはいさいですか」

「えつと最近適當過ぎやしません?」

「全く? 変わつてませんが?」

「……はい」

「にしても能力あれだ、凄く楽だな」

今私は波音と話している

なんかもう疲れたよパトラツシユ

「ああ」

「てかもう暇だから帰れ帰れ!」

「なんでや!? わい悪くないやろ!」

「あーはいはいそーですねー」

「そんじやの」

(なんだあの癖しかない挨拶は)

自室

(あのさ寒いし暗いし何だしでどうしようもねえ)

今は3月の半ばだけどここは北海道の北の端つこだぜえい
何だろう自分でうざくなつてきた

「よし、二度寝しよう」

「ただあと2分ほどで電話来るんだよなあー」

「うわあーこの時間にかけてくるのなんざろくなのじやないよ?」

「まああながち間違いではない」

「ほらあー」

「ほら来るぞ」

「やべ」

そう言つて後ろを向いた瞬間空はぶつ倒れた

扉を開けていると錯覚していたらしい

そんなあり得ないことをしつつ執務机に向かつた(寝間着のまま)

座つたその時に黒電話は鳴つた、何故このご時世黒電話なんぞ使つてているのだろう?

そう考えながら取るとなんとなく馴染みのある気がするが確実に聞いた声がした

「もしもし私弥生と言うものですがそちらは単冠湾泊地？でよろしいでしようか？」

「え？あつああはいこちら単冠w……」

「ああなら良かつた貴方達が先日こちらへ来た理由は陸軍のあきつ丸ですか？」
「えつ？はい」（何故この人が知っている？というかこの電話番号をどこから入手したんだ？）

（なお提督は妖精さんが渡したことを見忘れていたようです）

「ですが何故？」

「そのあきつ丸がこちらにいるので連絡をと思いまして」

「そうなんですか？」

「なら今すぐこちらへ来て頂k 「無理です」

「こちらもこちらで少し準備が必要なので」

「そうですか、ならば4日後にでもこちらに来て頂ければ」

「分かりましたー」

その会話を切って電話を切つて時計を見ると05：45

着替えるには早いが寝るのには遅い

ということの一息つこう

（なんだらう未来が見えるよ、一息が異常に長いという未来が）

「氣のせいだ」（多分）
（氣を付けろ？）

「ああ」

(ウ、) z z z

「はい速攻でフラグ回収」

そんなとき執務室の扉は鳴つた

「はあい」

「あら起きられたのですね」

「君は私の事を何だと思ってるんだい？」

「君？ 私？ 提督つてそんな人称でしたつけ？」

「ん？（ヤバい普通に地が出た……が、しかしここは華麗に対処する）氣のせいじやないかな？」

「そうですね提督がそんなイケメンな人称使わないものね」

（おいあいつどんだけお氣楽で能天氣だと思われてんだ？）

「そつそつだな」

「本当に提督なら、 ですけどね？」

（あれ？ もしかしてバレてる？）

「まあそんなこと置いといて仕事です仕事」

「だな少しコーヒーでも飲んでみるか」

「提督つてコーヒーでしたつけ？コーラだつた気が」

「俺だつて気分転換したいのさ」

「そうですか」

(あつぶな)

(おいこら起きろクソ提督)

(おいおいその起こし方は無いだろ?)

(うるさいお前が起きないから30分頑張つたんだぞ?)

(おつとうすまない)

(じやあコーヒー頼んだ)

(おう……ん? おいちよつと待て)

(`_`) zzz

「逃げやがった」

「何が逃げたのです？」

「ohびつくりした、いや何でもないよ?」

「そうですか良かつたのです」

「またねー」「またなのですー」

「くつそどうやつてこの泥水を処理するか」

流し込むか捨てるか、捨てるのは勿体無いから流し込むか

「ゞゞゞく」／（^。^）／

「苦い!!野郎ブラックか!」

「さあ仕事を始めよう」

「はい」

そう言つて積み上げられたのはやはり20000枚近く

労働基準法つて無かつたつけ?これいつか過労死で死ぬ氣がするんだが
「やるしかないんですからさつさとしてください」

「はい」

そう言つてまたまた1日が過ぎ、ここで思い出した「あれ?2日後來客

じやね?」

執務室

「加賀さん」

「なんですか?早くやつてください」

「連絡事項です」

「はい」

「駆逐艦及び軽巡洋艦に面会室の掃除を」

「来客でも？」

「まあ、それと来客來ることも頼む」

「分かりました」

「いやあ危ない危ない言い忘れて大事になるところだつた」

「次からはなるべく早く言つて下さいね」

「はい」

「じゃあ仕事していくくださいね」

「了解」

そう言つて駆逐寮・軽巡寮の方に向かつていった

「さて俺は来客の書類と陸軍省への通達と航空機の手配しなければ」

単冠湾来客名簿の処理と陸軍省への電話が終わつた位で加賀さんは戻つて來た

「いやだから何だと思われているのでせう」

「なぜ語尾がせうなのでせうか」

「移つてますよー」

「で後は?」

「航空機の手配かな?」

「そうなら私が手配しておくわ」

「ありがとうございます!!」

来客

「ふう疲れた」

あれから色々頑張ったため、もうお昼になつている

来客用の書類とか来客用の書類とか来客用の書類とか来客用の書類とか來 k y……

「終わりました？」

「まあな、そつちは？」

「C—1輸送機の手配と航路の打ち合わせをしてました」

「あれ？ そんなにかかった？」

「これは陸軍航空機の方か海軍航空機の方か迷ったんです」

「でどつちだつたん？」

「航空機は陸軍でした」

「航空機はつてなんだ航空機はつて」

「ただ航路が海上なので海軍かな？と思つたんですが、海軍でもなく陸軍でもなく海上保安庁でした」

「一応ルートとしては、ここから千葉の館山を通つて横須賀へと向かう予定で提出しま

した」

「ありがとう、所で何故横須賀へ？」

「東京の方は米軍や民間機も入るので横須賀へと」

「そうかー、そうなるよな」

「にしても昼食の時間ですね急がなければ」

「俺も行くか」

食堂

（にしてもこの鎮守府にも慣れたよなあー）

一年ちょっとともいると何か邪険さも少しあるんだけどまあ仲が良くなつて来ているのかなあと考え始める今日この頃

「はいどうぞ」

「おうありがとう」

加賀さんがよくレストランで見るお盆を片手で二人前していくかっこいいと思つた
「冷めます早く食べましょう」

そうして少しづつ少しづつ加賀さんに盗られながら10分で完食し執務へ戻る嫌な時間帯になりました

「加賀さんや」

「どうしました？ボケ老人や」

「待つて？酷くない？」

「えつ？違うんですか？」

「違うわ、なんだと思われてんの？俺」

「滑つてしかいないボケ」

「（ ； 、 、 ）

「つてそんなことより私は仕事がしたくありません」

「そんなの皆一緒です」

「ましですかい！」

「なので食休み（1h）しましよう」

「最近キヤラがブレブレですよ？」

「貴方のせいです、なので私刑」

「なんだろう死刑とは違う気がするんですがそれは」

「私のは私の刑です」

「ほらやつぱり」

「分かつてるじやないですか」

「分かりたくなかったよ」

そんな他愛しかない会話を1時間続けた

執務室

「にしても明後日誰が来るんです？」

「前にご厄介になつた鎮守府、もとい紅魔館とやらの人」

「ああ基地航空隊の皆さんのが誤認したやつですね」

「ええ」

そんな平和な話をしてあんなことになるなど誰が想像出来ようか？

2日後08:00

「さて諸君、君達にはまた練習飛行をしてもらう」

「では始め！」

にしても何故飛行服の階級章が少佐なのだろうなどと考えていたら隊長が話しかけていた

「おーーい提督さんよう聞こえてますかあ？」

「はい!!聞こえてますよ!!」

「そうかい、ならもう発動機はかかるから早く乗れ!!」

零の爆音のせいで聞こえなかつたのである（多分）

「よいせつと」

だが私の零戦にも撃墜マークやらデカールやら貼つた方がいいのかね？

皆『鎧袖一触』だの『拳国一致』だの四字熟語を両翼に貼つたり機体の後部に桜だの深海機だのの撃墜マークを貼つてるからね

私だけだよ、今純正な零戦なのは

そんなことを思い浮かべながら離陸した

その後編隊機動をしていた

（まあ全部成功させてやつたが）
編隊で垂直ループや水平ループ、また左捻り込みなど絶対お前させる気無いよなって
いう機動まで

すると鎮守府から通信が入った

「提督？」

「はいはい？」

「いまとこですか？」

「鎮守府から50キロ程離れた太平洋上空だが？」

「なら少し基地備え付けの対空電探の画面に乱れが生じたので单冠山の山頂付近を見て
ください」

「了解」

「これではどちらが上か分からないなと思いつつ向かう

「うーん何も変化は無しだな」

「本当ですか?」

「なら電探の故障か?」

「いや水色の車が見える」

「えつ?」

「ほんとだ」

「上空でバンクして通過しよう」

「了解」

3時間後

1時間半ほど前に大淀が「来客だこんちくしよう」みたいなこと言つてたので「応接室にでも通しとけ」といつたら「面会室だ」と返つてきたので「どっちでもいい」という問答を繰り返し、その後色々準備をしていた

応接室

「遅れてすいませんね、こちらです」

そういって執務室に案内していた

だつて入つた瞬間火がついてないし窓もないしで凄く寒つたのです、仕方ありません
はあ応接室掃除させた意味なかつたな
弥生やあきつ丸の顔が死人になつてた氣がするが氣のせいだ、そういうことにしよう
執務室

もしもこういうことがあつても大丈夫な様に応接用の椅子持つてきといて良かつた
(波音がうるさくて3つ置く必要な訳無いと思ってたら波音が合つてて後で謝ろうと思つたのは誰にもばれていないようだ)

さてと、と椅子に座つたとき目が一瞬怖かつたのは見間違えだ(多分)
「それで、どこであきつ丸を見つけたんですか?」

前置きする時間あつたら話を進める事にする

「紅魔館の敷地内ですよ」

えつ? 何で?あのときは空中だつたが海面にも一時的に出来たのか?

「あの館の?」

さすがにそんなことあるはずはない、聞き間違えたんだよ多分

「ええ、それも雨の日に、庭で」

「ええ…」

聞き間違えでは無かつたようだ泣きたい

そして3日後に陸軍省へ向かうのと弥生がそれならナビゲーションシステムをつけ
てもらいたいと言うので明石の工廠をおすすめした
(紹介したけど大丈夫かな? 明石さんとごちやごちやしてるけど、というか道わかる
のか?)

「なあ、何か飲み物をくれない?」

「そうであります」(これだから海軍は使い物にならないのです)

「何か聞こえた気がするな」

「気のせいであります」

「そうか、すまなかつたな」

「少し待つてくれ」(金剛どこ行つたかな?)

「加賀さんお茶を、ついでに金剛に紅茶作れと言つてきて」

「わかりました」

ん? これ終わつたんじやね? この部屋によく分からぬ人二人と居るんだぞ? 口

りつ子の方は何か呪文唱えてるしあきつ丸はそれを抑えてるし

俺は落ち着いて席に座る

事件

さてそんなこんなである程度たつた（と思う）

この間あきつ丸への軽い事情聴取やフランドルと名乗る少女との自己紹介合戦を繰り広げてはいたが、最終的に疲れを切らした一人を自室にあつたお菓子で釣ったrゲ フンゲフンお菓子をあげたりしてお茶を待っていた

「妙に遅いな、少し席を外す」

「分かった」「分かったであります」

そのとたん聞き覚えのある足音が響いてきた

がいつもと何か違う気がする

案の定金剛がドアを突き破る勢いで開けた

「お客様も居るんだから静かに」

「oh, sorry……つてそうじやないネー」

「どうした」

「龍田が来客を切つたんデス」

「……？ フアツ！？意味が分からぬよ！」

フランさんとあきつ丸は走つていった

現場に着くと龍田の薙刀の刃に血が付いておりその先には首元から右下に切断された弥生の姿があつた

人が死んでもなんとも思わないのは自らが一度死んでいるからということにしておいて空はこう思った

(これどうやつて処理すればいいんだ? また書類が増えるんですね分かりたくあります)

「どうしたんですかグロい音しましたけど」

「oh」

「いっいやあああああーーー」

なんだどうした、と艦娘が集まつてくる

「よし龍田ちよつとこつちに来い」

そろいつて廊下の曲がり角で質問した

「えつと今日来客あるつて言つてなかつたつけ?」

「聞いてましたよー」

「なら何故」

「あらもしかしてあれが来客?」

「マントの留め具に菊があつたから軍人かと思つて」

「o r z」

「提督」

「ん?」

「少しこちらへ」

そういうつて現場に戻るとその死体にあきつ丸が泣きついていた

その時死体が黒い霧に包まれていき驚いたあきつ丸が少し離れたが 「？」と言つてまた引つ付いた（リア充爆ぜろとか思つてないからね）

「ああ、弥生殿!!

そうして泣いているあきつ丸の頭に手が置かれた

手を置いた人物は死体その人である

おいおいもしかして生き返つたつてか、嘘だろ

当然艦娘達は化け物だの怪物だの散々言つていた

何故か謎の記憶が一瞬フラッシュバックした

龍田は懲りずに「あらあらあら~」とか言つてる

「ああそりうですね、私は化け物ですよ、悪かつたですね」

少し大きな声で言つた

勿論聞かれていたとは思わなかつた皆さんはたじろいた

短い悲鳴も聞こえた

当然だ、急に生き返ったと思つたら自虐的な発言をし始めるんだから（見当違い）
弥生達はその後部屋に戻つた、まあ部屋にといつても掃除させた応接室だが
艦娘は痛いんだか冷たいんだか分からない視線を浴びせた、にしても凄いな
俺ならあれほどされたら耐えられんが弥生は耐えられるのだから

今日はあまりにも色々ありすぎてあの後の仕事を脳死プレイしたせいで何も覚えて
ない

（はあ今日は散々だ、もう寝よう）

（ん？この音はエンジン音？ジムニーではないからジムニーの前に止まつてたM A R C
Hか、純正ではないな）

（走るなら峠しかないがあそこは舗装がもう駄目だからな、大丈夫か？）

（つーか今何時だ？天辺じやねえか寝よう）

翌朝

「ふああ、今何時？六時半か、いつも通りだな」

士官服に着替えて執務室の椅子で欠伸をしていると誰かが来た

「どうぞ」

「よう提督、眠そうだな」

「ついでにジャッキとウマ借りたからな」

「おう」

「それじやまたな」

「そういって摩耶は扉の向こうへ消えた
(ん? ジヤツキとウマつて工具だろ?)」

（摩耶は車を持つてないから弥生か）

（つてことは M A R C H のなにかしらが逝つたんだろうな）

（御愁傷様です）

（弥生さんも可哀想に、舗装が駄目なばつかりに高い出費をするなんて)
(波音か急にどうした?)

（暇だつたからな）

腹減つたから食堂行くか

「おはようござります」

「おはよう」

「おはようであります提督殿」

素っ気なさ100%、泣きそう

「フランさんの姿が見えない

「フランさんは？」

(もしかして本気で言つてるでありますか?)

(もしかして話を聞いてなかつた? どうしても阿呆というかなんというか)

あきつ丸に心中で「こいつ馬鹿でありますなwww」とか思われてそうと思つてゐる

と

「はあ……フラン殿は吸血鬼なので朝は、というか日の光が苦手なのでありますよ」

「説明ありがとう」

「ところで弥生さんは昨日大丈夫だつたのか?」

「ええ、まあ」

「その弥生さんいないようだけど」

「来るでありますよ(多分)」

1時間程後

「大丈夫でありますかな……」

スツツツツゴイ不安な顔してゐるんだけど大丈夫だろうか

「陸軍省のことは言いました?」

なんだその「あつやべ忘れてた」みたいな顔は、えついや流石に嘘だろ？
「忘れていたでありますよ」

テヘツつて顔してもダメです

すると内線みたいなもので「弥生さん医務室にいますがどうします？」と徹夜したお父さんみたいなトーンで話してきた1，2週間前に帰ってきた軍医さん

その時ほど（あの人には暇あげよう）と思つたことはない
まあ、あげないんだけど

「あきつ丸さん、弥生さん医務室にいますよ」

「もういませんよ？あきつ丸さん」

「えつ？いつから？」

「弥生さん医……の時にはもういませんでした、疾風の如く去つていきましたよ」

東京

あれから数日たち東京へ向かうことになつた

「加賀さん何ででしよう甲高い音が聞こえます」

「それはジエット輸送機が来たからです」

「なぜでしようパイロットが居ません」

「それは寒いから帰つたのです」

「えつ本当ですかいそれ」

「ええ（多分）」

そんな調子で話していると単冠湾飛行場北端に飛行機が運ばれていく

「そんで弥生さんは？」

「自室で朝食食べてるはずです」

と、話していると弥生がこちらに向かつてきた

「うるさいですね」

「今日から東京ですかね」

「で操縦者は？」

「…私…ですね残念ながら」

「oh」

「あれ?車は持つて行かないんですか?」

「ああ、持つて行つて良いんですか?」

持つていかずに向こうでどうやつて移動するんだ

まあ辺境の地のしかも少佐だから仕方無いんだかな

すると指笛を吹いた、あいつはそんな事も出来たんだな

甘え：てるようにも見えなくもない気がしなくもないが、腕にドアミラーが当たつて痛そうだな

さてそんな事置いといて車を貨物室に入れた

「よし操縦室変わつて

…嘘だろマジでパイロットおらんのかい!この飛行機どこにあつたんだ?てかここまで誰が運んだんだよ!

ふとそこにはマニユアルのような物があつた

「なんだ?」

『日本海軍单冠湾駐屯地』

「これは……」

そこにはこの鎮守府の前にあつた駐屯地の物である事を示唆する文言が書かれていた

「そういうことか、だから飛行機あるのに人がいないんだ」

ちなみにこの書類は大戦最初期のもので無人になつたこの泊地に一年や二年加賀さん達はいたわけだ

「つてそんなことよりジムニー積み込まなきや」

「提督早くしてください」

「すいません」

「さて久々だがかかるかなつと」

エンジンはかかつた、飛行場は目の前だがまあまあ遠いので吹かして80km/h程度で突っ込みさらつとドリフトからの停止

安全に格納庫に入れる

「はあー、ぶつけたらどうするんですか？」

「ぶつけません」

「もういいです、早くしてください」

泣きそでござる…というか中ハンモックなんだな、ジェット機興味無さすぎて見て

なかつた

人は入れるんかな？

一人、二人……計五人だし寝てても入るか

「大淀さんいる？」

「はいここに」

「俺不在の間代理頼んだよー」

「ええ？」

「そんじやそういうことで」

「それじゃ離陸しまーす」

「頼むから真面目にしてくれ」

「すまん」

それから無事に航路を通り横須賀着く……はずだつた

数時間後 千葉県上空

甲高い電子音が操縦室に鳴り響いた

「ん？」

レーダーに感あり敵機接近中

空対空レーダーがそう読み上げたのでふと後方上空を見た

何でだろう黒い小さな点が見える気がするなあ—H A H A H A ふざけんなツ！

「深海の戦闘機じやねえかよつ!!」

「加賀さん? どうにかできません?」

「うちの子達が帰つてこれません」

「あつ終わつた」

「oh no」

「駄目みたいですね」

「加賀さんもう艦装閉まつて」

「はつはい」

「待つてください、対空電探に感あり」

「……! この反応は友軍機です」

「よっしゃ!」

「こちら単冠湾泊地所属如月空少佐である、貴官達の所属を問う

「こちら横須賀鎮守府第一基地航空隊第一中隊、貴機の護衛だ」

「んじやお願ひしまーす」

「了解貴機はそのまま着陸してくれ」

「了解」

そういうと大体18機で敵戦闘機20機をそれこそ一瞬で撃墜した
「ビューティーフォー」

横須賀鎮守府第一飛行場

なんやかんやあり無事に着陸して車も下ろすと横須賀の提督が出てきた
「ようこそ横須賀へ、といつてもすぐ出るんだがな」

「そうですね」

「じゃあ弥生さんだっけ？ 貴方は陸軍に直で行つてくれ」

「わかりましたでは」

「よしあきつ丸達行くぞ」

そういうつてあいつらはさつさとどこかへ消えていった

「私は？」

「海軍」

「ですよね」

「そういえば」つちきた理由会議だつたな

「では」

「帰りは船だ、言つてくれ」

「わかりました」

さて首都高に乗つて海軍省へ向かっているのだが、ここで問題である二十年前の2サイクル三気筒で539ccの車が高速を走るとどうなるか…

「提督」

「はい」

「この車遅くないですか?」

「(、・ー・、)」

「さつきから少々抜かされてますけど」

日が暮れて暗い夜の高速でそんな辛辣なことを言われた

「仕方ないです」

「何故?」

「ジムニーですか?」

「なんキロですか?」

「80km/h」

「」

ねえなにその「こいつ何言つてんの?普通夜の高速はもつと出すだろ」みたいな目、仕方無いだろジムニー案外非力なんだから

「しょうがないです」

「せめてもう20km/h」

「ギヤを換装しようと?」

「そうですね」

そんな感じの事を話ながら海軍省についていた

「はあ行くか」

「名前と階級、用件を」

「如月空、階級は少佐用件は明日の会議への出席
「確認しました、どうぞお進みください」

同省八階

「はあはあはあ

「この程度で音をあげるなんて」

「俺も非力なんだよ」

「あら空くん」

「ああ元帥殿」

加賀は敬礼をしていた、ガチガチで
「気楽に気楽に」

「はつはい！」

「俺も最初そうなった」

「君達何しにここへ？」

「明日の会議に出席するために」

「ああじやあ今日はここで寝泊まりでいい？」

「今からじや手配できんから」

あんたが来いって言つたんだろ！？

そいつて六階の休憩個室で休んだ

会議

ふああと欠伸をしつつ周りを見渡す

「眠い」

「おはようござります」

「ふえ？何でいるの？」

「もう8時ですよ？」

「マジか！」

「疲れてたんですね」

「まあな、そいや会議は？」

「9時です」

「一時間か」

そう言いながら寝間着ジャージから士官服に着替えるのであつた

「で、なに？これ

「さあ」

個室には机とベッドの2つしかないのだがその机の上には刀掛けとともに質素な刀

が置いてあつた

まあそれだけではなく小さな紙切れも置いてあつたが

「紙片がありますが」

「えーと何々? あきつ丸搜索の功績を認め陸軍より旧型三式軍刀の改造型零式軍刀を授与する、陸軍の中では不人気だが海軍には丁度良いと思われる、だと」

「陸軍許すまじ」

「まあ陸軍は、というか軍人の傾向として派手物好きだからな」

「俺はこれで本当に丁度良いがな」

「にしても三式軍刀そつくりですね」

「紙切れによると金属の質と柄のデザインが変わつたらしい、一番近いのは伊勢日向の

「軍刀だな」

「まああちらは十二年式海軍軍刀ですがね」

「鞘は茶色のこれは……編物? 布?」

「知りません」

「鞘の上から10cm位のとこに青線一本入つてゐる」

飛行機なら最低鍊度を示す線だ

「何でしようね、そんなことよりそろそろ会議始まりますよ?」

「そうだな行こう」

海軍省八階第一大会議室

「加賀さん？」

「はい？」

「何でこんな厳かなんですか？」

「広いし高級将校さん達もいるので」

トントンと肩を叩かれた、席は間違つて無いはず（多分）

「緊張しなくて大丈夫だ」

「はい」

とは言つたが何回何十回会議に参加している元帥と違い、こつちは初参加の辺境の地
単冠湾泊地の提督である

緊張しないでいられるかと思つていると元帥に誰が耳打ちして頷くとこう言つた
「0900時になつたので第3回指令会議を開始する」

「起立！ 気を付け、礼！ 着席」

「今回は第一次大規模反抗作戦（仮）についてである」「手元の資料を見てほしい」

他にも数人元帥はいるが基本司会進行は中島さんがするらしい
手元の資料にはこう書かれていた

この第一次大規模反抗作戦（以下今作戦）は各方面鎮守府が同時多発的に深海棲艦の中枢部を叩く

北方海域>日領アリューシヤン列島

西方海域>インド洋

南方海域>ソロモン海域

南西諸島>マリアナ沖及びバシー海峡

「皆目はあらかた通したかな？」

「まつそういうことで今回はここを強襲上陸して、」

なんかふわふわした感じで終わつたがつまり九州は南西諸島で四国は南方、中国が印度洋及び北海道はアリューシヤン列島攻略しろ、東北関東中部等は各出撃艦隊の援護で五大鎮守府は本土守つとれと言うことか

「どう思います？」

「何が？」

「この作戦です」

「ああ多分そろそろ国民からの非難が来るし防戦一方じや士氣も下がるだろつてこと

じゃない?」

「恐らくこの作戦によつて各鎮守府の資材資源は半減すると思ひます」

「それは大本營が負担する感じだろ」

「それよりギヤボックスとチャージャー買わんと」

「ようやく非力箱を強化するんですね?」

「非力言うな非力」

「乗れ」

「はい」

チヨークを引き混合比を調節、セルを回し暖氣してチヨークを戻しギヤを入れる
意識するどこんなに行程あるんだな感覚でやつてた

「加賀さんギヤはどこにあるでしよう」

「廃車場でしようか」

「正解」

そうして俺達は近くの廃車場に行つた（埋め立て地つて凄く広いね）

東京湾廃車場兼中古部品販売店

駐車場に車を止め中にいると事務所の様なところがあつた（加賀さんは車内）

「何か用かい？」

アロハシャツの健康的な肌をした30代後半の男性がいた
「ええまあ、ジムニーの五速ギヤボックスつてあります？」

「いつの？10年前の？」

「よくわかりましたね」

「エンジン音でな」

「ちょっと待つとれ」

そうして五分程してギヤボックスを持つててくれた

「積んどくよ」

「お代は？」

「このギヤボックス余ってるからいいよ」

なんて太っ腹なのだろう（でもこれって体よく在庫処理されただけじゃね？）

「ターボチャージャーつてあります？」

「ジムニー用はないんだ」

「そうですか、ありがとうございました」

「すまんな、また来いよ」

「ええ」

一時間程度後帝国ホテル前

「ギャボツクスどうするんです?」

「明石さんにでも任せましょう」

「同室? 別室? 金は海軍持ち」

「では一応別室で」

「ですよね(・・・)」

数分後401号室

「ふう今日は疲れたな」(主に会議が)

ロツカーに夏冬士官服一式に零式軍刀、九四式拳銃を仕舞い寝間着(ジャージ)に着替えた

「家のテンションが低いつて学生時代言われたが自分では全く分からんな」

明日は新車でも買おうかな、ドリフトとかしたいけど高速で周りの車に置いてきぼり食らうようじや無理だからな(出来ない訳では一切無いです、前やつたし)

「寝るか」

いつもより早い19:30位に寝れた

「なあ」

「ん?」

「最近来てくんなかつたな」

そんな言葉をちよつと泣きそうな顔で言つてきた

可愛いかもしない、波音が男じやなかつたら惚れてた自信ある
仕方ないだろ、爆睡か寝ないかのどつちかしか無かつたんだから」

「入れ替われたり分離できたら良いのに」

「分離つてそれ私死にません?」

「能力付与したんだから大丈夫」（多分）

新車

さらつとフラグ建築してそのまま深い眠りについた

翌朝

「ふなあー！」

「うるさいです」

「うわあつ！」

「だからうるさいです」

「だつて急に出てくるから」

「鍵開け放しの人が何言つてるんですか？」

「えつ嘘ん」

「本当です」

「そうか」

「ええ」

(̄ ̄ ̄)

「今日はどうします？」

「ジムニーじゃギヤ換装しても性能の飛躍的向上は見込めん」

「ということは」

「ええ新車買います!! 今回みたいに遠距離の場合は燃費いい方が楽」

「お金は?」

「軍人の給料舐めんなよ〜」

「いくらあるんです?」

「さあ500万位じゃない?」

「つてことでレッツゴー!」

東京下町

なんか無いものかと車探して三千里ならぬ三時間、何も見つかりません

「暇です」

「そうですねぇ」

この車には無線機が付いているが俺が着けたもんじゃあ無い、父親が付けたんだが今はそれをラジオにしている

「スター・レットにでもするか?」

「スター・レットって何ですか?」

「車です」

「知つてます、どんな車ですかって聞いてるんです」

「知りません、幼なじみが言つてたの思い出したんです」

「弥生さんですか？」

「どうだかな」

そう言つてトヨタの中古車ディーラーに入った（個人的にトヨタは好みで無いです、スズキ一択だあ）

車を止めスター・レットを見る

「どうされました？」

「これは何ですか？」

「4代目STARLET E P 82 EFI仕様ですね」

「なるほど（分からん）」

「発動機は？」

「（発動機つて）4E-FEですね」

「なるほど（分からん）」

「1989年の車です」

「五人乗りか」（ジムニーの出番が）

「そうですね」（3ドアですか、ジムニーの方が良いですね）

「駆動方式はFFです」

「へえーじゃあこれください」(FF? ファイ〇ルファン〇ジー?)

「おいくらで?」

「八万円位ですね」

「ほい、お願ひします」

「車検取つてるんでそのまま大丈夫ですよ」

「トムス製フルエアロ EP82や可変式エアスポイラー等は付いているのでカスタム
はしなくても大丈夫ですね」

「そうですか」

尚まつづたくなにも分かつてない空達二人である

数分後……加賀は悲しくなる

「提督」

「?」

「車どう持つてくんですか?」

「えつ」

「二人で来ましたが一台置いていくことに!」

「加賀さんが運転するんだよ?」

「……はい？」

「つて事で頑張つて」

「オートマチックなら……」

「マニュアルです」

「無理です」

「oh……はんじや乗つて？」

「はい」

「クラッチ踏んで鍵回して」

「クラッチ？」

「一番左」

「はい」

一発でかかつたので状態が良かつたのだろう

「次は？」

「ギヤを一速に入れて」

俺は窓を開け店員に一周回つてくると言つて出発した

「そして一気に戻すんですね？」

「えつちよつ」ブスン

「エンジンが止まつてしまひました」

アワアワしている加賀さんも可愛いがエンストしている

「んじやキー戻してもつかい、よし」

「ここからどうすれば」

「まず半分位戻してそれから完全に戻す」

「出来ました」

満面の笑み最高

「そしたらアクセル踏んで六千位まで回したらアクセル放してクラツチ踏んでギヤを二速に」

「わかりました」

「そうして何回か若干煽られ氣味だつたりぶつけかけたりしたけど一周回つてこれた
「やつやりました」

「つて事でありがとうございました」

「はい、ではまたのご来店をお待ちしています」

加賀さんに無線機屋に行くから後を追つてきてくれと言った
三十分程後無線機屋

「こちらですねありがとうございます」

初期型のFT-817を買いスター・レットに取り付けた

「これは何故?」

「俺の車だから」

「といつても基本使わないから加賀さん用だけどね実質」

「さあどうします?」

「こつ高速行きましょう」

「早速かー、走り屋希望かな? 楽しみだよ加賀さんと走るの」

高速发展上

「よし行くよ~」

「ええ」

よく見てみると俺つて大体6500位で変速してるんだな

最初は圧倒的に離したが馬力の差で徐々に差が縮まってきている

「環状線回つて終わりで」

「待つて! とまれえ!」

「提督のことを抜かすといつたな: あれは嘘だ」

「待つてエンストしました待つて」

「提督大人げないです」

ついさっき提督に教えては貰いましたが未だに分からぬこともあつて变速に集中していくジムニーにすら追い付けない事態です

「なんだろう面白いオープントンカートが居ます」

「ふーん」

横を通った時俺滅茶苦茶ビックリした

乗っていた車にじやない、乗ってる人にである

弥生の妹さんがまな板げふんげふんなんか怖かつた気がする
何で陸軍の軍服着てるんだ？

数時間後

「いやー早かつたね」

「よく言いますよね」

「でも一回抜いたじyan」

「トラブルが無ければぶち切つたんですけどね」

「エンスト10回ww」

「殺りますよ？」

「なんだろう、違うやりますに聞こえる」
学生時代の先生思い出すや、あの人どこ行つたんだろう

日常

あれから2日経つた

「時計とナイフ欲しいなあ」

「そう、行つてらっしゃい」

「え？ 行かないの？」

「ええ」

ほんと可愛かつた笑顔はそこになくいつものクールビューティーな加賀だつた

「私は今日も少し練習します」

「何で？」

「ここから横須賀までで止まつたら洒落にならないので」

「わかつたじやあ行つてくる」

帝国ホテルというか基本的な宿つて通気性が良すぎるから寒かつたり喉乾いたりす

る

あと単純に興奮しすぎて寝れない

「行つてらっしゃい」

駐車場の自販機の前で一言

「やはりコーラツ！…さあ行こ」

さて時計屋に来たが、いかんせん決まらない（欲しいのがありすぎる）

「時計つて言つたらやつぱり懐中時計だよなあ」

「お客様懐中時計でしたらこちらはいかがでしよう」

「おお沢山あるなあ」

金銀黒金等色々な色で塗装されている懐中時計の数々である

「んじやその金無地のを下さい」

「3000円になります」

「ほい」

「はい丁度、ありがとうございます」

さて残るはナイフだがサバイバルナイフなどではなく短刀に近いのが良い（チキンだから少しでもリーチ長くないといけないので）

「うーん」

軍用品払下げのあるところならそれっぽいのがあると思つただが望みのが無い！

どうすれば良いんだろう

「何かお探しですか?」

「ええ、短刀位のナイフを」

「ならこんなのはどうでしよう」

「こちらは旧陸軍の三十年式銃剣の前期型です」

「おお、ちょっと長いけどほぼ理想通り」

「では純正の鞘もお付けしますね」

「身分証明書を提示下さい」

え? 身分証明書? 俺運転免許証と軍隊手帳しか持つてないんだけど! どうせ刀剣関係の免許出さないといけないんでしょ? (軍刀車内に置き忘れたけど鍵掛かってるから大丈夫か?)

「えつじやあこれで」

そう言つて軍隊手帳を提示した

「ファツ!」(おいおい嘘だろ? 本職の人来たんだけどー?!)

「えつ? 気にしないで下さい?」

「ひやつひやい」(びっくりしたー)

「あつありがとうございましたー!」

何か手帳出してからテンパってたけど大丈夫か？

よし軍刀は助手席にあつたから良いし、殆ど趣味みたいな九四式拳銃はダツシユボードの中で服の中にホルスター毎付ければ良い、しかし三十年式銃剣どうしようとりあえず腰で良いや（尚今はダツシユボードに放り投げられる模様）

「よしガソスタ行こう、ガス欠になつてまうわ」
もう給油ランプがついてしまつてている、ただいくら旧式とはいえ燃費悪すぎだとよく思う

「いつものでいくか、すいません

「はい！何にしますか？」

「レギュラー満タンお願ひします」

「分かりました」

そう言つて2500円分のレギュラーを入れた

前に最近のハイオクは鉛入つてないから大丈夫とか聞いたが冒険して帰つて来れなかつたら終わりだからな

「よし、終わりましたよ」

「ありがとうございます、そういうえば聞きたいことがあるんですけど…」「はい、なんでしょう？」

「最近異常に燃費が悪いんですけど、どうすればいいですか？」

「このジムニーだと駆動輪のシフトバーもあると思うんですが、どうです？」

「えーと、通常のシフトバーの下にあるやつですか？」

「そうです、それ何に入つてます？」

「4Hになつてません？もしくは4L」

「4Hに入つてましたね、これはなにに入れるべきですか？」

「2Hですね、ちなみにその数字は駆動の数で、LとHは必要な速度によつて変えてくだ
さい」

「なるほど、ありがとうございます」

「さあ帰るか」

「ふう疲れた」
セルを回しチョーク調整しながらギヤを一速に入れ発進した

帝国ホテル

「後3日位ですね」

「まあ確かに4日目には船だしな」

「んでその3日間どうすんの?」

「今週は車に慣れる週なので」

「じゃあ3日間は私も乗りりますね」

「ええー」

えつ? なにその「マジ? お前乗つてくんの?」って顔

「何故です?」

「まあ癖とか知つときたいしな」(加賀さんの)

「ああ成る程」(車の)

「んじやおやすみ」

「ええー」

そう言つて加賀さんは自室へ戻つていった

「さて行くか」

俺はジムニーの所へ行つた

「帰つたらギヤ換装だからなあ」

「さてさて一周回つてくるか」

近所のコンビニに行つたらコーラと饅頭やスルメ等があつたので五千円分程買つた、店員さんがお前どんだけ買うんだよみたいな目で見てきたが金払つてるから知らなー

い

翌朝

「今日も私服なんですね」

当たり前である、制服なんて会議のとき位しか来てないです

「半分休暇みたいなものなんだから良いでしょ」

「そいや加賀さんは制服なのね」

「ローーテ含めて3日分位しか持つて来てませんからね」

あれ? ここ洗濯機あつたつけ?

「コインランドリーです」

出た久しぶりのテレパシー

「違います、観察能力が高いと言つてください」

デジヤブ感じたんだが気のせいだろうか

「そう言う提督は?」

「夏冬の士官服と私服一週間分、まあ足んなかつたけど」

「提督つてチョイスは良いのに組み合わせが崩壊してますよね」

「泣きたくなるから早くいくぞ」

「はい」

加賀さんの運転は上達しすぎて何日か前まで初心者と言つても誰も信じないくらいには上手かつた
ただそれよりビックリしたのは加速が良いし高速での最高速も速く完全に追従していた

「ジムニーはホント非力だつたんだな」

「最近本当に実感しています」

そんなことを三日間繰り返し、最終日になつた

三日後横須賀鎮守府

「そういえば陸戦隊欲しいな」

「わかつた海軍と陸軍に言つとく」

「うおつありがとうございます！」

「まあ陸軍は否定しないだろうな、それに対抗して海軍も許可して通るさ」

「アザつす」

「任しとけ、友達が來たぞ」

「おう來たか」

「ああ來たよ地獄にな」

「あれ？ 船も駄目？」

提督、単冠湾に戻る 帰途

「車は？」

「船の中」

「そうか」

「早く積んできたら？」

「そうさせてもらうよ」

弥生は本当にダメらしくもう顔を青白くさせていた

「さあ俺も乗るか」

「提督」

「なにやつてんの？早く乗らないと」

「そうね、なら道中で話すわ」

さて、船倉から上がってきたところだが、加賀さんは階段の上で壁に寄りかかりながら腕を組んでいた

「んで話つてなんだい」

「ありがとうございます」

「何が？」

「車の操縦と後は何となくです」（貴方のおかげでこんなに世界が楽しくなりました）

（なんだそりや）「そうか」

そんな他愛のない話をしていると客室に着いた、ここでも隣室である

「てことでじや」

「ええ」

因みにこの船は輸送船ではあるが九割方豪華客船みたいなもので軍人が少数と甲板に7・7mm単装機銃三丁と12・7mm単装機銃十七挺及び20mm機銃十門を装備している以外何も変わらない

機銃は深海が出てから旧式過ぎるけど最新銃武装よりは少し威力あるかなあ？位な感じで付けられ軍人は機銃付いてるのに撃てなきや意味ないと言うことで常駐している

尚今はおやつ時である、あるのだが……

「積みっぱなしだ、チクショー」

他にも軍刀と拳銃は車内である

「なにしようかな」

「ん？ 備え付け本棚？」

そこには五段の本棚があり、一番上段が軍関連で陸海軍が半々くらい、二段目がミステリーなどの小説で三段目が漫画、四段目からはファンション等の雑誌だった
「これでいいや」

本棚を見ながら着替えて選んだ歴史書を読んだがそこには日本が大戦で勝つたりドイツは勝ったのにイタリアは負けたとか学習済みの事しか無かつたので途中で飽きてテレビをみていた

「最近は少し暖かくなつてきましたね」

このようにテレビは通常の物しか放映せず戦局がどうとかは無かつた、まあ虚偽を国民に伝えるより最初から伝え無きや言い訳だし国民も直接関係無いから知ろうとしないしな

そんな事や色々な事を考えていたらいつの間にか18時になつていてドアがノックされた

「はーい」

「夜のディナーでござります」

「どうぞ」

「こちらです」

なんか色々出てきたが、基本和食の人間には分からなかつた（でも美味しかつた）

「では、お皿下げますね」

「ええありがとうございます、風呂入つて寝よ」

そういうて二、三十分かけ就準備を済ませたのだがトントンとノックが聞こえた

「誰ですか？ 眠いんですけど」

「私は？」

「なんだあ～加賀さんかあ～」

「なんか腹が立つのでちゃんとしてください」

「仕方ないでしょ眠いんだから」

そういうと大きな欠伸をした

「ふわあ～あ」

「欠伸移つてます」

慌ててもとに戻してちょっと頬を赤らめてもかわいいだけです（可愛いので許す）

「ちょっと甲板にでも」

「そうさなあ～」

甲板へ向かうと途中弥生とすれ違つた、あいつはこんな時間まで甲板に居たのか
ますます幼馴染みに似ているな、にしてもあいつ他人て気がしないんだよな

甲板に出ると「わあ～」という声がどちらからともなく聞こえた

満天の星空が広がる景色を見たのだから当然である

単冠湾でも綺麗な星空は見えるがここは海上、明かりが一つもない（単冠湾では少し
？離れた所に町があるのでその光が漏れて来ているのだ）

「綺麗ですね」

「あつああ」

本当に綺麗なのでカメラにでも撮りたいのだが生憎持つてきていない（青葉に借りと
くんだった）

「提督」

「加賀さん」

「寒い」

ということでもとの五分程度でそれぞれ自室へ戻った

「疲労感半端ないつてえー」

そういつたまま睡眠という深い闇に落ちた

翌朝

「はっ！」

いつの間にか寝ていた結果寝癖の髪になつた
加賀さんのところにでも行きますか、といつても隣だけど

そう言つてドアノブに手を掛けドアを開け……すぐに閉めた

うんあのさ寝間着とか可愛いパジャマなら良かつた（床に置いてあつたけど）、は？何でパンティーとブラしかしてないの？ねえ着替え途中なら言つてよ、でもおっぱいプリンプリンツ！

まあ、ノックしなかつた私が悪いんですけどね

「…入つても良いですよ」

「えと…ホントすいません」

「えつと問題はないと言うかなんというか」

なにかしら聞こえた気がするがあまりよく聞き取れなかつた

「つてそんなことより何しに来たんです？」

「えーっと挨拶でもと」

「そう、提督はどこでも変わらないのね」

「変わる人間の方が少ないだろう」

「外の空氣でも吸いにいこう、まだ時間はある」

「そうね」

外で無意識にラジオ体操していたが別に問題無い

「ホント平和ね」

「そうだなあ！」

穏やかな涙が立つていてるだけで特段特筆すべき所はない
「今日も何もないからトランプでもしましようや」

「わかったわ、絶対負けません」

自室

朝食も終え加賀さんは制服で俺はジャージのシユールな絵面での備え付けトランプ
を使つたトランプ勝負

「まずはセオリーワンババ抜きでも」

「ええ」（ふつふつふ負けませんよ）

「さあゲームの時間だ」（さてどれ程の実力かな？）

絶対にトランプ勝負では流れない空気が流れている

数時間後結果は俺の圧倒的勝利で終わつた

「なつなん……だと」

「ブアカ者がアアアアアア、この私にゲームで勝とうなど千年早イイイイイ！」

「（絶対そこまで必要では）無いです」

「あつはい」

「一回言つて見たかつたんです、すいません」

帰宅

それから一、二時間程たちおやつ時に単冠湾の軍港に帰港した

「では私は車出しますがどうします?」

「うーんそうだな俺も一緒に出すか」

船倉

さてそういう訳で船倉に来てもうスターレットは先に出たのだが……あれつ格納庫つて酸素薄いとかあつたつけ?

そんな事ある訳無くただただちよつと調子が悪いだけだつた、本当に止めて欲しい、また部品買いに行かねばならなくなる

「よしグダグダしてたせいで周りになんもないからぶつ飛ばそ」(ヤケ)

85 km/h 程で後ろのスロープ? から出てドリフトしながら M A R C H と F i g a r o とか言つたつけ? そんな車が停まつてる駐車場と言う名の空き地の横を颯爽と走り去り車庫にドリフトからの反転バックで入れた

「ふう我ながら綺麗に決まつたな」

横にスター レットがある以外何も変わらないな……ん? 何でスターレットあるん?

「ただでさえ狭い車庫が更に狭くなつたあー」

いや確かに二台位しか入れないようになつた俺も悪いが、勝手に入れられたアー
「まあ俺の車（笑）だからいいや」

執務室

「数週間振りの帰還!!」

「うるさいです」

「すいません」

「どう茶番をしているとコンコンとノックし礼儀正しく入つてきた大淀さんにこう
いわれた

「どつと仕事をしてください」

「ゑ」

「どつかのネタみたいな事してないで早くしてください」

「提督のサインやハンコが必要なものがまあまああるんです」

「ハンコくらいやつてくれて良かつたのに」

「え？」

「だから代わり頼んだんよ？ 事後報告でいいんやつて」

「ダニイ！」

「まあこんな話している間に加賀さんがハンコ書類の処理終わらしてるけど」

「あとは提督です」

「そうかなら休んでて」

「なら近くで休憩してますね、大淀さんと一緒に」

「おう」

「んあ？ そいや攻略艦隊編成して訓練しとかなきやじやね？」

「加賀さんや、主力の空母と戦艦と軽巡と駆逐艦を二十人位呼んで」

「分かりました」

「ほらね？ 近くで休憩してて良かつたでしょ？ と思う加賀さんであつた

「ん？ これって」

「ああ現状の資材状況ですね」

「（ 。 ）」

十分後

今は三ヶ月後の作戦案を考えている

あとなんとなくイメージで伊達の細いβチタン眼鏡をしている

「只今北方における敵勢力はこんな感じなので哨戒網の薄い列島沿いが良いと思われま

す

「そして戦艦部隊で一掃し水雷戦隊を突入でどうでしよう、パン食う？」

(上官にタメ語つて赤城さんあーた、てか何でパン食ってるんだよ)

「それから敵を雷撃で排除します」

「ところで航空部隊は水雷戦隊につけられんの？」

「……提督、航空部隊は……」

「航空部隊は敵の電探網等に引っ掛かるので無理です、それくらい分かつてください」

」

その言葉を聞いたショツクで震える左手で眼鏡を取り手元に置いた

「この作戦でなぜ護衛航空部隊が着かないのかわからんやつと赤城はここに残れ……ア

ンポンタン」

((なんだろう嫌な予感するから出よう))

ぞろぞろ出ていき赤城と摩耶、由良に後ろに居る加賀と大淀以外執務室には居なくなつた

「あの戦争から！護衛機のいない艦隊は餌食になるつて戦争の常識だろ！あと今日は鯛が食べたい！ボルシツチ！」

扉の向こう

「どう考へても自滅じやねーかよ」

（どういふことだ？）

（さあ～）

（てか隣の潮ちゃん泣いやつた）蒼龍が寄り添つたから（多分）大丈夫
執務室

「つていうかそれ証明したの日本だしさ！」

「そんな事も分からんのか」

立ち上がりろうとしたら膝をぶつけキレてる途中なのに「アイタタハンフ」とか言つ
ちやつた

「水雷戦隊に何かあつたらどうすんだ、もう大ツ嫌いだ！」

「そんな事言つてもバレたら意味ないんですよ、奇襲なんだから」

「お前滑舌良いな！大ツ嫌いだ！」

「滑舌良い大食いバーク」

「仕方ないでお腹減るんだから」

「だからつてボーキと米盗み食いしてんじやねえーよ」

作戦の会議等に使う赤青鉛筆を一本持ちおもいつきり執務机にぶん投げこうといった

「チクショウメー」

「腹減つたからつてそんなに食つたら皆の分もお前の分もウオツと言うくらい減つて自分たちの首絞めることになんだよ」

「ただでさえ皆育ち盛りでよく食べるのに！」

(何の騒ぎ？ 昼寝してたのに)

(翔鶴あなた何寝てんの空母召集かかつてたんだよ?)

「お前この書類見てみろこの異常な減りお前のせいだぞ？ こんなんだつたら行く前に鍵かけとくんだつた、ホント判断力足らんかつた！」

(判断力自体は元々足りませんけどね)

「つてか最初作戦の話だつたのに赤城問題に話が刷り変わつちまつた」

「いいか赤城これあの人人の前でやつたら肅☆清されるぞ、そう！ スターリンだつたらな！」

ゼエゼエと息を切らしながら椅子に座つた

「まあ確かにお前の食欲じや足んないのも分かる俺だつて中学高校はすごく腹減つたからな」

「ああもうホント（ほぼ枯渴という文字が）目に刺さるにやん（ここまできたら）おっぱ

いふるんぶるん」

「ああもうやつてく自信無くなるな畜生」

「赤城お前もう盗み食いだけはやめろよな」

「あと赤城以外はホントごめんな、もう自由にしていいよ」

「あと外に居る奴らも赤城監視しとけよ！」

「ヒグツエグツ」

「大丈夫貴女達は悪く無いわ、主に我々空母艦娘が悪いのよ」

「もう俺を休ませてくれ、旅行のせいで疲れてるんだ」

休息

あれから五分くらい軽く放心していたが周りの人が更に少なくなつたからか、ふと思
い出した

「なあ大淀さんや、弥生さん達は？」

「ああ弥生さんやあの（腹立つ）陸軍大佐達はいつもの部屋に」

「ええ（困惑）元倉庫室の窓ありで明るい部屋用意させたのに」（確か吸血鬼がどうたら
とか言つてた気がするが気のせい？）

「問題無いと思います、だつて吸血鬼がなんたらだから丁度良かつたけど寒いとか言つ
てましたから、冗談だとは思いますが」

多分それ冗談じや無いと思う、冗談だつたらそんな何人にも言わない

「ところで何故そんなことを？」

「一応さ、着替えて峠行くけど二人ともどうする？」

「では私はお供します」

「私は休憩します」

そんなことがありジー・パンと白の少し大きめのパーカーにナイロン生地のジヤン

パーを羽織つて加賀さんと山の麓まで来た

「ところで何故私を？」

「うーんそれはだねお嬢さん、君にドリフトなどを覚えて欲しいからだ」

「はい？」

「もう基本は完璧だから後はドリフトとかだろうと思うんだけど、どう？」

「いやまあ確かにそうですが」

「北海道では出来ないと死ぬからな、こここの悪路で出来れば基本どこでもできる」

「いろは坂とかは例外な、と続ける俺にいやちげえよという目を向ける加賀さんはこういつた

「そうではなくドリフトなどの特殊機動をするなら低重心の二輪駆動車が良いのでは
？」

「そんなん技術でどうにでも出来るさ」

「じゃあ行くぞ、しつかり掴まつてろよ」

「一気に速度を上げて二速、三速とシフトアップしひとつめのカーブで軽くブレーキしながらアクセル同時踏みで二速へシフトダウンから左にハンドルを切り曲がり始めてから一気に右へ切り返し、アクセルを踏み込むとドリフトが出来る（らしい、感覚だか

ら知らん)

何分か経ち山頂にたどり着く

我々が登つて来たのは三つほどある内、鎮守府に近くも遠くもない真ん中である
何故なら一番緩くて舗装が（比較的）しつかりして初心者向けだからである

「どう？」

「自分じやないとドリフトなんて恐くて乗つてられませんね」

「だろうな」

その後休憩して一番近いルートから降りたら……

「ヒヤツ」

「話すと舌噛むよ」

「イヤアア浮いてるウウ」

「うるせえ」

極めつけは「うぎやああこの車じや持ちませんつてええ」

と最後の一番盛り上がつてアスファルトの山での声

加賀さんが加賀さんじやなくなつた瞬間

ただこの場所は少し舗装し直した方がいいと思つた空だつた

（弥生がどつか壊したところはあれだらうな）

帰ると六時ぐらいだったので夕飯を食べたが、弥生の妹（と思われる人物（ほぼ確定））やフランさん、弥生は見かけなかつた

そんな充実した（？）一日を過ごした数日後空は軽い（軽すぎる）地獄を見る
数日後

「提督、郵便物です」

そう言つて宅配便がよく使つてる台車に載せた二つの段ボールを見せてきた

「なんも頼んで無いけどな」

宛先は単冠湾、確かにここだ……が、送り主が有名車企業の幹部さんと林檎の日本支
部幹部の名前になつている

「oh」

ノックせず入つてきた摩耶が開口一番

「なあ提督郵便きてねえ？」

「そこだ」

「おつありがとさん」

「それなに？」

「車の部品」

「じゃその送り主の名は？」

「友人、頼んだ物送つて貰った」

意味分からん、何で偉い人が友人？

「金は？」

「提督だ、給料沢山あるだろ？じゃあな」

「（ ； 。 ハ 。 ）」

「……仕事しましょう」

「そうだな全部忘れて仕事しよう」

「にしてもプロペラ機のエンジン音て心地良いよな」

「そうですね」

「龍驤んとこの九七か」

「新型艦攻が大本営で開発中らしいですね」

「へえ」

「てか摩耶が車の部品持つてつたんなら龍驤もついて行きそうだな」

「摩耶さんの話聞いてる間に車好きになつてるの気付いていなそうですがどね」

「そうしてほのぼのしたまま仕事を終わらして頑張つてたらその調子で一週間経つてました

一週間後

「なんだか周りに車好き増えてない?」

「ええ摩耶さんや龍驤とかね」

「加賀さんもな」

「……え? みたいな顔で何でこっち見てるんですか? どう考へても車好きじゃなきや
ずっと乗つてたりしないだろ

「そいや明石は?」

「あのは車というか機械や理化学系にしか興味ないです」

「知つてた」

「で、そんなことより仕事してください」

「くつそ、話逸らしてサボろうと思つたのに」

「残念賞」

正午

「さてお昼d……」

「何ボサツとしてるんですか? 早くしてください」

「ええ (困惑)」

またいつものようにちまちま横取りされながら昼食を終えた

おやつ時には金剛姉妹主催のお茶会が開かれていた

「テートクー」

「ん？」

「あのガールもコールしたらドーデスカ？」

「いや茶会に関しては俺に権利も何もないし」

「なら今すぐ呼びましょう」

金剛姉妹は案外早く仲良くなつたメンバーである

「ならもつと作らなきやですね、気合いつ入れてつ作ります！」

「なつストップ！止めとくデース」

「そつそうです比叡お姉さま」

「比叡お姉さまはここで『ゆつくりなさつててください』

「いえ私も作ります」

？
加賀さんも比叡を除く金剛姉妹も「終わつた」みたいな顔してゐるんだけど、どゆこと

走行

あれから十数分経ちフイガロさんが俺の前に座つてゐる

「お久しぶりです」

「ああお久しぶり」

なんだかんだ話すのは中学以来無かつた

何でだろ、比叡以外の金剛型がガクブルしてゐる

「出来ましたよー」

「……えーとこれは?」

「?スコーンとクツキーですけど?」

何を言つているんだどう見てもスコーンとクツキーだろ?という顔でこちらを見てくる

「なあ金剛」

「なんですか?」

待つて口調が普通に戻つてゐるんだけど

「あれば本当にクツキーなのか?」

「さつさあ？」

「私が考えるに毒物です」

「うん見てて分かる、だつて紫だよ？」

「流石にこれは……」

「一杯食べて下さいね？」

「あっはい」

いつの間にやらのあのヤンデレ氣質が無くなる位の緊急事態なんですね分かります

「フイガロは気絶してしまった▽

「大丈夫ですか！」尚、榛名は考える事を止めたようです

「では私はこの子の看病しますね」

そう言つて霧島は榛名とともに医務室に行つた……いや、逃げた

今ここには氣絶フイガロと真犯人比叡に空、金剛と考える事を止めた榛名がいるがつ
まり次は……

「大丈夫ですかね？まあ御姉様と司令もどうぞ」

そういうなる、いくら俺でも、これは無理

「ミーはお腹一杯ネー、テートクファイト！」

「えつおまつ」

「あーあ行つちゃつた」

「じゃ司令どうぞ」

「おつとう」

そう言つて一つクッキー（と思われる物体X）を口に入れた

「うつ」空は氣絶してしまつた▽

医務室

「はつ！」

起きるとなんというかあるあるの夕方だつた

「あれは金剛達の旨い紅茶を相殺して余りあるほどの毒物だな」

「お兄様との時間が毒物のせいで無くなりました」

「ああ」

静かに隣同士話していたら悪魔ゲフンゲフン明石が入つてきた

「提督！」

「なんですかい？」

「設備とかの費用お願いします」

「……ん？」

待つて？全く聞いてないんだけど

「これくらい」

「なあにこれ」

「なんと言ふかまあ安くはあるんだけどね……なんか違くない? だつてパーティツ費つてねえ

「見ての通りパーティツ費ですのでよろしく」

「何やつたのよ」

「うーんとパソコンとそれに付随した改造ですね」

「にしては高くない? 後誰のだよ」

「きつ気のせいじや無いですか?」

「さつき設備とかのつて言つたよな」

「聞き間違えじや無いですか?」

さつきから少しブルブル震えている

「はあ設備増やすのは別にいいけど経費でお願いします」

「あ”んま”り”だあー」

「諦めなさい」

「……はい」

「んで後は?」

「弥生さんのM A R C HにアップルG3の車載パソコン化が完了です」

「そうか」

「そいやフィガロさん」

「はい？」

「これから走りません?」

「何故?」

「うーんFigaroの性能が気になつたから?」

「いやです、これからお兄様の所へ向かうので」

「そういえば弥生さん峠の方に行きましたよ?」

「今すぐ行きましょう」

「あつはい」

（そう言つて俺達二人は加賀さん教習の時のルートで山頂に行つた（ああいう人が峠行つたって事は走つて降りてくるため非常に危ないのである）

「……」

「……」

「誰も居ないじやないですか！」

「何故だろうか」（というか出てすぐ帰つて来ていた氣がしたけどあれこのせいじやな

かつたんだな)

「まあ良いです、すぐ戻るので」

「じやついでに競いません?」

よくよく考えたら今まで競つたのは弥生ただ一人だつた（能力が弥生位しか同じ奴居なかつたせい）

「そういうえばお兄様つて弥生さんの事?」

「何故唐突にさん付けなのかとか遂に頭がおかしくなつたのかとかは置いといて、そうですね」

（隠す気も無く言われたんだけどどうすれば良いだろうか）

「つてええ!」

「まさか気付かなかつたとか無いですよね?」

「いや初対面の時に変わり過ぎて他人の空似つてあるんだなあととか思つてた」「どこも変わつてませんけど?」

（恋は盲目つて奴か）

「そんなことより早くお兄様の所へ行かなければいけないので」「まあ勝手に付いてきて置いてきぼり食らつて下さい」

「ほう自信あるね」

「いくらお兄様程度の技量があつてもその車じや無理です」
「やつてみようか」

「ええ」

そう言つて始まつた公道（？）レースは結果から言うと惨敗だつた
何故ならば馬力が違ひ過ぎたからである

エンジンをかけFigaroを追いかけ突き放されてコーナーで差を縮めてもすぐ
馬力で突き放され中腹頃にはもう全く姿や音も感じ無くなつていた

ただ所々にドリフトの痕やブレーキ痕があつたので少なくとも弥生は公道を走り降
りて行つた

「惨敗レースしたら燃料切れそなので給油してきます」

そう加賀さんに言つて私服に着替え出てきた

ちなみにこの島の半分の所で柵により軍用地と民間地が隔てられている

「そいや鍵無くね？」

ポケットに入れているのを思いだしフエンスを開け給油を済ませて戻つてくると自
室にて作戦迄の3ヶ月をどう過ごすか考えていた
何故3ヶ月かというと作戦に関する物資輸送を一気にやると感付かれるから少しづ
つやるとそんくらい掛かるよやつたね、という何とも非情な現実だつた

提督、剣道の真似事をする

発覚

俺は今非常に悩んでいる

寝て起きてふと思つたが本当にこの3ヶ月どうしようか

演習を、とも考えたが前に居た鎮守府が皆揃いも揃つて超一流の実力を誇り、あの加賀さんもそんな一流達に鍛えられ仲間に負けない程強くなっている（恐らくこの国にうちの戦力を凌げる鎮守府は無いだろう）

「どうすっかなあ〜」

「おはようございます」

「加賀さん何かいつもより疲れてらっしゃる？」

「まあ昨日弥生さんと走りましたからね」

「マジか！」

「イヤ痕に些細な違和感を感じたがそういうことだったのか

「ただひとつ驚いたのはエンジンが普通のではなくワンランク上のターボ付きだったつて事ですね」

「あらそう、良く分かつたね」

「普通のエンジンとは空気の音に違和感があつたんですが、摩耶さんが教えてくれました」

あのときの店員間違えてたのか……それはそれで大丈夫なのか?

「さて久々に執務の時間です」

「（△。△。）」

「そんな顔しても駄目です」

「駄目かあ」

「さてやりますか」

数時間後

ドアがノックされたので入らせると弥生が入ってきてこの後帰る旨を伝えて帰つて行つた

「なあ」

「何でしよう」

「アイツらどうやつてこつちに来てあつちに帰つて行くんだろうな」

「さあ？どこ〇もドアみたいのでもあるのでは？」

「まじで！？」

「そんな事より仕事です」

「なん……だと、嘘だ！」

「仕事をしてください」

「……はい」

「なあ鎮守府回つてきていい？」

「何故？」

「まあいうて屋上だけどな」（逃げるためにな）

「なら良いですよ」

「んじや行つてきます」（勝つた！第三部完！）

屋上

（なんと言ふか……病院かな？）

そう、よくアニメとかである病院の屋上なのである

真ん中に洗濯物が沢山有り端っこに（何故か金属製の）ベンチが二つある

「ふわあ～」

日向は暖かいのだがまだ四月で日本の最北端列島、ちょっとでも光量が少なくなると

めつつき寒い

（そんな事言つてたら影つてきた）

寒いで中に入り駆け降りると二階には日向さんが居ました（ダジヤレジやないよ！）

「……おはよう」

「ああおはよう」

「そいや日向さんや、腰の軍刀は？」

「あれは部屋だが何故？」

「いやちと見たかつたなつてな」

「なら今から行くか」

「マジか！」

「ああ」

艦娘は少数が軍刀を所持しているが基本的に昭和十二年式が多い（実際は形の似せた特殊軍刀である）

日向・伊勢の自室

「それ十二年式か？」

「ああ、これは当サーベルよりやはり日本にはこれだ！ということで太刀型軍刀になつたと本に書いてあつた」

「どんな本なんだそれは」

「ところで提督のは？」

「ん？ああこれか？去年制式採用された零式軍刀だそうだ」

「ほう、よく見せてくれるか？」

「おう、はいよ」

「どうした？」

「これは本当に去年の軍刀か？」

「そう書いてあつたが？」

「これは最近良くある補充用工業刀じやない」

「……ん？」

「つまり君のは鍛錬刀だと言うことだ」

「てことは皆の思い浮かぶトンテンカントンで作つたつてことか」

「まあそうなるな」

「目釘を抜いても良いか？」

「どうぞ？」

目釘という刀の刃止めの様なものを器用に抜いた
つてか各種瑞雲の精巧模型があるんですがそれは……

「……やはりな」

「？」

「ここを見てみろ」

日向は本来持ち手に隠れて見えない部分を見せてきた（普通に鑄びてはいなかつた）

「昭和……」

「そうこれは昭和初期の本当の日本刀だ」

「だが今も当時も基本軍刀は私物で官給品は少ないだろ」

「そなだが銘が入つてゐる以上軍刀だ」

「そう、つてことはまあまあ歴史のある軍刀つて事か」

「ああまあまあ歴史のあるな」（だがこの刀どこかで見た気がする）

「ということで真剣勝負（文字通り）をしよう」

「…… o r z」

ただ練習場で刀を打ち付けて終わり何か凄い物を見るような目で日向が見てきて「どうしたのかな？」と思つたが普通に執務室に帰つて来ました

「……遅いです」

「ごめんなさい」

「そういえば提督凄くどうでも良いんですけど銃はどうしたんですか？」

「？拳銃ならここにあるけど？」

「いえそれではなく小銃の方です」

「何で？」

「いえ一時期凄く調整してたのに最近見てないなあと」

「壊した」

「？」

「向こうで咲夜さんとか言う化け物メイドに壊された」

「全く意味が分からんんですけど」

「これから俺の身に起こつた事をありのままに話すぜ？」

「前置きは良いから早く」

「おつとう」

「俺は向こうに落下傘着陸しこつちに撃つてきたメイドさんに九九式を確実に撃ち込んだ」

「するとあり得ない反応速度で弾を避けたんだ」

「その後も打ち続けたんだが一発も当たらずメイドが一発撃ち九九式の銃口にシユウウウウト！超！エキサイティング！してぶつ壊したって事だ、何を言つているか分からないとと思うが俺も良くわからん」

「ちょっと何言つてるか分かんないです」

「あつはい」

「そいやあそこにまだあつたつけかな?」

「ちと見てくる」

「はあ、はいはい」

あの倉庫

「ウオツこんなのもあるのか」

そこには九九式の他に三八式歩兵銃やその実砲が百発程度に九四式の実砲も五十発程あつたので回収した

(他にも色々有つたが全て軍用品オークションに売つた)

銃器

面倒な事を終わらせ執務室に戻ろうとした時だつた
「しれーかん何してるぴょん？」

「うおあ！」

「なにに？ いかがわしい事でもしてるのかぴょん？」

「急に後ろから声掛けられりや誰でもそうなるつての」

「ふーん、でこの鎮守府には秘密基地があるのは知ってるぴょん？」
「えつ？ まじ？」

「うん」

「どこどこ？ やつぱそういうのは憧れだよな」

「あそこは暗いからライトを持ってくぴょん」

そうしてライトを持ち鎮守府本館の一番北の部屋に来た

「ここぴょん」

「へえ、案外普通だな」

「まあ普通じやないとばれちやうからね」（ホントは誰も来ないだけの何の変哲もないた

だの部屋だけどね)

「中入るか」

「うん」（よし掛かつた！）

次の瞬間俺は小学生並みの身長で無駄に身体能力が高いピンクの髪の可愛い顔した悪魔に飛び蹴りを（腰に）喰らった

「うおつ」

ガラガラドカン！と痛い音して止まつた

「ふえ？ だつ大丈夫ぴょん！？」

「腰があー」

「ちよつと待つてるぴょん！」

駆け降りてくるのが分かつたので途中で驚かした

「うあつ！」

「ひつ！」

ガタガタ！……ん？ ガタガタ？ 足滑らした？

最後思つ切り飛んで見事に俺の腕の中にシユウウウウトした

「大丈夫？」

「大丈夫ぴょん」

手探りでスイツチらしきものを押すとなんと少し埃を被つては居るがまあ綺麗な射撃場を発見した

「……うそん」

卯月に関してはあまりの事で顔を紅くしながら氣絶していた
「まあ戻るか」

卯月を医務室に運び、基本的に身体能力が高い駆逐艦に手伝つて貰つて射撃場を整備した

「司令官ここは結局何なんですか？」

「射撃場」

「「……？」」

まあ軍人や軍属とはいえ元民間人（ほぼ）の女子だから知らんのも当然と言えば当然である

「どよつち」

その後勢い良く大淀に両足跳び蹴りを喰らいつつ十名程いる駆逐艦全員分と我々の
分のイヤーマフ射撃用遮音機が渡された

「んじやとりあえず三八式撃つからね！」

少々大声で言わんと聞こえんのが難点である

「行くぞ！」

クリップに付いていた三八式実砲を一クリップ分無理矢理押し込みクリップを弾く、そしてボルトを戻し押し下げる（若干錆びてたからね仕方無いね）

「ふう、ここまでギチギチだとは…」

呼吸を整え集中し引き金を引いた

「……（～・ω・～）」

「明後日の方向でしたね」

「油が無いからな」

「撃ち尽くすか」

全弾あらぬ方向へ行きました（～・ω・～）

「……つづ次は九九式だ！」

さつきと同じように九九式普通実砲を装填し発射したら紙の的に当たりはしたが端っこの方にほとんどが当たった

「これは点検必須だな」

「ですね」

「なら次は九四式だ」

「今度は拳銃なんですね」

「まあな」

一発を先に薬室に込め8mm南部弾またの名を十四年式拳銃実砲を六発、弾倉に装填し拳銃に入れた

「よいせつと」

七発を指連射で50mの的のほぼ中心に当てた

「「さつきまでボロボロだつたのに急に当ててきやがつたー！」」

「お前らは俺の事何だと思つていてるんだ」

「うーん当たる当たる詐欺の人？」

「仕事をサボる人」

「うんごめん確かに全部あつてる」（ ；▽； ）

「提督？顔が顔文字になつてます」

「なにそれ怖い」

「さあ行きますよ」という地獄の言葉でライフルを二挺持つた危ない人が執務室へと吸

い込まれるのであつた

「ホント疲れた」

自室の三、四挺のキヤパを持つたガンロツカーに入れてその後加賀にこつてり怒られ

(、・、・、) な提督であつた

「ようやく戻りましたね仕事あくしろよ」

「はい、すいません」

数時間でまたあの頭の可笑しい量を終わらせ話をしていた

「ようやく終わりましたね」

「なあ7mmとか8mmもいいけどもつと大口径の欲しくない?」

「このカタログでもみて、どうぞ」

(・・ω・・)

そのカタログの対物ライフルのページに（何であるんだよ）一際目を引く銃があつた
のだがその名は……

P G M ヘカートII (仏:P G M H・cate II)

仏軍に1993年以降正式配備されている

最大射程 2km強 有効射程 1.8km 射速 825km/s 銃身長

700mm 装弾数 七発 ボルトアクション方式

そして気になる口径は12.7mmで使用弾丸は12.7×99mm米連合弾

これなら口径も問題無いし米連合弾なら調達も簡単である

その後も見ていくとFN—Five—sevenというちよつと不思議だけど合理

そうな拳銃があつた

性能は

口径 5.7 mm 銃身長 112.5 mm 使用弾薬 5.7 × 28 mm 弹 装

弾数 20発（拡張弾倉は30発） 作動方式 銃身遊動遅延ブローバック 全長 2
08 mm 銃口初速 650 m/s 有効射程 50 m 製造国 ベルギー

まあホント最近のだから強いのだろうが口径が九四式より小さい時点でなんか怖い
し有効射程も変わらないので変える必要あるかなあ？と思いつつあれは手首に悪いの
で早くサイドアームのメインを更新せねばと思う如月提督なのであつた

单冠湾に人が増える

明石

ジーコジーコ

今俺は国外へ電話を掛けている

「……プルプルプル」

「よし掛かつた！」

今は夜だが電話の相手はヨーロッパを縦横無尽にクルクル回っている人間なので問題は無い……はず

「プツ We r b i s t d u?」

「……はい？」

「……W h e r e a r e y o u f r o m?」

（何故英語？）あつアイフルムジヤパニーズ（英語が違う？中学成績2だつた人間にそ
れ言う！？）

「その声もしかして空？」

「あつああ、えつとそちらは？」

「えつとこちらは如月灯です」

「良かつたあ馬鹿姉で良かつたあホント良かつたあ」

「あ?」

「んで用件なんだが」

「はあなに?」

「そつちでさへ一カトつて言うフランスの軍用銃とFN—Five sevenていう
ベルギーの軍用銃買つて单冠湾に送つて

「んな危険物が送れるか!」

『自称』才女さんどうにかしてくださいよおー』

「自称じや無いですーちゃんと大学首席で卒業しましたー』

「ハイハイ、で結局のとこどうなん?』

「無理かな、私用航空機でも無きやな』

「了解したから一応買つといて』

「ええ(困惑)ハイハイ分かりました』

「んじや』

「ん、じやあね』

「よし寝よう』 ZZZ

さて、無理矢理ヨーロッパにいる姉に対物ライフルと高速拳銃を買わせて飛行機を向かわせる約束を取り付けた訳だが：

「おはよう」（小声）

（さてどうするかなあ）

（水上機なら行けんじやない？）

（ウオツ久々だな）

（お前が来ないからな）

（すまん）

（でもここに旧式水偵なんてあるか？）

（ここに無きやどこにあんだよ）

（まあそうなんだがな？）

（加賀さん来たんでさようなら）

「おはようございます」

「ん、おはよう」

「てか久々じやね？ 加賀さんこっち来んの」

「ですね、まあ気が向いたので来ただけです」

「そう、そいやここに旧式水偵つてある？」

「ああある意味本当の零式水偵ですね？」

「そうそう」

「まあ無いですが明石に言えば一日で作りそうですけどね」「いや流石に無いだろ」

「忘れてません？ここ鎮守府ですよ？妖精さんと言うチートがあるじゃあ一りませんか」

「おつとう」

「じゃ行つてきます」

工廠

「明石ー？」

「はいー？」

「何でここにいるんだよ、隣の部屋に居ろよ」

「徹夜で装備を試作してました」

「いつもなら怒るが今回は頼みがあるから許す」

「頼み？」（提督の罰つてそんな恐ろしいものでも無いですけどね）

「ああ零式水偵つて作れるか？」

「水偵なら充実してるじゃ無いですか」

「装備じや無くて実物」

「……何で？」

「それ使つてちょっと欧洲までお使いに」

「どんだけかかるんですか？」

「知らんが行かねば！」

「はあ、取り敢えず作れますけど提督は駄目です」

「なんでや！ 何でワイは駄目なんや！」

「提督だからです」

「知つてた」

「なので私が行きます」

「大丈夫かなあ」

「基本的な機械は操作出来ますから安心してください」

「後で私乗るのよ？」

「なので完全に純正にしどきますね」

「おう、でどうやつて作るん？」

「妖精さんと一緒に全部品を一から」

「おう頑張ってくれ！」

そそくさと執務室に退散し五時頃に明石が慌ただしく執務室に入ってきた

「出来ました！」

「……早くね？まだ半日経つて無いよ？」

「たつた一機を実質何百人単位で組み上げるですから簡単です」

加賀さんが「ほらね言つたでしょ？」という目で見てきたので「すいません」という
目を返した

港

「ホントに三座だ」

「完璧ですよ？ただ当時より高精度で作れたのでいくらか最高速や加速力上がつたり燃
費向上したりしましたが」

「へえ、で燃料は？」

「高オクタン価の航空燃料です」

「どんくらい入つてる？」

「とりあえず半分程度」

その後クランクでエンジンを始動させ後ろに明石乗つけて二時間程試運転したのは
また別のお話

「完璧でしたね」

「だな、お前後で俺の部屋来いや」

「何故?」

「航路の確認」

「ああ了解です」

就寝時間の後

「さて航路は?」

「まず確認するぞ? 高オクタン価の航空燃料を増槽にも一杯積んで銃弾は積まず無線だけだな?」

「ええ間違いないです」

「じゃあ後は座席の後ろの空間にドラム缶増槽積めば距離伸びるな」

「ですね」

「じゃあ明後日出発で塗装は俺やつとく」

「まあ全部銀も変ですしね」

「だな、目標はアドリア海の最北地点でデカイ荷物を持つてゐる女人の人」

「はい」

「じゃあこんなどこか、おやすみ」

「ではおやすみなさい」

翌朝

あの水偵は下に台車付けて工廠前に置いてあるし明石は一日中睡眠等の休憩の時間である

「さてどうするかなあ」

なんか面倒なので水面に接する部分は普通の水上機同様あの乳白色の塗料塗つて後は全部海上迷彩にすることにした

「よいしょ」

全て塗り終えたのはおやつ時だつたが満足行く出来だつたのでクッキーを食べた（満

足感関係ナッシング）

翌日から明石が乗りフラフラしながら飛び立ち不安になりながら一週間を待つた（帰還時穴が開いてはいたがそれが気にならなくなる事が起きる事を未だ誰も知らない）

陸軍

俺は明石を見送った後暗くなり眠かつたのでベッドに入りそのまま寝ていた
すると少しおかしい音がした、高音のキイイインというジェット特有の音だ
「……ん？ ジェット？」

どんどん音は大きくなり非常に煩くなつた
キユツと言う音がしたので着陸は出来た様だ
<ブオオン

「あははおかしいな車の音が聞こえるよ」（#。ω。）
キイイイン

ガラツと窓をおもいっきり開け「うつさいんだよー！ ちよつとは時間を考えやがれこ
んちくしょー」と叫んだ

するとエンジンが停止したのか音は無くなつた

良かつたと思つているとドタドタという女子の出す音ではない勢いで何かしらが
迫つて来るのが分かつた

バーン！ 「提督殿！ 弥生殿は何処でありますか！」

うん分かつてはいたが案の定あきつ丸だつた
後ろに二人程見えるのは気のせいで良いよね?

「あいつなら昨日だか一昨日だかに帰つたよ?」

「なん……だと、であります」

「取つて付けたみたいな、あります口調だな」

「実際取つて付けたのでありますよ」

「ええ(困惑)」

「ああそれと私陸軍揚陸艦あきつ丸只今より貴鎮守府に着任したであります
は?」

「宮田大佐から直々の命令であります」

「そう」

「なのであまり深い意味は無いけれどこれから弥生殿が来るまで宜しくお願ひするであります」

「……あきつ丸さん? 具体的にはどのような事を?」

「適当に気が向くままでありますか?」

「知つてた」

「でさ、その……言いにくいくらいだけど後ろの人誰?」

「ああこの御二人方は陸軍の人であります」

「こつちが宮崎 進大佐であつちが林 伸介中佐」

「それぞれ憲兵と陸戦隊の教官です」

「ああそう、てなるかあ！」

「？」

「たつた三人と一台の為にあんなデカイ飛行機出して安眠妨害とかあり得ねえよ！」

「これしか無かつた様で」

「てか何で陸戦隊の教官が陸軍なんだよ」

「それはこつちが聞きたいでありますよ」

「えーと上曰く『陸戦なら本職に任せようぜ』という事らしく任されてやつて来ました

……妖精を」

「まつて？最後妖精つて聞こえた」

「妖精は見えますが陸軍なので『なら教官させようぜ（意味無いけど）』だそうです」

「日本の海軍に意地や誇りは無いのかよ！てか意味無いならいる意味も無いじゃん！」

「なんか心配だから人付けとこ的な思考回路なのでは？」
「うん、多分そうだろうな」

「で何故憲兵さんも？」

「陸軍の可愛い可愛いあきつ丸に手出さないように監視しとけ！だそうで
「出すかよ！」

「てか貴方達気を付けてください？ここ人間の軍人には当たりが異常に強いから
「りよーかい」

「じゃあ適当に空いてる部屋使つて？眠いから寝る！」「お休み！」

「「お休み」」

「……眠い」

「どうしたんですか？」

「昨日の夜にちょっととな

「？昨日の夜何かありました？」

「……え？もしかしてあれに気付いてなかつた？」

「飛行機にでも乗つて來たんですか？誰かしらが」

「……何で気付いて無いのに分かるんですかねえ？」

「まあ横見れば何となく分かりますよ」

そう横では自分に関する書類を終わらしている大佐と中佐がいた

（……そいや俺つて少佐だよな、いくら組織が違くとも中佐や大佐つて上の
人間だよな

？）

（まついつか）

「ところで貴方達はどちらの人ですか？まあ階級章見れば陸軍の大佐と中佐ということは分かりますが」

「私は憲兵司令部隸下北部憲兵团司令部釧路地区憲兵隊第十八分隊隊長宮崎　進陸軍憲兵大佐であります」

「えつええ、早口言葉みたいですね」

「ですよねえ、もつと短くすれば良いのに……」

「まあただの第十八分隊の偉い人とでも」

「分かりました」

「でそちらは？」

「はい私は『新設』単冠湾泊地第一特別陸戦隊顧問の陸軍中佐です」

「？特別陸戦隊って戦時のじやない？」

「はあ、提督今は戦時ですよ？」

「いやそういうことではなくて今は『対人の』戦時じやないよ？」

「ええなのでまあ普通に妖精さんの戦車部隊見てる人ですね」

「何両ぐらい？」

「一個中隊なので十五両位ですね」

「そうか、なら陸戦隊の訓練もしなけりやな」

「さて仕事です提督」

「いつもより（陸軍の三人のおかげで）凄く早く昼には全て終わっていた

「なあ」

「ええ」

「また」

「ジエットが」

「「「来たよ（疲労困憊）」」」

今度は何機か編隊を組んできたのだがやはり変な音が聞こえる

キユルキユルやガチャガチャに普通にエンジン音

後はくろがね四起だつけ？の音が聞こえる（今頃何で使つてんだ？）

「提督、飛行場に一個中隊の陸戦隊と一個分隊の憲兵隊、それに一個中隊の飛行機が止
まつてます」

飛行場の壇上

「第一特別陸戦隊！只今着任しました！」

凄く綺麗で場違いにも可愛い妖精さんの敬礼がそこにあつた

「釧路地区憲兵隊第十八分隊もここに着任しました！」

こちらも見事な陸軍式敬礼である

俺は凄く綺麗な海軍式敬礼を返してやつた

演習

あの後着任関係の書類を終わらせ何処に皆さんを置くかとなつた

「よしあそこの小屋ぶつ壊して更地にしてから陸軍駐屯所作ろう」という空の言葉から
昼からの突貫工事が始まつたのだが例のごとくまた半日で終わつた（妖精さんの力つて
スゲー）

鎮守府から飛行場挟んで反対側に作つた陸戦隊の戦車格納庫に鎮守府の横に作つた
憲兵駐屯所があるのだがなんだろう狭く感じる

因みに妖精仕様の戦車は少し小さいとはいへ軽自動車程はある（艦載する時は札の様
になり妖精は艦装内に入り大発と重ねて海に放ると妖精が異空間から転移され普通自
動車程の物が島ヘレツツゴーする）（飛行機も同じようである）

「疲れたあ」

「提督殿も馬鹿でありますな」

「それ提督付ける必要ある?」

「無いでありますな」（ゞノ・▽・、）

「絵文字みたいな表情するの止めよ?」

「戻りますよ、後忘れないで下さいね？」

「はい」

俺は艦娘達も動員するため間宮を皆に奢る事になつた
「ホント助かるぜ？提督さんよ♪」

「ホントノリノリだな弥生に瞬殺された人？」

「いやあ駆逐相手に『ふふふ？怖いか？』とか言つてる癖にあいつに喧嘩売つて秒殺だも
んな」

少々声真似を入れ煽つていたらドンドン顔赤くして「ファー（激怒）」みたいな事言つ
てたんで龍田に連行してもらつた

「はあ疲れた」

「（ ； 。 ピ。 ）

「人の事煽つといてよく言いますね」

「褒めても何も無いよ？」

「（褒めて）無いです」

「やめなさい女性なんだから」

「（# 。 ピ。 ）」

「ごめんなさい何でもしません」

その後少し怒られながら奢つて財布がすっからかんになつた提督であつた
翌日

「えーと? 今から陸戦隊の実力見て良いかい?」

「ええ (多分)」

「ぜつ全員乗車!」

それからしばらく運転技術等を見たのだが……これは酷い
まず、発進までに5分かかるつている、おそらくクラッチの繋ぎがあまり上手くないの
だろう

さらには主砲の精度が論外である、高々500mの目標に8mのズレは許容できない
これは訓練が必須だな、三ヶ月後には陸戦隊を作戦に投入する予定だが間に合うだろ
うか

「あの君たち?」

「はいい」

「何故?」

「僕達妖精は勘を取り戻す迄教習するのは知つてます?」

「うん加賀さんとこの飛行隊長に聞いた」

「それで思い出しはしたんですけど……」

「ん？ つて事は……もしかして？」

「ええ勘が戻つてないのにここに転属になりました」

(△。)

「ダメじゃん！ 履歴書触つちつたあ！ あの脳筋共ド三流の中のド三流寄越しやがつたなあ！」

「ごめんなさい迷惑ですよね」

「いや？」

「ふえ？」

「だつて教習すれば良いだけだし戦車乗れるし、時間なら三ヶ月ありますし？」

「ありがとうございます！ 宜しくお願ひ致します！」

「おつとう」

(これいよいよ俺要らなくね？)

「じゃあ基本的な操縦とかはお願ひしますね？ 林さん」

「了解しました」

結局やることがなくなつたでござるの巻きの助

「仕事はよ」

「……はい」

つてことでまた餅つき方式でトンテントンテンカリカリカリカリ書類をマツハで終わらす加賀と空であつた

昼過ぎ

「帰つたぞほい報告書」

「はいはい、んOK」

「まあ俺様に掛かりやこんなもんよ」

「駆逐とは問題無いか?」

「ああ、てか前までも問題無かつたぞ?」

「そうか」

そう我が鎮守府では遠征番長こと天龍と第六で長距離練習航海という名の修復材輸送や龍田先生と愉快な仲間達で海上護衛任務（ガチ）での燃料弾薬の輸送及び由良さんと静かな仲間達での防空射撃演習とボーキサイト輸送等ゲームだつたら王道周回遠征をひたすら回つてもらっている

「さて今度演習がてら鎮守府近海を哨戒しようと思うんだが」

「俺が！」

「行かせないので誰か推薦してくれないか?」

「チツ」

「あれ？ ねえ今舌打ちした？ ねえしたよねえ？」

「気のせいだろ、まあ推薦なら摩耶とか愛宕とかかな？」

「その心は」

「多分うちの鎮守府で一番出撃回数少ないの重巡だぞ？」

「ああ！」

「んじやそれに駆逐と軽空母付けて哨戒しとけば良いね」「まあそうだな」

「つて事で今から哨戒出てもらうのでよう」

「つて事つてなんやねん」

「まあ適当に回ってきてね」

「編成は今ここに居る龍驤、摩耶、雷、暁、電、響で旗艦は龍驤でお願い」

「にしても何で今更なんだ？」

「前は知らんが俺が来てから半年は出てないだろ？」

「でも司令官？ 演習は時々したわよ？」

「お前らが一番分かつてはいると思うが演習と実戦は違うからな？」

「でも力量維持にはなつてているはずだよ？」

「正直言うと反攻作戦の前だから普通に哨戒してほしいんです」

「けどキミイそんな事したら奴さんにバレない?」

「敵さんはこんな辺境の土地なんてまともに戦えるやつなんて居ないと思つてるんじやないか?」

「んでも何かしらしてくるんじやない?」

「新規鎮守府でまともに統率の取れない奴等の演習だと俺だつたら思うが?」

「そうやな」(半年前キミがやつたの覚えとらんのかねえ?)

「まあ君達が俺の来る前に何もしてなかつたらな」

「大丈夫大丈夫、一、二回来たけど誰もおらんようにカモフラージュしたさかい何もせず奴さん帰つて行つたで?」

「何で?」

「配給無いんやから当たり前やろ?」

「そうだな」

軍刀

「ふう」

あの後も少し仕事をして今は自由にしている

「一昨年はこんな事考えられませんねえ」

「ん？ ああそうか俺ここ来てまだ一年半だつたな」

「ちなみに一番新規でここ来たの提督が来る一週間前だつたんですよ？」

「お前ら本当にスゴいよな一年で三人の提督を辞めさせるって」

「何か感じ取つたんですよ『あつこいつガチ屑だな』つて」

「怖い」

「まあ提督も少し警戒しましたが何も考えていなかつただけでした」

「酷いだろ流石に……でもまあ君達が自由なら良いんだよ」

「いえ」

「厳しい顔してどうした？」

「未だに何人かは職務を遂行中で十名程は大本営にいます」

「え？ 大本営の方は知ってるけどまだいるやつおるん？」

「ええ九州等の方では監査する方も屑なので隠蔽があつてもおかしく無いです」

「へえ」

「ところでちと剣道場行つてくる」

「何故?」

「あれから日向に週一で良いから真剣勝負しろつて言われた、なんでや」

「そうですか」

剣道場

「ということで真剣『で行う』勝負の始まりである

「ということで提督」

「はいはい」

「それで私を斬つてくれ」

「は? そしたら死んじやうぜ?」

「服に当てるだけで良い」

「それでも体に当たつたらどうするん?」

「服は艦装の一部、つまり装甲だから普通の兵器じや傷付きはしない、安心して斬つてくれ」

「安心できねえよ……んじや行つて良いんだな?」

「ああ」

俺は右手に刀を持ちフエンシングの様な体型になり忍者のように接近からの跳躍しつつ右手を思いつきり振り下ろす

がしかし日向の右手に収まる軍刀で弾かれる

「適當つて怖い」

「太刀筋が酷いな」

「まあ剣道は苦手だつたし、ふざけてやつちやいけねえよな」

「ああ」

ということで再び間合いを取り両手で、つまり普通の剣道の持ち方で握る

（！提督の雰囲気が少し変わった気がする）

「日向さん？ 余所見してちやあいけないね？」

「嘘だろ？」

提督は五、六メートルの間合いを『一瞬』と言つても良い速度で詰めてきた

「嘘じやない」

少し眼光が鋭くなつた氣がして一步思いつきり退く……がいつの間に剣先を前に向け直したのか左から刺してきた

私は反応出来ずそこで一瞬止まつていると何故か右袖の肩が「切れた」「え？」

提督は鋭い眼光のまま漫画などでよくある刀を振り払い鞘に納めていた
「……ふう日向さん？あれ？ちょっと斬れてるけど大丈夫！？」

提督はいつもの提督に戻り私を心配していた

「提督今どうやつて右袖に当たったのだ!? 今の軌道なら私は体に当たつていたはずである
速度なら軌道変更は無理な筈だ」

「ええ（困惑）」

俺は刀を右袖に当てその理由を聞かれている

「よくさ？『刀は斬るもので刺すものではない』って言われてるじやん？」

「ああ」

「だから左から右へずらす感じで刺すと斬った感じになるやん？」

「ということは最初から軸をずらしていたと言うことか」

「うんまあそくなんだけど服何で斬れたの？ 斬れないって言つてなかつた？」
「斬られて確信したよその刀を」

「何々？」

「あの時何か違和感をその刀に覚えたんだ」

「ああ刀を見せたときね」

「ああ」

「んで結局これ何？艦娘の艦装扱いの服斬るつて相当よ？」

「試製対深海用特殊軍刀」

「……は？」

「何故かは分からぬが提督が持つて来た時何かとんでもない物だと察したよ」

「そしてこれを見てはつきりした」

「これは人間が生身の状態で、上陸した深海悽艦に対抗出来る様にするため開発された」

「？でも前にこれは旧式だと言わなかつたか？」

「これには深海へ威力が微レ存の旧式をあてがい妖精の協力の元試作した物だ」

「でもそんなん聞いた事無いぞ？」

「当たり前だ、なぜならそいつは高コストだと言う事で割に合わないと中止したからな」

「だがそんなもんがここにあるわけないだろ」

「普通はそうだがこれは陸海軍合同で試作されている」

「どうせ前に聞いた船からの帰還方法が異常過ぎて艦娘用を劣化させたやつでもいいける

と思つたんだろう、何なら耐え切れずに死んでもあの事故で死んだと言えるし死んで困

る人間だつたらここに配属にはならない

「これ艦娘軍刀の劣化なんだ」

「ああ技術は流用だが耐久性が高い艦娘と違い耐用限界が低い人間の為劣化させたんだ
ろう」

「まあ妖精さん居れば基本通常兵器効かんしな」

「まあ艦娘軍刀もその軍刀も普通の刀として使用可能だ」

「ほう、で服どうする?」

「明石に頼もう」

「んじや俺もこれ解析してもらお」

「なにゆえ?」

「折れたときの保険」

「そうか」

工廠

「おーい明石ー」

うんここはいつも通り改修や開発に無関係の物まであるね

何だよホルマリンに工業用エタノールって、何に使うんだよ

「はいはい」

「あつ提督！珍しく日向さんもですか？」

「あるえ？明石は？」

「提督流石にそれは酷いと思うぞ？」

「三日前にイタリアに向かつたじや無いですか」

「ああそうかそうだつたな、まあいいや……つてか日向が言つたんだろ」「良くは無いですよ？……それで？何故ここに？」

「日向の服を直してやつてくれ」

「どうやつて切つたんですか？」

「少し刀でな」

「刀でどうやつて？私氣になります！」

「これ何だが解析頼めるか？」

「ええ当然ですよ！任せてください！明石が帰つてくる前に解析終わらして残念がらせてやりましょう」

姉妹が鎮守府に来る

茶番

「んじや後は頼んだぞ？」

「了解です！」

執務室

「提督」

「……はい」

「最近はまあまともに仕事をする様になつたなあと思つたのに今日は私達でもうほとんど終わらせてしまいましたよ？」

「ごめんなさい」

「本当に全くもう」（まあある意味提督らしいといえば提督らしいですね）

「加賀さんをあまり怒らせないであげてくださいよ？」（確かにそうですね）

「そうだな……んじやとりあえず明日は休んでくれ」（何を話しているのかは分かんないけど加賀さんの身体が心配でござるの巻）

「大丈夫大丈夫、一年半前まで書類仕事ばっかりやつてたから本気出すさ」

(大丈夫なのだろうか)

(そういやあいつどうしてつかなあ)

「どうしました?」

「ん? ああいや何でもない、そいや夕飯何かしらね」

「知らんな」

「なん……だと?」

「いえ今日はカレーですよ?」(*・。ω・。) b

「嘘だ! ドンドコドン!」

「やりました」(^ q ^)

「加賀さんヨダレあかんて」

「(。 。 ツ。) ハツ!」

食堂

今日はカレーにカツが入つてました (誰かは言うまい)

「カツカレーつてさ……何でこんなに美味しいんだろうね」

「それはカツカレーだからです」

自室

なあ知つてゐるか？この鎮守府つてさ自分以外A L L女子でさ？（え？陸軍さん？あの人達は自分達の宿舎にもあつから良いんだよ）風呂一つやん？そんで俺男やん？

最初は（おいどうすんだよこの状況）つて思つたよ？けど時間帶ずらして入るスタイルして早かつたり遅かつたり気ままに入つてたけどさ？さつき帰り際に見てきたら清掃中つて書いてあつたんだけど？（ああ妖精さん達もたいへんやなあ）とか思つたけどよく考えてみ？

艦娘の入浴時間外→清掃中→提督遅めの入浴スタイル

詰んだよ？ねえ、これかなり詰んだよ？

「どうすんだよ！この状況！」

長考している間に何故か大淀さんが入つてきてた

「提督うるさいです」

「すいません」

「で？どうしたんです？」

「今日風呂に入れないのです」

「ああ今日月一の大清掃の日ですか」

「そうですね畜生」

基本鎮守府では風呂がデカイからいつもの風呂洗いとは別に月一で妖精さんによる

入念な清掃が入る

「よし提督」

「なんですか？大淀さん？」

「ドラム缶風呂にしませう」

（△。）

「ドラム缶に水道から水入れてバーナーで炙れば大丈夫だつて安心しろよ」

「やめるおー！あとバーナーで炙つたらドラム缶蒸発すんだろが」

「んじや普通に焚き火でいいですね」

「ああ」

十分後の鎮守府裏口外

「大淀さん？」

「はい？」

「幾らなんでも早すぎません？」

「大丈夫ですよ？」

「いや？何が!?湯気すらねえよ？まだ冷てえよ!!」

「では提督は熱湯に入るの？」

「んなわけねえだろ？つか40度でも湯気出るよ！」

「提督が着替え終われば丁度良い温かさです」

「その言葉信じるよ?」

「ええ」

あまりにも不安な会話だがとりあえず着替えることにする

にしても、去年の今頃と違つて笑顔が増えたな、あの頃は散々トラウマを抉られたぜ喧嘩もした、何なら殺し合い一歩手前まで行つたこともある、それでもここまで馴染めたことは誇りたいな

さて思い出しているうちに脱ぎ終わつたが、どうだらうか?

「おお湯気もちゃんとあるし湯加減も丁度いい!」

入ると冷たかつた主に足が(安心してください(タオルは)卷いてますよ?)

「なんでや!? 何で足元だけ冷てえんだよ!」

「見ろ! 人がゴミの様だ!」

「三分間待つてやるその間に謝罪したまえ」

三分後

「さあ時間だ答えを聞こう」

「バルス!」

「ああ! 熱つ」

「実はこれ大型のコンロです」

「うん何で？」

「イベントとかで使う様の十人二十人前の料理が作れる優れものです」

「よく壊れないね」

「ここにも艦娘の技術が応用されてますから」

「戦争が科学の進歩を促進する良い例だね」

「まあ良いや戻つてて良いよ？ 寒いっしょ？」

「では」

「真冬だしな」

「ええそうですね」

十分後

無事に風呂の問題を解決させてすぐに寝ると何故か家で起きた

「お兄様お兄様私寒いです」

「だな、布団入るか？」

夜の就寝前の様だ

「弟よ、いつになつたら妹離れするんだい？」

「何言つてんだ馬鹿姉いつ俺が妹にくつづいてんだ？」

「どの口がそれを言うんだか」

「お兄様つ寒いです！」

「ああすまないな」

布団を肩まで掛けてやりつつ、ふと思う

(あいつは今何処にいるんだろうな)

「お前もだぞ?——本当に仲が良すぎるだろう」

「姉貴は明日受験だろ?」

「ああ、んじやおやすみ」

「ああおやすみ」

「おやすみなさいお姉様」

そう言いつつ電気を消して自室に戻る姉

(ふむ……姉貴があんなに身長高いって事はいつだ?)

「……とく……て……さい……とく・きて・ださい」

「提督! 起きてください」

「ふあ?」

いつの間にか朝になつていたでござる

「なあ加賀さん」

「なんですか？早く着替えてください？」

「うんまあそうなんだけどさ、夢見てるときつて早くない？時間の経ち方」

「そうですね」

「そいや後2日が明石が帰つてくるまで」

「明石さん大変ですね提督のお使いでイタリアまでつて」「と思うじやん？」

「ねえやめて？その（うわあこいつスツッゲエうぜえ）つていう日悲しくなるから」

「よくわかりましたね」

「（スルー）あいつイタリアの工具買つてくるつて言つてたからな」

「ああなんかいつも通りですね」

自由

あれから普通に仕事に入った

「まだ十一月なんだな」

「ですねえ」

「最初は頭が可笑しいんですね分かりますつて思つたけどね」

「提督は外でも基本そんな格好ですけどね」

「寒さ対策してるからいいんですぐ」

「でもマフラーくらいは着けた方がいいのでは？」

「仰る通りで手袋のおかげで手はまあ暖かいんだけど首が死ぬ

「買えば良いのに」

「この沖縄本島より明らかデカイ島の半分が軍用地だよ？島の衣料品店すら遠いんだよ！何で縮小しないんだか、どうせ使わねえのに」

「いえ？半分ではなく沿岸100キロに内陸10キロの1000平方キロくらいですよ

？」

「それって1／4—5だよね？」

「体感はそんな感じですね」

「何かもういいや」

「ホント明石あいつ一週間の予定を5日間に短縮するなんぞどうやってやつたんだか」

「今の時代旅客機で日帰りできる距離ですかね」

「旅客機ならな?」

「一人でオートバイロットもねーのに」

「どうかこのユーラシア大陸のどこを中継地にしたんでしょうね?」

「大きい湖にでも着水したんじやね?」

「そうですね」

なおこんな話してゐるのに問題無く餅つき方式は稼働しています

午後3時

「ヘーイテイトクウー、ティータイムデース」

「司令もいかがでしよう」

「やつたぜ」

「やりました」

「では用意しますね?」

と言つた瞬間に用意は終わつた

「はやつ！」

「ひえー！？」

「いつもニコニコあなたのとなりに這い寄る混沌！赤城です！」

「つまりお前は食いに来ただけだろ」

「まあそうですね」

「いやそこはせめて否定しろよ！」

食べ物の匂いを嗅ぎつけると何処からともなく（今回は屋根裏）現れる赤城：お前いつもどっから裏入つてんの？

仕事後

「ふう加賀さんや」

「はい？ 何ですか？」

「ご苦労様」

「今日も無事終わりましたね」

「明日は日頃のお礼で間宮券を上げよう

「やりました」（＊、▽、）♪

とまあなんやかんやと時間は過ぎ、一日後の明石の帰還である

「これは零式水偵ですか」

星形レシプロ特有に音が聞こえ窓の外を見ると何故か曲芸飛行をする零偵がいた
「ん？」

「何でだろう落下傘が見える

外に出て落下傘を回収するとライフルと拳銃だつた

「つておいいー！何さらつと危険物投下してんだあの馬鹿姉え！」

着水後飛行服を着た明石ドラム缶が降りてきた（まあ普通なんだけどね？）
「なあ何で機体の後方増槽のとここに穴が開いているか聞いてもいい？」

「ああ日本海ではぐれ戦闘機三機に追い回されました」

「それ大丈夫なのか？」

「別の鎮守府の航空隊が助けてくれました」

「そうか、んで姉貴は？」

「真ん中に乗ってるはずですけど？」（どうか提督はお姉さんの事姉貴って言うんですね）

「スーパーローリングアタック」

走つて飛び蹴りに横回転を加えた謎の攻撃をしてきたから一步後ろに下がつてやつた

「誰が避けていいと言った！馬鹿め！」

「いや馬鹿はお前だろうが！何会つて数秒で相手に蹴り食らわせようとしてんだ！ゾンビとか居てもお前なら倒せんじねえの？」

「いや無理」

「無理なのかーい、なんで知つてんだよ」

「んで金」

「えーと後で良い？」

「いいけど払われるまでここにいるからな」

「ああ部屋なら無駄にあるしな」

「てかお前大学はいいのか？」

「去年卒業して今は自由だ」

「マジかてつきり留年してんのかと……てか自由つて二ートやん」

「ふつ私に労働という二文字はない！今のところは」

「いや最後弱気になるなよ」

「…えっと提督？そちらの方は？」

「ああこいつh 「如月灯という者だ、この弟が世話になつてゐる」

「いえ私達は助けられた様なものですから」

「先週まで歐州のドイツにいた」

「こいつは高校卒業後何を思つたのかドイツに留学した」

「いやだつて弟に負ける姉つてなんかダサいじやん！」

「ならお前はダサいな」

「くうう否定出来ない」

「えつと話が見えてこないのだけれど」

「こいつ一回も俺に勉強で勝つたことはない」

「まあ向こうじやトップレベルの学校を首席で卒業しましたし？今じゃもう君は相手にならんよ」

「お前はいくつ敗北を重ねるんだか」

「知らんな」

「そんな感じで姉がうちの鎮守府に来た

「んじやとりあえず中入ろう」

「寒いぜこん畜生」

「お前ホント残念だよな」

「何が？」

「何でも……」

「どうした?」

「視線を感じる」

「提督早く来てください!」

「寒くて死んでしまいますよー?」

「提督ー」

「はいはい」

「お前何でそんな格好なんだ」

「中にはちゃんと着てますー」

工廠裏

「お兄様をびっくりさせてあげましょう」

「そこで何してるんです?」

「ふあつ!」

「あつえつとそのーですね?あのーだからー」

「逃げるんだよーん

「え?ちょっと止まれー!」

穂花

あれからちつちやい妖精さんの様なモノから逃げていましたが先程から見かけないので撒けたのでしょうか

あつ！私は穂花といいます、以後お見知りおきを

「ところでここは何処でしょう」

ドデカイ砲弾の様なものやランドセルのベルトが付いた旧式戦艦の排気管みたいなものがゴロゴロ置いてあります

「うーん今日は何調整しよつかな？」

灰色の髪を後ろでポニー・テールにした人が居ます、あれは冬用のセーラー服に見えなくもないな？

（とりあえずここから撤退しましよう）

何という事でしよう、よりもよつてこのような状況でガスタンクにぶつかるなんて「誰かそこにいるの？」

（ここは兄様の職場、軍の土地なのは自明です）
 （ここ）で出たらえげつない事をされるのでは）

「貴女名前は？」

がらくた（にしか見えない）をいつの間にかき分け目の前にいたさつきのセーラー
ポニテさん（仮）

「えっと如月穂花です」

「私は夕張よ、宜しくね？」

「えつ？ 俗にいう艦娘とか呼ばれてる系のヒューマンですか？」

「ええまあそうだけど何故ここに？」

「兄様ん」、こここの提督さんにご挨拶をと、思つたのですが道に迷い休憩しようと入った
ところがここだつた訳です」

「そう」（待つて？ 今兄様つて聞こえた気がするんだけど！ そういうえば提督の名字も如月
だつた気が……）

「でもここつて一般人は基本的には入れないはずじゃ……」

「私本日付けでこちらの泊地に配属になつた『陸軍二等兵』です」

「陸軍つて事は憲兵として？」

「多分」

「まあとにかく提督の所に行きましょう」

「そういえばここは？」

「簡単にいうと武器庫よ」

執務室

「やっぱ寒いっすね」

「やはりネックウォーマーと手袋でも買った方が良いのでは？」

「そうさせて頂きます」

「提督ーストームより炬燵の方が良いですよ?」

「指先と足先があ」

「はあ明石何か要るか?」

「では温かいココアで」

「じゃあ私も」

「私もお願ひします」

「ん」（溶けてる可愛い娘三人とか反則だと思うんですが）

給湯室

「ココアココア」

「そういえばさつき外で感じた視線はなんだつたんだか気になりますねえ

「ヤカンに水入れーの火に掛けーの能力使つて熱伝導上げれば三秒クツキング完成」
ピ——と高い音を発しているヤカンの中のお湯をココアステイック入ったコップに

シユユユユユト！超熱そう！

「なんだい？この足音は」

小気味イイ足音が聞こえて駆逐艦のでも無いし金剛のでも無いし……と考えている提督の思考は数秒後の出来事に唐突な機能停止になるのである
「兄貴イイイ來てやつたぜよ！私が！」

全力疾走に移つた我が妹が給湯室の目の前に来る前に、バーンという爆音が響く
誰でも思考停止するだろ？目の前でTNT爆薬500グラムを爆破した音したら（え
？しない？君達の耳は大丈夫かね？まあちなみに家庭用花火が大体火薬5グラム位か
な？少ないと思つたらおわりです）

「……は？」

「きつ氣のせいだよ多分そう氣のせい」

「震えてる！震えてる！」

おつお盆の上に乗つけて、ココアを溢さないように

「へつへいお待ち！」

「どこのラーメン屋ですか？それ」

「外が少し賑やかですね」

「指先が冷たいお」

「遂に明石が壊れたあーー！」

「良かつた感覚が戻った」

「一分程明石・壊を相手にするとツッコミに疲れます……なんて数分前の出来事をすっかり忘れているとドアが思い切り開きました（もうやだめんどくさい）

「兄貴イイイ遅いツ！」

「性格がめつさかわってるうう！つてか兄ちゃんそんな子に育てた覚えは無いぞ！」

「兄貴に育ててもらつた覚えは無いぞ？」

「そんなマジトーンで言うな悲しくなる」

「ごつごめんね？」

「可愛い」

「なつ！ばつばか！」／＼／＼

「何だか摩耶ツンデレVer. を相手にしているようだ」

（（それつて摩耶そのものなのでは……））

「んで？どつたの？」

「ここに配属になつたから挨拶しに来ただけ」

「そうか」

「三年ぶりでも如月兄妹はいつも通りなのであつた

「何故ここに三人も集まつてしまつたのか」

……三兄妹だつたわ（姉いる場合どーやつて書けば良いんだ）

「そういえば何故あんなことを？」

「ああやつて登場すればイメージ付くかなあと」（半メタ）

「もうネタ要員でしかねえよ」

「てかもう素でいいじゃん」

「にいは急に何を言つてるんだか」

「何故変なこと言つたみたいな雰囲気何だよ」

「昔はお兄様お兄sブベラッ！痛えな妹よ！何急に人の顔面殴つてくれてんですかねえ
！」

「にいがそういうこと人前で言うからだ！」

「昔はもつと優しかったのに」

「三年あれば人は変わるのだ」

三年ぶりにあつたら妹がちよつと狂暴になつてました

「最近人が急に増えましたね」（メタ）

「やめろ、何か色々やめろ」

「何もすること無いですね」（メタ）

「作戦は二ヶ月後で今は極端に寒いからね」（軌道修正）

（私は完全に空気なんですがそれは）↑ 夕張

認識

「そういえばにい」

「ああそうだお前なんでここ來たんだ?」

「おいここ軍用地だよな? まずそれ確認しろよ」

「姉えうるさい」

「なん:だとツ!」

「んで結局何でここにいるんだ?」

「ああそれはね? 私ここに憲兵さんとして着任したからだよ? 多分」

「ええ!? ナンデ!? 憲兵=サン、ナンデ!?」

「確かに何で憲兵なんだ? お前私が向こう行くとき海軍兵学校行くつて言つてなかつたか?」

「あああれねえ」

何故か明後日の方向を向き、頑なにこちらを見ようとしないサイドテール18才

「兵学校なら海軍直通だろう? 憲兵は陸軍じゃないか」

「良く分かつたな」

「バカにするなよ!? 私はこれでもドイツ軍とかフランス軍とかにコネあんだけんな!?

「マジか!」

「んでそこんとこどうなん?」

「えつとねー? 兵学校の最終試験で三回やつたんだけど無理だったから中退して陸軍に入ったの!」

「入つたの! ジヤねえよ! ジヤあお前中卒なん?!」

「んーん? 高等レベルはちゃんと修了証もらつたよ?」（中退するときに）

「なあ弟よ卒業試験とはそんなに難しいモノか?」

「いや? 練習航海でヘマしなきやなんの問題も…つてお前まさか…」

「うん何か色々とドジつちやつて」

そう清々しい程の笑顔をばらまき堂々と「普通は絶対に通れる試験落としちやつた☆テヘペロ☆☆」と宣言した妹に呆れるしかない姉兄であつた

「へつ兵学校を飛び級しまくつた人と同じにしないでよ!」

「はつはあ!? 妹よ! 俺が出たのは兵学校ではなく防衛大学校だ!」

「何が違うのかわからん」

「バカ姉の為に一応説明しておくと兵学校は中卒の人間が入る大学付属高みたいなもので防衛大はその字の如く普通の大学だ」

「それって兵学校の方が樂じやないか?」

「ああそれにその二つとも軍系だから実力主義だ、つまり高一でも高二一クラスの勉強、実質的な飛び級が可能だが兵学校の方が若干簡単だ」

(あの穂花さんと言う人や提督に提督のお姉さんもおかしいわ……だつて穂花さんは18歳で大学課程修了まであと一步、提督は防衛大を二年で卒業だしお姉さんも歐州最高レベルを二年……お前ら人間じやねえ!)

「まあそういうことだから宜しく、にい」

「ああ」

「ということで如月穂花二等陸兵は現時点をもつて釧路地区憲兵隊第十八分隊に着任しました!」

「つて二等兵かよ!」

今、俺達は七人で炬燵を囲んでいる……のだが、一つ気になることがある
「なあ夕張」

「何ですか?」

「お前さ……いつから居た?」

「ファツ?!最初からいましたよ!」

「嘘つくなつて、んな訳無いだろ？」

「ホントですって！私が穂花さんを案内したんですから！」

「本当だつたのか！」

「そう言いましたよね!?」

某ラノベの赤毛元王女の様な扱いを受けている夕張である

そういうえば穂花は女子だが憲兵さんに女子いたつけ？

「妹よ、宿舎とかは大丈夫か？」

「大丈夫ですよ、だつて憲兵さん五十何名のうち十名程度は女性ですから」

「疑問に思つたんですけど良いですか？」

「どうぞ」

「憲兵の場合は普通憲兵二等兵だと思うのですが、何故通常の二等兵なので？」

「ありつ？確かにそうですね」

「てかまず憲兵つて上等兵からじやなかつたつけ？」

おいちよつと待て？何で姉を除く皆さんがこちらを「おい嘘だろお前、そんな常識も知らないのかよ」という目で見てくるんですがそれは何故か分かりますか？読者の皆さ

ん

「提督、憲兵は70年代に階級幅を広げましたが00年代に大戦が始まつてからは人員

を他に回すため一種の当選方式になつています、つまり各階級の二百名程度が憲兵ですよ？」

「これは流石に私でも知つてゐるんですから常識ですよ？」

「何かグダツたけどつまり二等兵から大将までいるつて事だろ？」

「まあそこまで行くともう憲兵司令長官ですけどね」

「お前着任に関する書類あんだけ？貸してみ？」

「はい」(*・。*)ノ

「……おいこれってどつちかつて言うと陸戦隊に近いぞ？」

「なになに？ ふむふむ、普通の転属命令書の様だな」

「お前は何機密書類見てんだ、バカ姉貴」

「つて事は？」

「陸軍の野郎俺の可愛い妹を書類上の駐屯所所長にしやがった」

「oh……まあ私はにいの隣に入れれば良いんだけどね」

((((ピシツ)))

(なんだろう空間にヒビが入つた幻聴がしたぞ?)

「お前はずつとその口調で行くのかよ」(お兄様から兄様とかならまだしも『にい』つて
変わりすぎだろ)

「気に入らない？」

「うつ」（そんな罪悪感を倍増させるようなウル目をやめてくれえ！）

「良いよ別に、口調なんざ個人それぞれだしな」

「別に縛ってくれても良いのに」（比喩的な意味）

「「「ん?」」「」（物理的に解釈）

「何言つちやつてるんですかねえ!?」

「なあ弟よ？どういうことか説明してもらおうか？」（#・△・）

「提督？」（#・▽・）

「妹さんに何て事してるんですか？」（^ ^ #）

「oh 提督にそんな性癖が」（ 。 A ）

「皆さん？落ち着きましょ？ね？」

「「「「おいゴルア！」」「」（ 、 △ ）／

「皆さん絵文字みてえっすよ？」

「あーあ変な事言つちやつた」

「お前が原因だ！馬鹿野郎！」

睡眠

「んで、お前はどこに寝るんだ？」

「艦娘寮に入れれば良いのでは？」

「姉貴の一人部屋以外残り全部倉庫状態なんだよ」

「え？俺？あのあとボコボコのミンチになつたけど？」

「どうか、灯の部屋も埃が若干あるけど大丈夫なんだろうか
「にいの部屋で良いんじゃない？」

「よくありません！」

「何で？」

「風紀的な問題です」

「なんだろう、ゴゴゴゴゴって言う効果音みたいな音が聞こえるんだけど

「俺は良いんだが……」

「「私達が良くないんですね！」」

「は？何で？姉妹だぞ？」

「あのさあ、そんな「言っちゃった……」って顔してるの？」

?

「じゃ折衷案で誰かしら一人も一緒に寝るか？」

「「！」」

(タラシなのか?)

(兄様ですよ? 鈍感に突発的を足して3を掛けた様な人間ですかから仕方有りません)
(で? 何で空相手にはその呼び方じや無いんだ?)

(始めのキャラ付け(無メタ)で思つきし間違えたので今更だとにい位じやないと違和感
の極み!になります)

(お前も大変だな)

「おいそこ、何話してんだ? 姉さんが何故か共に寝ることになつた件について意見はあ
りますか?」

「いや、意見しかねえよ!」

「キヤー姉妹丼ですね!」(○・ω・○)

「おいいい! ちよつと待てええ!」

「ぐふう! ちよつなんで殴られたんですか今!?」

「だつてハードル高いじや無いですか!」

「加賀さんが乙m（ry

「あ、あああ目がア目がアアアあ、あああ」

「メツブシ、完了です」

夜の提督自室

「ということなので、もう俺は寝袋で寝ます」

「ふわああ、兄様ー？一緒に寝ましようよー」

「穂花が寝ぼけて兄様と！兄ちゃん感激イ！…呼び方も成長したと言うべきか」

「まあそうだろうな、そんな19にもなつてお兄様は無いだろ」（どうか穂花あいつ寝ぼけてる「フリ」だぞ？気付いて無いのか）

「可愛ええやないか」

「まあ早く寝ろよ？」

「ああ」

「逃がしませんよ？」

「そう言つて右腕にしがみつく妹氏（19）

ん？何か振りほどこうとしても抵抗があるんだが……

「えーっと穂花さん？起きてらっしゃる？」

「んーん？」

「可愛いんだから大人しく寝なさい」

(唐突なお姫様抱っこだと！兄様はちよくちよく優しいですからね、こういうところに
あの人達は惚れたのでしょうか)

「まあいいや、おやすみ空」

「ああおやすみ」

(今一瞬格好いいとか思つたのは錯覚だ良いね？)

「さて寝るか」

「さて仕事の時間だ」

さてあれからいろいろと姉と話して日付が変わつてから危機感を感じつつ寝た
で、今は仕事をしているが二人は姉妹そろつて爆睡中である

「あの二人は起こさなくて良いんですか？」(出来れば起きて欲しくないです、主に妹
さん)

「疲れてるからな、つてかお前ら今日も炬燵かよ」

「良いんです暖かいから」

「明石さんは工廠に行きましたけどね」

「その代わりに六駆がはいつてるがな」

「司令官！ 私が居るじゃない！」

「おう、んじや雷にはこの書類一ダースを宜しく」

「ハ ラ ショー、これは良いね暖かい」

「ふあああ」（。――） zzz

「暁は寝ちまつたから響、そこら辺にある毛布でも掛けてやれ」

「了解」

「司令官さん、私も何か出来るでしようか？」

「じゃあ膝の上にでも座つて俺を癒してくれ」

「はわわ、分かつたのです」

「え！ まじで!?」

そのまま俺の膝にシユユユウ！ 加賀さんの冷たい視線もシユユユト！ 超！ 怖いです

「仕事はしてくださいね？」（威圧）

「……はい」

「おはよう兄様」

「んおはよう」

「おはよう」

「ああ、つてか本当髪くらい整えろつて……仮にも女子だろ」

「ならやつてくれ」

「はあ……電、君のドレッサーを使つてもいいかい？」

「分かったのです、案内するのです」

第六駆逐隊の部屋

「ありがと電」

「どういたしまして、なのです」

と、この様に姉妹の髪を整えているが忘れちゃいかんのがこの間穂花は（俺の柄に見えなくもない）抱き枕を、灯は超可愛いパジャマと言われるものを着ていてここまでの道中は駆逐艦に「可愛い、可愛い」と言われていた事である（尚まだ寝ぼけている……え？長い門？知らんな）

「はい終了」

「ありがと、にい」

「あれ？抱き枕は？」
「何の事？」（目力）

「何でもない」（恐怖）

「着替える……ハツコ家じや無い！」

「今更!?」

「服見られたあ」（ ；▽；）

「気にするな、何も無かつたからまあ流石に二十歳過ぎて小学生なパジャマはないだろ
……服持つてくる」

数分後

「ほい姉貴の分、そいや穂花の無かつたんだけど俺ので良い?」

「そつか今日だつた、色んな荷物が来るの」

「遅いわね? ちよつと見てきますね」

「はーい」

「ふえええ!、にいの大きいよお」

「気にするな、ほら早く」

「もう……んつ」

「よし入つたよ?」

「良かつた」

「つて何してるんですかあ!」

「ぐうえ」

数分後提督はボコボコの状態で発見された

「いかがわしいことをしているからです」

「いや!?してなかつたよね！ただ服着せてただけだよね?!」

笑氣

さて、あれから少々加賀さんへの説明と姉貴の「私のイメージが……私のイメージがああ」というモノを鎮めていたのだが……

「なあにこれ」(・・ω・・)

「何故か皆さん寝てますね」

「何が……ん?」

「どうした?」

「何か匂わないか?」

「言われてみればそんな気がしなくもない」

「ああ! 思い出した、これ亜酸化窒素だ!」

「亜酸化……なんですか?」

「ああ、俗に笑気ガスと言われて麻酔に使われてるあれか」

「でも何故?」

加賀さんや……もう、一人以外思い浮かばないだろ

それに何か走ってきてる奴居るし、絶対ソイツダツテ!

「（ド）無事ですか！」

「ドアは静かに開きましょう」

「すみません、でも大丈夫みたいですね」

「どこがですか？」（#。△。）「ゴゴゴゴゴ

「ヒイ！すみませんすみません！寝ぼけてて薬品持ちながらここにきて薬品を置いてきてしまいました！」

「いや確かに寝ぼけてて何か意味わからんない行動するときあるけど、ここまで結構離れてたよね！」

「笑気ガスにでもやられたか」

「そうかもしません」

「どうかまず何故そんなモノを持ち歩いてたんです？」

「ちょっと新しい物でも作ろうかと思つたんですけど、瓶を取り違えましてね」

「どうか眠いのでガスを外に出さなくて良いんですか？」

「あれって空気より重くなかった？」

「確か空気が約1・2g／1で笑気ガスは約1・9g／1ですね」

「ここに扇風機無いの？」

「外に出すとオゾン層が壊れます」

「燃やせば良いんだよ、そうすりや温暖化は1／100になりオゾンは壊れない」

「はい、バーナー！」

「家庭用かよ」

「普通はそうだろ」

10分後

「もう良いだろ」

「業務用大型扇風機始動！」

「ゴウウウウ」という音を立て排気する扇風機と横に立つゴーグルした明石を見て一言

……

「シユール」

「ん……」

「皆さんも起きた様ですね」

「いつの間に寝てしまつたのでしょうか？というか寒いです！閉めてください！」

「明石くんは瓶を回収して戻りなさい」

「……はい」

「ビックリしましたね」

「だな」

「明石さん！」

「はいはい、なんですか穂花さん？」

「何か手伝うことあります？」

「手伝ってくれます？んじゃ一緒に来てください」

「はーい」

((その研究は失敗したな))

そんなこんなで二日が経つた

その二日間に明石と穂花を見たものはいなかつた

「加賀さん、珍しく紅茶をお願いします」

「本当に珍しいですね」

「作つて来ました」

「砂糖はあるかね？」

「ここにありますよ」

「ん」

そして三個程度入れ、飲んだのだが何故か多少落ち着かない

もしかしてまた明石だろうか……と、空が考えているとボンツという音と共に座高が

加賀さんより少し低くなつた気がするのだが……

（ん……ボンツつて何だ？ つてか何か胸が重いんだが）

「ファツ！？」

「どうした？」（あれ？ なんか女の子が俺の気持ちを代弁したんだがここに二人しかいな
いはずだよな……）

「嘘だ！ もう……こうなつたら、皆死ぬしか無いじやない！」

「いや、だから何があつたんだ」（またか……）

（ノド）ノ鏡

「ファツ！？ なんでや！ 何でワイが女子に成つとるんや！」

「明らかにあの砂糖モドキのせいですね」

「明石！」

「明石と呼ばれて参上！」

「これはなんだね？」

「お前のせい何だけどね！」

「ああそれいっちやつたんですね」

「つてか胸キツい」

「まあまあありますね」

「そつちじやなくて何故これが給湯室に？」

「元々大淀に仕掛けようと思つてたんですが女子から男子にはならなくて、後でドツキリにでも使おうかと思つてあそこに……」

「効果はいつ切れる?」

「最低一日ですね」

「どうするよ……妹のでも借りるか?自分のじやデカイし拳銃は問題無いけど腰の短刀が上下してしまってんだが」(刀は貰つたあの日以外帯刀してねえから関係無し!)

「つて事はベルトユルユル何ですね」

「言うな!わざわざ避けたのに!」

「私の貸しますようか?」

「胸囲が合う気しない」

「いつてもDとかですか?」

「分かりません!」(*△、)

「やつぱり妹に借りよう、丁度良いし言いやすいし

「お姉さんは?」

「あいつは胸タイラー国m「それ以上言うんじやねえ!」

「目がああ!目がああ!あ”ああー!」

「何!?俺の目に何か恨みでもあんの!?

「貴様私よりデカくなりおつて! いつそのこと揉ませろ!」
「はあ!?おまつ何言つてるか分かってんのか!?

「バルス!」（首への手刀）

アカリ は多大なダメージを負つた！

アカリ は気絶してしまつた！

「あつありがとう」

「気にするな」（～、ω・）

「待たせたな」（； 、 ツ・）

「待つてない」

「なん……だと?」

「私が呼んだんですよ」

変身

さて、前回何故か明石の薬により女体化してしまつた訳だが……なにゆえに俺は妹に弄られているんだ?

「なあ、何やつてんのか聞いて良い?」

「にい、(いや今は姉様だけど)の太ももに頬っぺたスリスリしてるだけ」

「やめろおー! 何かスゲエ変態だぞ!」

「気のせいだよ」

「何が!?

今俺は妹の着せ替え人形になつてゐる……

もうどうすれば良いのか分かんねえよ

「とりあえず明石はこれをどうにかしてくれ」

「良いじやないですか女体化、お風呂とかもキヤツキヤウフフが出来ますよ?」

「出来れば男でが良かつたかな!?」

「とりあえず仕事終わらせましょう」

「そうだな、明石達はもう自由で良いよ……」

「はい……すみませんでした」

「薬品はちゃんと管理しろよ?」

「了解です、艦装の調整してますね」

「ああ」

「女子の時だけでも一人称変えようかしら」

「確かに混乱を防ぐ為にもそれが良いのでは?」

「ん!、じゃあ私?」

「違いますね」

「じゃあ僕でいいや……異論・反論は認めないぞ」

「それで良いんじゃないですか?後髪は整えましょ?」

「ああ、男子だから良いやと思つたけど今は女子だからなあ」

「現役女子大生なんですから、髪はちゃんとしなきやですね」

「つてか設定はどうするんだ?」

「提督のご友人のボクつ娘女子大生」

「設・定・壯・大!」

（確かに知り合いに居るがなあ……今は22だつたかな?つてかボクつ娘だつたつけ

?

「まあ良いです、社会見学的な立ち位置で行きましょう」「了解」

その後は無事に午前の仕事も終わり、今食堂にいるのだが大淀さんと夕張には秒でバレました（＾＾）

「大淀さん……何故分かつたので？」

「身体運び等の癖つてやつぱりありますからね、そういうのでこの人は今こういうことをしようとしてるなつて分かるんですけど提督の場合は丸々一緒だつたのでね……流石に分かりますよ」

「特性の応用つてこんなところに使えるんだね」

「あつあの！お姉さん！」

「えつ？僕？」

「そうよ？どうやつたらそんなレディになれるの？」

「えつ？えつとー」（どう回避しようか！）

「！、まあ貴女はもう立派なレディだよ」

「ホントに!?」

「うん、君の姉妹も良い子達だからね、やはりそのお姉ちゃんというのは立派なレディになるんだろうなあ」

「えへへ、まあ皆私の自慢の妹達だからね！あつたりまえよ！」

「そういうところだろうなあ、レディたる所以は」

「ありがとうお姉さん！」

「ふう疲れた……これ食い終わつたら一回寝るわ」

「分かつたわ、何かあつたら起こすわね」

「ん、ありがと」

さて疲れて自室に着いた俺だがそういうえばフリフリが沢山付いてるんだなこれ
まあこれに皺が付いても困るし、着替えて寝るかね

「おやすみ」（――）　ｚｚｚ

一時間後

「提督起きて下さい！あの人来ました」

「何故？」

「あきつ丸さんの回収じゃないですか？」

「あきつ丸あいつ、来て3日ぐらいで『弥生殿、弥生殿お』ってずっと言つてたしな」

「でもホントに一週間でしたね」

「まあ名目上ここに所属するだけで実際あいつの持ち物つて言つても過言じやないし

な

「そうですね」

「着替えていくから待つていてくれ」

「分かりました」

数分後の執務室

弥生とは一言二言話して後は妹と話しているのだが……何故か発動機の音がするあつ！今着陸しましたねえ、ん？今日誰か飛行訓練するなんて言つてたつけ？あら？誰かしらが走つて階段を登つて来ますよ？何があつたんでしょうね？

ダンツ！「提督！緊急伝令です！」

「は？つてか大淀さん？ドアは静かに開けて？」

「そんなこと言つてる場合じやないです！」

「それか？見せてくれ

「はい……」

「……加賀、明石呼んでこい」

「仕事だ」

「了解しました」

「大淀、ここ任せたぞ？」

「ハツ！了解です！」

「すまないが姉さんは穂花を面倒みててくれ」

空や大淀が見た紙にはこう書いてあつた

『お願いです。私達を助けて下さい』

幌筵泊地艦娘一同

格納庫前

「提督？どちらへ？」

「ちと幌筵の馬鹿を始末しにな」

「航空兵装だけで足りるかしら？」

「戦闘機だけで十分だ、明石は輸送機を操縦してくれ」

「了解」

あれから数十分経ち幌筵の上空である

「降りてくれ」

「じゃあまずそこのリュック背負つて下さい」

「おう」（あれ？これパラシユートじやね？）

「んじや後ろ開けますねー」

「ブラ鎮提督とやらは始末しなければね」

「ああ全くもつてその通りだ、クズ以下の生ゴミに制裁を」「では行つてらっしゃい」

尚現在の高度は一万メートルである

パラシユートは空挺用の穴空いてるやつだよやつたね（＊、▽、＊）（受け身とんなきやじやねえかふざけんな！）

「我々の救いは死である！」

提督、面倒事に首を突つ込む

戦闘

「早速お出ましのようです」

空から空挺して地面で寝転んでたら幌筵の艦娘が主砲だけ持つて出てきました……
「おいおい……ふざけんなよ、こつちは一人だぞ？」

「すみませんがこちらも仕事なので……」

「朝潮、この人達もしかして拝島の提督じやない？」

「どんな人でも私達はあの人を守らなきやいけないんですね」

「どういうことだ？」

九四式から手を離さずにそう聞くと、とんでもない事を言われた

「話せませんのでとりあえず死んでください」

「そりやあまた唐突なこつた」

「助けを乞われて来た筈なんだがなあ……」

「これはもう無理でしようね」

「しゃあねえな」（つたく、他人に銃なんざ向けたくねえんだがなあ……それよか女子

でつせ?)

内心悪態をつきまくるが、ここで胸の拳銃嚢から銃を抜かなければ艦娘の12cm單装砲や12・7cm連装砲でミンチになることは明らかだ

「くそつ」

「発艦!」

三発を艦装に向かつて撃つがびくともしない

考えてみれば当然である、艦娘は艦装を装着した時点でその防御力は軍艦と同等

軍艦の装甲をたかだか8mm程度の弾丸で多少の損害も与えられないのは当たり前である

そんな自分をみて加賀さんは艦戦を一個小隊出したのだろうが、7mmや20mmでも損害は与えられない

「私達艦娘に拳銃を向けたところで意味はありませんよ?」

「そうかも知れんが、ではこれはどうだい?」

「?」

「!」

そうして明石の工廠から持つて来た閃光手榴弾を放り投げる

「くつ……皆! 大丈夫? どー!」

「すまないが先に行かせてもらう」

(閃光手榴弾つて視覚だけじやなく聴覚も殺るんだな、ビックリしたぜ)
 そんなこんなで今は二階の廊下を走っているのだが、やはり同じ『泊地』だからだろうか、構造は同じだつた為執務室を見つけるのは苦労しなかつた

しかし、そこには誰もいなかつたのだ

「ところでの小隊はどうした?」

「泊地上空で待機させているわ」

「話は変わるんだが……ここ何だか、変な臭いがしないか?」

「そうね、これは……!」

「どうした?」

「何か嗅いだ事のある臭いだと思つたら血ね、これは」

「何でこんなに充満しているんだよ」

「それは私が答えようかな?」

「!」

「やあ私はここで提督をしている七瀬と言うものだ、宜しく」

その後ろには外で目眩ましをした朝潮(?)達と同じ死んだ目をしている大淀が居た

「ハツ提督？ 研究員の間違いじゃないのか？」

「言うねえ、確かにある研究もしているから研究員でも間違いないかな？」

「んで？ この血生臭さはどういうことだ？」

「それはね？ 人体実験のせいだよ」

「なつ！」

「一般人でも拐つてんのか？」

「そんな訳無いだろう？ ここには特殊な材料が百個以上あるんだよ？ これを使わない手はないよ」

「つ！ あんた艦娘を何だと思つてやがる！」

「少佐ごときが大佐に向かつてどんな口を叩くんだい？」

「あんたみたいな奴は軍人でもまして人間ですらねえよ！」

「ほう？ たかだか道具にそこまでムキになれるとは……面白いねえ？」

「道具だと？」

「ああ、道具に道具と言つて何が悪いんだい？」

「艦娘は元々人間だ！ 艦装を付けてようやく艦娘になる！ あんたが接してんのは人間の少女だぞ！」

「通常の人間より数倍以上強いモノでもかい？」

「当たり前だろう！」

「ハツあほくさ」

「ほう？ ならてめえは反省しないんだな？」

「反省？ 何故？」

「ならばその罪、万死に値する」

「殺れるもんなら殺つてみろよ！」

「……」

そうして空は静かに軍刀を引き抜き五メートル程の間隔をおもいつきり詰め左上から振り下ろした

「ヒツ」

「自分が煽つたんだろう？」

「一回で殺しちまつたらつまらねえからなあ」

「ツ！」

（提督的眼光が鈍色に？ 何故？）

「散々艦娘にひでえ仕打ちをしたんだ、こんなもんじやすまねえぞ？」

「止まれ！ 来るな！ 撃つぞ！」

どこから出したのか、その手には拳銃を持つていた

しかもM1911 コルトガバメントである

(こりやあ当たつたら怪我じやすまねえだろな……)

「そんな照準もまともに出来てない物が当たるかよ」

「止める！本当に止めてくれ！俺には、俺には家族が……母親や父親、妹もいるんだ！だから頼む！」

「そうか、てめえのせいで死んだ艦娘達にも家族が居ただろなあ？」

いつの間にか廊下の端にある大きめの窓の前に来ていた

「止めてください」

「何故？」

「提督は……」

「止める！大淀！」

「提督は脅されて！……」

大淀が話そうとしていたその時に七瀬と大淀が頭から血を流し倒れた

「おい！お前ら！」

「加賀！双眼鏡は持つてるか？」

「はつはい！ここに！」

「どこだ！どつから撃つてきやがった！」

空が双眼鏡を覗くと背中に白丸地に赤い十字を付け下にU・S・Sと書いた刺繡をして
いる上着を来た後ろ姿を見た
「しかし……その死ではない」

混沌

「野郎つ」

そう言つて持つて来た九九式を構え、九九式狙撃眼鏡を覗くがその時にはもうそこには誰も居なかつた

「U. S. S. と書いてあつたが……」

「提督……」

「もうこの二人は死んでいるよ、脳幹を一発だろうな」

「そう……」

「執務室に向かうぞ」

「何故?」

「上に連絡する」

執務室

「もしもし？こちら単冠湾所属の如月少佐！ブラック鎮守府制圧完了の報告だ！」

「こちら海軍省大本営通信部、了解した、司令長官へ伝達する」

「次はうちだな……、あもしもし？空だ、陸軍さんを空挺で運んで来てくれ、多分装備は

SIGだけで足りるとは思うが一、二丁89式を持つてきといてくれ

「分かりました」

「ふう終わった」

「ねえ提督」

「なに？ 加賀さん」

「ここ異常に人が少なくないかしら」

「ああそれは俺も不思議だつたんだ、本来皆が思い浮かべる……というか君達の中にも経験した者がいるかも知れないパターンは憲兵などの人間も一緒に艦娘に対して、何かしらをすることが多いだがここには部屋の状況を見た限りでも、最高二十人程度しか居ないんだよ」

「一階に行つて見てきましよう」

「だな」

「一階の執務室下

「特に何も無いわね」

「……そうだな」

「どうかしました？」

「何でもない」

「そう……なら良いのだけれど」

空は暗がりの中に付いている赤い液体を見つけていた

加賀さんには分からぬのだろうか？ どうしても臭つてくる鉄の臭いがあまりにも
キツイというのに

「加賀さん、少し気分も悪いし外に出よう」

「え、ええ」

「チツ」

玄関前

「ところで何故、大本営にも連絡を？」

「んあ？」

「そもそもこれは、こここの艦娘の子達からの連絡でしょ？」

「一週間ぐらい前から中島さんに行つてくれつて頼まれてたからな」

「えつ？」

「ただ、ブラ鎮となるとどう来るか分からぬから兵装の準備をしていたんだ」

「だから閃光手榴弾なんてモノを持つていたのね」

「ああ、まあ結局のところ殆ど意味無かつたけどな」

と、そんな話をしているとジェットエンジンの音が聞こえて来た

飛行機が飛行場に着陸すると30人くらいの憲兵さん達が出てきた

「憲兵第十八分隊の半数、到着しました！これより残存する兵員の回収及び実態調査を開始します」

「宜しくお願ひします、大佐」

「私達は帰りましょうか」

「せやな……」

(これは……今すぐにでも報告しなければ)

鎮守府

「んじや今日はとりあえず休みなさいな」

「ええ」

(さて……すっかり忘れていたが私は今女子なんだよなあ)

「ツ！」

「熱もないのに頭痛とはな……あれはトラウマになりそうだ」

「私も寝るか」

そうして睡眠に移る空は少し体調が優れないように見えた

「んー、はあ」

夕飯の少し前に起きたのだが、二時間程度寝たからか身体が重く感じるでござる
「んで、何か色々考えるのが面倒だつたから食堂に来たんだが……加賀さん、これから一
体何が始まるんです?」

「大惨事大戦だ!」

「大淀さんこれは一体?」

「まず一時間程前に憲兵さん達が帰つて来ました」

「うんうん」

「次に間宮さんに今日は唐揚げ等の揚げ物が欲しいです、と憲兵さんが言いました

「うんうん、うん?」

「そしたら駆逐艦等に広まり揚げ物の争奪戦が始まつた訳です」

「ちよつと何言つてるか分からないです」

「もしかして皆さん純粹なチルドレンハート?」

「ですね」

「oh」

現在の状況は、何か……なんと言うかワチャワチャしています

どうすればいいんです?この状況、ドタドタと大きな音を立て戦争中である

「おい、今の海軍が発砲した音だと思うか?」(現実直視拒否)

「いやあ嵐の雷鳴だろう」（便乗の現実逃避）

「吉田です！」（錯乱）

「衛生兵！もうこいつら……ダメみたいですね」
「この状況はもうカオス、混沌または無秩序というしかないね」

「うちの鎮守府には珍しい常識人サン＝ドーモ」（時雨——しぐれさん——？君の言つてる
の全部同じだぜよ！？）

もう本当にカオスな单冠湾の食堂であつた

もうなにこれ、超意味不

一時間程後

「さて……由々しき事態である」

「何故私はここに呼ばれたんだ？」

「なあにこれ？」

「俺！風呂どうしよう！」

その時姉妹の頭に「ピシャーン」というS Eが流れた気がした

そう、俺がこの二人を呼んだのはこの状態を知つてゐるからといふよりも、「最悪」とい
つらなら見られてもOKだからである

だつて何か加賀さんとか大淀さんとお風呂つて倫理的にアウトな気がするじゃない

?

でも、家族なら足滑らせて胸に（殆ど無いけどね！）シユウウートしても普通に事故で済むじゃない？

（え？ああいえ、予定なんてありませんよ？大丈夫ですって、そんなことあるわけ無いじゃないですか！それにもしあつてもシベリアにちょっとクリスマスまで旅行するだけで済みますつて）

「しつ仕方ないね、一緒に入ろつか」 //

「そうだな仕方ない」（姉としての義務感）

風呂

さて、今俺は風呂場に来ている（姉妹連れてな！）

「真面目にどうしませう、いやね？向こう行く前にトイレの前で弥生に会つて『どっち入りや良いと思います？』って聞くような人間に風呂とか……あれか？俺をストレスで消したいのか？いいぜ、だつたら消えてやらあ

「にい、早くして？」

「先入つてるぞ」

「えつああ

姉貴が小さい頃と同じ様に接してくれるのは良いんだが、妹よ何顔赤くしてやがるんだ！

別にやましくともなんともないだろ！

てか、姉貴はこういうときすげえしつかりしてるよなあ（感心）

「はあ、極力自分も見ずに頑張るか……」

「ファツ!?」

ハハツおつかしいなあー、目の前に天井が見えるぞ？つてか背中から落ちていつてる

錯覚を覚えるんだが？

デシ！

先生！背中がめつっつき痛いです、どうすれば良いですか？

(知らんがな)

(あら、居たんですか?)

(お前今日一日何か可哀想だつたから、苛めないでおいたんだ)

(ちよつと待て、お前確信犯だな?)

(知らん)

(どつか行きやがつた……)

「ちよつ！にい大丈夫!？」

「大丈夫か？」

「まあな、というかあまりこつちに来ないでくれる？」

「ああ済まない」

「ええー？何だつまんないのー」

「ちよつ！ちよつ待てよ！おい待てつて！」「

「良いか？この事は知らぬ存ぜぬで通すんだ」

「おつおう」

うちの姉弟つてチョップで気絶させるの得意なのかな？

さて、やつて来ました体を洗うお時間です

まず、私は足を洗いまして次に上半身を洗います（人称変わつてるのは気にするな、髪？んなもん一日洗わなくても最悪どうにかなる！）

すると「何故髪を洗わないの？私が洗つてあげる」と妹が髪を洗つてくれます、ちょつ

と可哀想な胸を押し付けて……
さらに「それじやダメだろ」と姉が上半身を洗い直してくれます、首とかを比較的の念

入りに

「なあ、つ!? 首とかあ！ 脇腹はあん、止めろつて！」

「ええ？面白いじやん、というかどうしたの？顔赤いよ？」

「そりやお前らが色々するからだ！イヒヒヒヒ、ブオホオ！アハハハハ！」

「にいは目え瞑つてね」

「えつ？あつちよつ」

「あああ！目があー目があああ

「目瞑れつて言つたのに」

「酷くね！」

思いつきりお湯をぶっかけやがつて、いつか仕返ししてやる

さて次は浴槽に浸かろうのコーナー！

「なあ、お前らさ……何でこんな広い湯船なのに、こんな一ヵ所に集まつてんだ！狭いわ、暑いわ、鬱陶しいわ！」

「良いじやん、姉妹だし」

「いや中身男な？」

「まあ実際のところ、あまりに広すぎて家の風呂みたく集まつてるだけだがな」

「いやまあそりやあ一度に数十人入るからな」

「ねえ、自分用の浴室作つたら？」

「そんな簡単に言うもんじやありません」

「いやでも、作つた方が良いと思うぞ？この広さじや何か悲しくなるだけだろ」「悲しいとか言わないでくれます？」

とまあこんな会話をしつつ、風呂は終わつたんだが……うんまあなんだ、風呂終わつ

たあとはこうなるよねっていう展開だ畜生

「……なあ」

「ん？どうした？」

「俺の着替えは？」

「そこにあるじゃない」

「おいまさかとは思うが、これじやないよな?」

可愛らしいパジャマなのは、まあこの際仕方ない……

だが!なぜ下着や肌着まで女子物にせにやならんのだ!
てかピンクだし!普通ここは落ち着いた色じやね!?知らんけど
「それ以外ないからな、諦めろ」

「o r z」

「じゃあまた明日」

「あつああおやすみ」(-_-△)

自室

「九四式でもみるかなあ、今日は珍しく使つたし」

とまあ分解して九四式と九九式のクリーニングを済ませると、手際が悪かつたせいもあるのか30分が過ぎ11時くらいになつていた

「やべ!寝なきや明日に影響が!」

翌日

「提督」

「ん?というかこの姿の時はやめてくれ」

「すみません、昨日の午後の記憶が曖昧でして」

「俺も飛行機から降りて憲兵さん達にあそこを引き継ぐまでの記憶が曖昧なんだよ……何を使つたかとか、何で行つたとかは若干覚えてるんだが何したかはよく思い出せんよ」

「ただ、相当怒つてたんでしようね」

「何で？」

「相当怒ると記憶が曖昧になるひともいるらしいですからね」

「今までそんなことなかつたんだがなあ」

「さて仕事です仕事」

「加賀さんや肩に負担が大きいですどうすればいいですか？」

「知りません、ブラはしてないんですか？」

「私の場合は大胸筋矯正サポータードラッグな」

「つまりしてないんですね」

「だつてどうせすぐ戻るだろ」

（だと良いですが……、心配なので薬は作らせましたが極力明石さんの薬は使いたくないですね）

「提督」

「入つて～」

「少し相談があるのでが」

「うんまあそれは良いんだけど、君達よくあん時驚かなかつたよね」「まあ緊急時でしたしね」

「で相談て？」

「回収した二十七名の艦娘の処遇と地下施設についてです」「へえ地下施設?」

七瀬

さて前々回に行つたあの鎮守府にいた艦娘だが一体どうするんだか……

「へえ地下施設？」

「ええ、こここの地下射撃場と同じ位の大きさのものが二階層ありました」

「え？」

「恐らくですが、空襲等に遭つた際の防空壕として秘密裏に地下一階部分が全ての鎮守府施設に作られているのでしよう、最近は殆どが屋内訓練場に改造されていますが」

「なら幌筵のB2は？」

「同じく推測になりますが、新造したのでしょうか」

「そうか、他には？」

「様々な電子機器に艦娘の遺体、部分変色した憲兵と思われる人間の死体を確認しました」

「あいつは彼処で何をしていたんだ？それにあの大淀の最期の言葉……ああもう！他にも考えること多すぎて何か色々わからんねえよ！しかも俺と話してると間ずつと苦しそうな顔してるしょ！何かあんだつたら言えよ！」

「結局あの人は何が言いたかったのでしょうか？」

「何か言っていたんですか？」

「ああ、大淀が『提督は……』って言つていたんだがあいつが止めてしまつてな、最後まで聞けなかつたんよ」

「だとすれば、その他の艦娘にも話している可能性があります、当人達に聞いてみましょう」

「……what? why! なんでや!」

「急にどうしたんです?」

「その口振りだと居るんだろう? あいつら」

「まあ保護しましたしね」

「何人?」

「全員」

「マジかよ」

「ところで、その方達は今どこに?」

「応接室に待機してもらつています」

「んじや情報でも聞き出すかね」

「さて昨日はどうしていたんだい？」

「そこの人に連れられた部屋で寝ました」

「なんというか……資料とかで見る朝潮って学級委員とかそんな感じのイメージだつたんだけど、目の前にいる朝潮は親の仇でも見るような目をしているんだよなあ、俺何かしたつけ？」

「寝れたかい皆さん？」

「そんな訳……ないでしよう」

「そんなに怒らなくとも……手に力入れすぎて爪が掌に食い込んでるよ？ あれ痛くないのかな？」

「しかも……後ろの駆逐や軽巡の何人かは怯えて、戦艦や重巡はその子達を守るようにこちらを脅すかのような目付きだなあ（前の此処と同じか……）」

「はあ」

「つ！」

「一体全体何をそんなカリカリしてるんだい？ 怒つてばかりいると早死にするつて聞くけど？」

「まあ挨拶代わりに煽りを贈つて反応を見てみることにしたが、言つた直後にガチギレの表情になる朝潮

「貴方達に守つてほしいと手紙を出したのに！一番守つて欲しかった人は殺され！私たちは死が迫つてくる恐怖に毎日毎日耐えていたのに！それすらも無意味になつた！そんなつ……そんなあなた達は軍人でも、ましてや人間なんかじやないただのグズどもですよ！」

そこまで言うと思い切りドアを蹴る勢いで開けどこかへ行つてしまつた

「はあ……こちとら人助け専門じやねえのに何であんなにキレられてんのか見当もつかねえ、だがまああの言動を聞く限り君たちはどうしてアツイが、『七瀬大佐』がああいう事をやつたか知つてるんだろ？」

「ええ、そう……です」

「んな無理矢理敬語にしなくとも良いんだよ」

「私は扶桑型戦艦一番艦『扶桑』です」

「うんまあ何となく分かつてた、んで君達の知つている情報を教えてくれるかい？出来ることは何でもするつもりだ」

「……」にいる27人が知つていることは七瀬提督は非常に優しいお方でした、駆逐艦の子達とお昼休みにかけっこなどをしたり巡洋艦の皆さんとは料理やお化粧の話を聞いて的確なアドバイスをするお方です

大戦初期から提督をやつてきてここにいる艦娘も本当は120人くらいいました

三ヶ月程前にとある官用手紙が届きました、内容はこういうものです
家族の身柄は私たちが管理している、なにもされたくなれば以下の実験を実施せよ

送り主はとある海軍元帥でした

それからありえない事が起こつたのです

陸軍憲兵部隊の配置転換に海軍設営隊の着任と白衣を着た人達が来たり、補佐という名目で監視役が配備されたりもしました

始め何人かの艦娘が失踪しその後すぐ脱走したという書類が書かれました

本来ここで気付くべきだつた、あんなに優しかつた提督がたつた一日で脱走判定にしてそれを誰にも見つからないルートで大本営に郵送したその異様さに！

でも実際は気付かず二十名近くが『失踪』した頃憲兵の死体が転がるという事件が起
こりましたがそれを理由にさらに三十名近くが独房に入れられましたが戻つてきませ
んでした

そうして人数が減るにつれ人が死んでいたり艦娘の儀装が転がつていてどんどん提
督の顔が青くなつていきました

どうかしましたかと聞いても問題無いの一点張りでした

「そしてこのままでは提督が精神的にも肉体的にも限界だと一番近いここに伝令の妖精
さんを飛ばしたのです」

「手紙などのくだりは伝令を飛ばす前にはもうわかつっていました
その話が終わると憲兵が入ってきた

「佐々木憲兵中尉です！宮崎大佐に報告があります！」

「なんだ！」

（七瀬大佐の親族を調べたのですが一人残らずここ一年で『事故死』しています
（ほうなるほど分かつた、戻つて良いぞ）

「失礼しました！」

幌筵

「提督、少しよろしいですかい？」

「ああ」

（あの大佐の家族は皆ここ一年で事故死という処理をされています）

（『処理』ということは、本当は違うんだな？）

（そりや家族全員が『銃の暴発』で死にますか？）

（そんなんあり得んわな）

（少し長くなりそうなので、外でにしましよう）

（分かった）「加賀さん少し出てくる」

「分かりました」

「んで、そんな将校の家族が人質に取られてるなんて事件は何処の管轄で？」

「警察ですが途中から高等警察に移りました」

「政治犯や国際犯とかが担当の？」

「ええ、恐らく裏になんかしら居るんでしょう」

「そこには7・62×51mmアメリカ連合弾の空薬莢がありましたが、遺体の中に

あつた弾丸は損傷が激しくライフリングは分かりませんでした」

「あれってアサルトライフルに多く使われてなかつた？日本じやアサルトライフルは持てなかつたはずだが？」

「恐らくその事から国際犯担当の高等警察が出てきたのではないかと」

「そゆことか、よし戻るぞ」

「ふう、すまないな、つまりある時から急に変わつた、そしてその発端は脅迫文で？ヤバいから助けてと助けを呼んで行つたらキレられる、もうわかつんねえな」

「そうですね、ですが妖精さんからお伝え出来たと思っておりましたが？」

「すまないな、その妖精さんは着陸してすぐ顕現不可能になつて消滅した」

「嘘だ！飛龍が飛ばしたときは傷一つ無かつた！」

「恐らく道中で襲撃されたんだろう、頼むから気付いてくれよ長門さん？」

「ツ！」

はてさて面倒な事になつてきたよ？重要な情報源は射殺され貴重な情報源は感情的だから情報を聞き出すのに時間が掛かる

しかも大佐さんの家族は既に他界していて全ての死因が頭部への銃撃で即死、ということは恐らく大佐自身の殺害と同じものが殺つた

まあ聞きたいことはもうないし、聞けることもないだろう

「んじやまたな、取り敢えずあと一週間くらいはここでの雑魚寝を覚悟してくれ、一週間経てば部屋の割当てが終わるはずだ」

「私達は出来るだけ協力します！だから！だから……助けて、このままじゃあの人は報われない」

「艦娘を大事に思つていたあの人があ……」

「残念だが諦めるんだな俺は軍人のしかも兵科だ、憲兵科じやないし警察でもない

「そんな……」

「じゃあな……チツ」

さて、艦娘達の頼みを思い切り投げ捨てた訳だがな……俺自身は助けてやりたいが俺の立場が、役職がその邪魔をする

あ～あ、ムカつくなあ、『また』求められた助けを無視することになるのかなあ
昔と何も変わつてないのかなあ

〔提督〕

「なに？ 加賀さん」

「いえ遅れてすみません」

「そんな遅かった？」

「ええ30分くらいあつたので……ところで何かの最中でした？」

「少し考え方をな」

「そう」

「ねえ長門、あの人どう思う？」

「どう思うも何もあいつは助けてくれなかつた、だがあんな話をされれば少なくとも驅逐や軽巡には良いんじや無いのだろうか」

「そうよね、どう思う？ 高雄、飛龍」

「長門さんがそれで良いのであれば異論は在りません」

「私もです」

「にしてもあの人なら、ここでトラウマ持ちの脱走兵集団をここまでのものにするほどなら助けてくれると信じていたのになあ」

あれで一、二時間か、案外時間の経過つて遅いんだな

あああいつら帰つてて良かつたよホント、こんな状況見たらアイツら嗤うぞ？
つと危ない危ない、仕事を忘れるところだつた

「さて加賀さん、仕事するよ」

「えつ？ええ」（本当に貴方はここを、みんなを変えてくれた、あの入達もきつと変えられると信じていますよ）

さてあれからさらに一、三時間経つて食堂にいるわけだが今日は何を食べようか？

「提督さん提督さん、今日は新メニューを出してるんです」

「あら伊良湖さんマジで？じやあそれ貰おう」

「はーい、ドラ○もんカレー一つ入りまーす」

「ファツ！マジかよ」

さてほんの数分で来た青狸カレーだが……物凄く食欲が湧かないんだよー！何だよ

青つて！食欲失せる色の筆頭じゃん！しかもカレーツテあーた

「なのに食うと旨いんだよなあ、ホントマジック」

「それカレーつて言うかビーフシチューに近いよね」

「ん？ああ時雨か、まあそうだな」

「さて食い終わつたし戻るか」

「頑張つてね提督」

「ああ」

「にしても幌筵関係の書類無いな」

「そうですね、注意換気とかそれくらいはあつてもおかしくないのに」

「まあいいや、あと大佐にあの事件調べさせといて？」

「あの人自主的に憲兵分隊総動員で調べてますよ？」

「あら仕事の早いこと」

「あの人達は身内が数十人死んでるんですから上から調査団が来てもおかしくないんですけど」

「そいやそこら辺も来てねえな」

「こりや軍のお偉いさんも関わってるんじやねえか？」

「いえ流石に海外の勢力が軍上層部にいたら不味いかと」

「まあ流石にな、いたら切腹モンだぜ？」

「それに追加で絞首刑ですね」

「ああ」

「さて提督、の方達はどうしましようか？」

「言つた通り部屋を片付けてそこに泊まつてもらつといで」「了解しました」

過去の話をしよう

表情

さて、一式加賀さんに任せたわけだけど事務処理はしないとな

「面倒だなあ」

先程提督がいつもより少し険しい顔をしていたけれど何かあったのかしら？後で聞いて見ましょう

「加賀さん」

「なに？ 晓ちゃん」

「これからお掃除するのよね？ 手伝つてあげても良いわ……あげようか？」

「ええ、お願ひするわ」

時々言われるのだけれど私つて怖いのかしら？

よく『無表情』だとか『仮面』とか言われるのだけれど……

まあ今はそんなことより片付けよね、集中よ集中

まず掃除用具と軽巡の子達を準備しなきやね

「終わらねえよちくしょー」

(はいはい口より手え動かせー)

(ウォツ！ ピックリした涙音かよ、脅かすな)

(お前俺のこと忘れてたろ、悲しいわあ)

「提督」

「ファツ!?」

「うわっ！ 何ですか！」

「んだ加賀さんか」

「酷い云われようですね、取り敢えず掃除終わつて案内も済ませときましたよ」

「もうそんなに経つた？」

時計を見ると、昼過ぎ位だつた針はいつの間にか半周廻つている

「提督今日はずっとボーッとしてますが大丈夫ですか？」

「ああ」

「お昼頃は何か考えてたんですか？」

「……なんのこと？俺何か考えてたつけ？」

「ええ結構厳しい顔してましたよ？いつもの薄笑いが消えるくらいには」「ああ、そういうやこの薄笑いもいつから言われるようになつたかわからないんだよな：よく自分のことは自分がよく知つてるつて言うくせに俺は俺のことよくわかんねえんだよな、何かいつそ笑えてくるな！」

「提督は……」

「ん？ なに？」

「提督は何者なんですか？よく考えてみたら自分から戦場に向かう意味も死ぬかもしない場所に留まる理由も無くないですか？」

「確かに自分の事も分からねえ俺だがその二つの問いには答えられるぜ？どつちも面白そうだからだ」

そういうつた提督の顔は本当に楽しくて仕方ないような笑みを思い浮かべていた……中身の詰まつていらない空っぽな笑みを

この人は本当に何者なのだろう

あのときも話してくれたのは着任の二、三年前からで小さい頃の話も学校の話もしていなかつた

何だかこの鎮守府にいる皆の世界を地獄から楽園に変えた人の世界こそが地獄かのよう

シユ——ツ！

「ん？ 何ですかこの音」

「そろそろ薬の効果でも切れんじやねえかな？ ちょっと部屋戻るわ」
何か急に自分の体からガス漏れの音がしたらビックリするよな
さてと、妹から借りてるやつを士官服に着替えるとするか

「おおこれこれ、良かつた何もなくて」

「どうです？ 終わりました？」

「もう少し待ってくれ！」

着替え終わって思つたんだが携帯品つて最悪拳銃一丁に刀があれば良いなつて感じ
なんだなつて昨日今日で分かつたな

三八も九九もヘカートもF·i·v·e—s·e·v·e·Nも使わなかつたしな
(日本軍ライフルは幌筵のとき使つたけど)

「終わつたぞ」

「提督」

「汚ねえ部屋に入るもんじやねえぞー」

「気にしないのであしからず」

「このままサボローしようと思つたのに」

「提督の『小学生』の時とか『中学生』の時の話を聞きたいです、暇なので」

「暇潰しかよ！ てか仕事は!?」

「大淀さんがほとんど終わらしていて、サインが必要なやつを先程提督が終わらしました」

「俺二週間以内に大淀に最低三日の休暇あげるんだ」

「それなんてフラグですか」

「休暇をあげないフラグですね」

「可哀想に大淀さん」

「提督と呼ばれちゃいるが俺は軍曹とかが丁度良いと思つていて」

「急になんです？」

「加賀さんが子供んときの話しろつて言つたんだろう？」

「えつ？ まあそうですけど」

「俺は確かに指揮官としての素質はあるんだろうが、人の上に立つような人間じやないんだよ」

「だからつて何故軍曹という中間管理職に……」

「全部上の責任に出来んだろ？ まつ下の人間に疑念を向けられているようじや無理だろうがな」

「まあ確かにそれには賛成です……が、その『何処までが本心』ですか？」

「……は？ 何処までが本心もなにも全部本心だ」

「何かを隠している気がするんですよ、その『この二年全く何も読めない表情』に」

「……さあな、幌筵の疲れがまだ残つてんじやねえ？ 加賀さんや」

「そうかもりませんね」

「まだ一時にもなつてないんだから半日自由にでもしたら良いんじゃないか？ 三十分で掃除を終わらせてるし」

「掃除に関しては軽巡と駆逐の皆に手伝つてもらつたから楽だったわ、まあでも休ませてくれるなら休ませてもらうわね」（今日ももう無理でしようね、今度にしましよう）

「ああじやあな」

「本心……か、俺も分かんねえよそんなもん」

空は一人でそう呟く

その呟きを黙つて聞く波音は空の記憶を知つてゐる

そうしてこう思う

何故お前に小学校の記憶が無い？ 中学も辛うじて残つてゐる小学の記憶もおかしい

ところだらけだ

どうして違和感を覚えないのか

それに空の無意識は答える

それが俺のできる唯一の保身だからだ

『違和感なんてない、不自然などころもない』とそう思わないと「僕」はおかしくなつてしまふだつて僕が封印したんだから

爆撃

「波音どうした？ぶつぶつと」

「あ？…いや何でもない、気にするな」

「そうか、ならないんだ」

俺は本当に何者なんだろうな？まあ別にいいか『隠して居るのがバレたか、此処の人間は聰いんだな』

「提督！」

「宮崎大佐！？どうした！」

「緊急の報告です」

「何があった」

「幌筵の地下施設の最終報告書です」

「……！これは」

「艦娘を使つた生物兵器の人体実験と陸軍憲兵部隊を使つた通常の人体実験が行われたと思われます」

「なあ、アメリカでも最近生物災害が起きた例あったよな?」

「三年前のラクーンシティですか?」

「ああ、政府は隠しているらしいが国民は正直でな、数件だがラクーンで見た異形の怪物の情報があつた、ただし数分後に削除され投稿者も行方不明となつた」

「俺はその情報を見たんだが……ここに書かれているように皮膚がなく舌が長い人間のような怪物、生ける屍などが書いてあつたよ、まあ後は覚えてないがね」

「……」

「ところで、それらはどう処理したんだい?」

「とりあえず部下が(立場上)本部に一番近い中島大佐に連絡をしたら、『見つけ次第引き金を引け、貴方達が死にたくないのであれば』と返つて來たのでその通りに

「そうか、ならやらなくちゃな」

「何をです?」

「アメリカさんは幸か不幸かラクーンでの生物災害後深海からの核攻撃があつたんだ、幌筵だつて爆撃位しなけりやだろ?」

「……わかりました、連絡します」

「こちら宮崎憲兵大佐、平賀元帥閣下に緊急的に幌筵の焼夷弾による爆撃を進言したい

「さてと……」

「はあ!? 却下!? 何故! あ!? 実況見聞が終わってないから? 報告書なら送った! それでいいでしよう! チックソが!」

「いつも冷静沈着な宮崎さんがどうしたんだい? らしくもないな」

「いえ……すみません大声を出してしまつて」

「いや気にしない、んで何て言われて却下された?」

「元帥自ら現場を見てこれから運営方針を決める、だからそのまま全員一人残らずそこから撤収しようと」

「平賀だつけか?」

「ええ、こここのとこ急に陸軍内の勢力を拡大した艦娘とその他兵器を併用する派閥最筆頭でその考えの根底には徹底した艦娘兵器論があります」

「ほう、で? 確認の為に憲兵部隊を『一人残らず』撤収させろと?」

「ええ、これは……」

「……あのブラ鎮には何かあつてそれにそいつが噛んでるんだろう、艦娘は兵器だと考える奴は比較的陸軍に多いからな、何かしらあるんだろう」

「大淀!」

「提督なんでしょう」

「至急全艦爆艦攻に出撃準備を、大佐は林中佐に陸戦隊を幌筵の沖合に待機させてくれ

と伝えてくれ」

一時間半後

「航空隊諸君、君達にこれから幌筵の泊地鎮守府だけに爆撃を敢行してもらう」「『だけ』とはつまり？」

「物資保管庫や船渠には当てるなよつてことだ、お前達なら簡単だろ？ 言うなれば目標物に確実に当てる訓練だ」

「では、作戦開始！」

三十分後

「目標上空に到着、これより第一航空隊による一斉爆撃を開始する」

結果は当然クレーターが残った

だがそれは爆撃だけで作られた物ではなく何か別の爆発物への誘爆も確認されてい
る

「……なあ確かに入念に爆撃しろとは言つたがなあ、今さらつと計算したら84トン超
えの大爆撃だつたんだが……」「しかも爆撃隊によると明らか航空爆弾ではない爆発もあつたようです」

「……まあこれやつたやつが跡形もなく吹つ飛ばす氣だつた事だけは確かだな、これ合

計何トンの爆薬が爆発したんだ?」

紙める者

「更にその後上陸した陸戦隊によるトリヅカートやらの報告が三件ほどで全て念には念をということで五十七ミリで木つ端微塵にしたそうです」

「Oh、やりすぎじゃね?」

「まあ林中佐がめっちゃ意氣揚々と指揮執つてますからね、気になるなら駐屯所に行つてみたらどうです?」

「いや止めとくわ」

「そうですか、では始末書の覚悟をしといてくださいね?」

「……中島元帥に手を回してもらお」

「では取り敢えず撤退させますね」

「よろしく」

「さて、私大淀は航空隊との通信を行つてるわけですがホントに疲労困憊です」

『誰と話してんのです?』

「ああ編隊長さん、こうでもしないと私は寝てしまうので仕方ないのです」

『提督にでも休暇を進言してみたらどうですか?案外ものすごく簡単に通るかもしだせませんよ?』

「あの人の場合確かに通りますがね？私の代わりをあの人があの人が担当してここで執務をしあじめるんですよ」

『流石どつかぶつ壊れてる人はするどこがちげえや』

『どうか幌筵の娘達は大丈夫なのかい？』

「ここをこれほどまでに変えた人ですよ？あの娘達も変えられなかつたら肅☆清します」

『キヤラ崩壊が酷いけど本当に大丈夫かい？』

「問題は深さ十メートル程のクレーターレをどうするかですよ」

『あれ提督が何か色々逆手にとつて「地下実験していた特殊新型兵装が大爆発を起こした』的な事にするらしいですよ？』

「提督本当に何者なんでしょうね」

『さあ、ではそろそろ見えてきたので無線切れますね』

「わかりました、ではまた後で」

大佐

「司令官！」

「ん？ どうした？ 朝潮」

「これ、妹たちと作つたんです！ 良かつたら食べてください」「ありがとうございます、では頂くとするよ」

朝潮は目を輝かせて司令官を、この私『七瀬透』を見る
朝潮達が作つてきたクツキーを褒めて欲しいのだろう
その期待に応えるべく一枚を口に頬張る

「……旨い」

「本当ですか？」

「ああ、これは店でも出せるくらいだ」

「えへへ♪褒めすぎですよ♪」

「いやこれは誇張無しで店でもいける」

「絶対お店じや売りません」

「何で？ 皆にもこの幸せを分けてあげたいのに」

「だつてそれは司令官の為に作つた特別製ですから♪」

「ふふつ、嬉しい事を言つてくれるものだ」

「それじやあまた今度も作つてもらつても良いかい？」

「ええ、司令官の為なら幾らでもお作りします！」

「楽しみだ、では仕事に戻るとするよ」

~~~~~

「提督、大本營からお手紙です」

「? 何かやつたかな?」

「……!、クソツ」

「どうされました?」

「いや何でもないよ、次の作戦についてだ」

嘘は言つていない、アメリカであつた事件に關するものを再開発し実戦投入するという機密作戦だ

……それなのに何故私の家族を監禁する必要がある！

あれか？家族を守りたきやどんな命令にも従えと？！

この書類には平賀元帥の部下を送るとも書いてある、確實に奴が関わっているが陸軍の人間が海軍にそう易々と何か出来るとは考えられない

ということは、海軍上層部にも加担してゐる奴がいるはずだ

(いつも優しい提督の表情が険しい、あの手紙何かあるのかも)

「……数日後に陸軍部隊がここに配属されるらしい、準備を宜しく頼めるか？」

「ええ、お任せください提督」

~~~~~

「大佐」

「何だ」

「付近の空域を未確認機が飛行して います、敵機かもしません」

「……そ うか、ならば二度未確認機に警告を送り反応がなければ撃墜せよ」（敵機かも？
友軍機でも落とすんだろ？自分たちのして いることの機密を守るために）

「では、伝達して参ります」

「ああ」(こ)はもう彼奴村井の私物となつて いるな)

「防空隊に告ぐ、現在本島の南西82kmの空域を未確認機が飛行中、至急発進し確認後
『即撃墜』せよ」

「帰還しました！報告します中尉殿」

「何だ」

「敵は旧海軍の零式水偵で搭乗員は一人でしたが、技量が高く逃げられました」

「そうか分かった」

~~~~~

あれから調べたがどうも笹井大将が怪しい  
更に九州に二つ同じように家族を監禁状態にして地下で実験を『行わされている』場所がある

探つてていることがバレれば家族が殺されてしまう

特に妹には旦那も子供もいるんだ、俺がこの身を、この命を賭してでも守つてやらなければならぬまい

「もしもし、私だ木村少将に繋げるか?」

「少々お待ちください」

するとプツツと言う音と共に清々しい声がきこえる

「木村だ、どうした中尉」

「報告です、無事艦娘を利用した生体実験及び軍律違反者を用いた通常実験を開始しました」

「ふむ、首尾は如何程だ?」

「現在二十三体のサンプルのうち十七体が失敗、廃棄でのこり六体が適合予備軍といつ

たところです」

「ほう」

「それと少将閣下、一つ気になることがあります」

「なんだ、言つてみろ」

「こここの提督をしている七瀬海軍大佐ですが、大本營上層部に探りを入れているようです」

「……そうかならば仕方がない、始末せねばな」

「とりあえずこちらは手出し無しと言ふことで宜しいですか?」

「ああ、上には報告しておく」

「では失礼します」

「引き続きよろしく」

～～～～～～～～～～～

減つてしまつた、艦娘達も例の陸軍部隊もそして残つてゐる皆の精神もだ

残りの艦娘は二十数名で陸軍部隊は部隊長の中尉ただ一人だ

その状態で精神を磨り減らすなというのが無理な相談だ

中尉は地下壕の更に下に造られたあの実験場に最近入り浸つてゐるし、最後に顔を見

せた時には『私はあいつらの様にはならない』などと言つて不気味に笑つていた

「大淀君、君にはこの二年間大戦初期から随分と苦労を掛けたな」

「良いんですよ？ 提督、それが私の仕事ですから」

「それに私は提督に死ぬまで付いていくと心に決めているんです、だから今更言われてもどこにも行きません」

「そうか、すまなかつた」

~~~~~

いつもは上を通らない海軍の輸送機が上を飛行している、ここも終わりか

だが最後に一つ仕事をしよう、あいつらの研究成果を焼き払うための『演技』をする
んだ

そうすれば、海軍のエリート連中は『海軍人の主導した』事件を抹消するだろう、なぜなら自分のキャリアに傷がつくからな

おや、海軍の佐官が艦娘とともに空挺降下してくるとはもしや話題になつた单冠湾の提督だろうか

士官服をマントの様に羽織つてくるとは中々だな

フリルの付いたワンピースって……ん？ 彼処の提督は男では無かつたか？ まあいいか、これが人生最期となるだろう仕事だ

親や妹は護れただろうか？ 祖父には向こうで会えるだろうか？

「さあ逝くぞ、大淀」

「ええ行きましょう」

「君達だけは絶対に守るからな」

「何か言いましたか？」

「いいや、何でもない」

（提督、これで提督の苦労は消えますよ？今まで苦しめられた実験も助けを求めるれば解決します）

（それに……絶対何があろうと御守りさせていただきますからね）

艦娘

僕は最上、航空巡洋艦さ

長門さんや扶桑さん、二航戦のお二人達とともに単冠湾泊地にいるんだ
なぜつて単冠湾の救援部隊偽善者に保護されたから

今は加賀という青い袴を着ている空母の人から話をされている

「提督は救つてくれます、助けてくれます」

「急になんだ」

「いえ、少しもつたいないと思いまして、あの人をただの『嘘つき』で終わらすのは『ハツ何を言うかと思えば、惚けか？生憎機嫌が悪いんだ、今すぐ止めて出ていってく
れ』

「長門さんでしたつけ？問題ないですよ、すぐ終わる話です」

「何を言う」

あの人来たのは二年近く前です

着任者を徹底的に排除せんとした私達を粉碎し、我々に救済の手を差し伸べここまで
改革せしめました

確かに言い方はおかしいかもしません、でもあの人はそこまでのことをしたのです
まずあの人は停滞していた仕事を処理してこの建物の環境改善を行いました
それはそれは酷い有り様でしたが、この数日物置状態になつてある部屋を見ましたか
？つまりはそういうことです

あの人は鳥合の衆であつた我々をここまで纏め上げました、少なくとも指揮官や軍人
としては信用のおける人物であると断言しましよう

「では、至急貴女の方の部屋を準備して参りますのでこれで」

加賀さんは長門さんの言うことを全く聞かずに言い切つて出ていった
救助された僕達の中のリーダー役をしている長門さんは少し考えている

僕はここの人に対してもあまり良い印象はないけど、驅逐の子達の疲れが溜まつてきて
いるから居させてくれるというのなら居たい

「ねえ長門、あの人どう思う？」

「どう思うも何もあいつは助けてくれなかつた、だがあんな話をされれば少なくとも駆
逐や軽巡には良いんじや無いのだろうか」

「そうだよね、どう思う？」高雄、飛龍

「長門さんがそれで良いのであれば異論は在りません」

「私もです」

「にしてもあの人なら、ここでトラウマ持ちの脱走兵集団をここまでのものにするほどなら助けてくれると信じていたのになあ」

「あの人はどうしてこの鎮守府をここまで成長させたのだろう」「ねえ僕少し思つたんだけど、完全に指揮下に入れば少なからず助けてくれるかも」

「最上お前」

「協力を確実に得るんだつたらたぶんそれが可能性高いよ」

「・・・そうかもしれないが、違つた場合は?」

「そのときは、どこかに離脱するだけさ」

「なら、朝潮にこの事を知らさなければな」

あの人には死んでほしくなかつた、司令官のために死ねと言われればその命すら擲つてでも司令官を守る覚悟がある

この気持ちは何だらうなどとはぐらかす気はない、私は司令官が好きだし多分ほとんどの子は多少なりとも好きだと思う

こここの提督は恐らく助けてはくれようとしていた、それは理解している

でも結果はダメだつた、これは確固たる事実でどうしようもないことなのだろう

司令官貴方はなぜ私たちに話してくれなかつたのですか?なぜみんなを守れなかつ

たのです？

仕方なかつたのかもしません、もし司令官があの白衣の人たちには向かつていれば私たち艦娘は皆実験体にされていたかも知れない

でも、そうしなかつたから二十七人とはいえ生き残れた
選択でいえばよかつたのだろう、でも、それでも姉妹の殆どと別れてしまつたのは寂しい

「朝潮少しいいか？」

「長門さん、どうしました？」

「現状での考えを伝えておこうと思つてな」

「皆さんはどうするんですか？」

「ひとまずはこの鎮守府に編入して協力を得ようと思つている」

「・・・何の協力を得るんです？」

「提督の調査だ」

「それをこここの提督に？」

「ああ、幌筵での実態をどれだけ海軍が知つてゐるのかとそれを受けて大本營が何をしようとしているのかの情報を得たい」

「私はそれに反対です」

「・・・なぜ？」

「助けを求めて何もしなかつた軍人が仕事をできると思わないし、破滅の元凶を送つてきた大本営を信用なんてできません」

「・・・わかつた、そのことはみんなに伝えておく」「お願ひします」

私は許さない

司令官を殺した奴を

鎮守府を壊した連中を

司令官を守らなかつた彼奴を

絶対に絶対に絶対に絶対に！

私長門は今朝潮と話してきたのだが、あいつはもう気が触れ始めているかもしけないまあかく言う私も助けてくれなかつたことは許せないが、過ぎたことを掘り返すことをしない

そんなものは時間の無駄だからな

といつても駆逐艦や軽巡には酷な話だ、心に深い傷を負つても仕方がない
だが、朝潮は度が過ぎている、依存していたわけでもないのになぜ？

恐らく『ヤンデレ』というものだろうと私は思つてゐるがあいつにそんな気質はな

かつた

「扶桑、朝潮なんだが・・・」

「どうでした？あの子は少し心配です」

「ああここに協力してもらう案に反対し、あいつの目がとんでもなかつた」

「そうですか」

「わかりやすく言うなら、今沈めば確実に深海になるだろうというぐらいだな」

「そこまでですか、あの子・・・いえあの子たちは提督のことが好きでしたからね、好きな人が急にいなくなればそれはとても辛いことです」

「本当にこの半年不幸ね、山城は研究室へ提督はあの世へ、そしてあの子は狂い始めている」

「そうだな本当に不幸だ、あいつの言っていることに共感を覚えるよ」

偽装

「あー！面倒だなあ！」

「急にどうしたんです？」

「此処じや幌筵の艦娘の相手、電話じや馬鹿なお偉いさんで机じや報告書だぞ？叫びた
くもなるわ」

「ぜーんぶ原因は自分ですがね」

「しかもあれな？休めつつてんのに休まない加賀さんだし」

「急に休めと言われても混乱するだけです」

「ここに間宮券がある」

「ちょっと用事を思い出しました」

「おつとう」

加賀さんやあんた綺麗に掠め取ったね、まあいいけど

？足音がこちらに向かってきてるんだが、忘れ物でしたかな？

「にい、お仕事大丈夫？」

「お前は昨日どこ行つてたんだ？姉貴が言つていたが昨日部屋に戻つてないんだろう

？」

「うん、昨日は明石さんのお手伝いでえーとなんだつけかな？ 時空間転移装置だつけ？」

「寝床はどうしたんだ？」

「寝床はどうしたんだ？」

「明石さんの休憩所で数時間仮眠をとつたから大丈夫だよ」

秘密基地
「あいつそんなもん作つてたのかよ、ちょっと感動するわ」

「ところで何の書類を作つてるの？」

「幌筵の偽造報告書」

「それ明らかに軍規違反だよね？」

「まあな、でも考えてみろ？ 例えば極悪非道の人体実験が行われていたとする

「うん」

「俺たちからしたら失敗に見えるが実はそれを発生させるのが目的のやつがいるとも仮定しよう」

「ということは、失敗させたがつているつてこと？」

「まあそうだな、んでそれを目的にしているものが軍の上層部にいるとしたら？」

「そしたら確かに真実を伝えないほうがいいかも」

「・・・そういうことだ」

「成程ね、それじやにいお仕事がんばつて？」

「どこへ行こうというのかね？君にだつて仕事はあるぞ？」

「ええ、少佐殿にお任せしたくあります！」

「ダメです（無慈悲）はいこれ、陸軍部隊の編制報告書」

「一人しかいないのに部隊とはこれいかに」

「考えてもみろ百何十人の泊地に十四人の憲兵さんでしかもトップが一管区の長でも良い大佐、海軍部隊の貴重な陸上戦力なのに十五両前後しか戦車を渡さないし教官に中佐を送つてきちゃう陸軍だぞ？お察しだろ？」

「憲兵さんに関しては一人あたり十人相手にするのは大変だろうね、まあ訓練してもらつてるけど」

「訓練に関してはまあ日課だからな」

「戦車にしても需要と供給のバランスが取れてないんだよ」

「え？ そうなの？」

「まず戦車設計図がほとんどないし、人間じやなくて完全に妖精さんが乗るつていう時点で難関」

「まあ戦後半世紀以上経つて更新されてるからな」

「さらにはああいう儀装は全て妖精さんが作るんだけど、なぜか戦車だけは完成しても

不良品がでできちやうんだよ」

「まあ戦車は海にそんなに沈んでないからな」

「さて書類も終わつたことだし遊んでこよ」

「射撃訓練とかもしてるのでか?」

「にいの見つけた地下で陸軍さんみんなやつてるよ」

「知らんかった、なら大佐のところにそれ届けとけよ」そうすりやあの人届けてくれる
から」

「うん、ねえにい」

「うん? まだなにか?」

「一週間くらい気をつけて、あまりよくないことが起きそだから」

「・・・ああ、わかつた気をつけとく」

穂花はいわゆる予知夢のようなものをもつていてよくない夢を見ると高確率でその

通りになる

これには一度助けられていて「お兄様に車がぶつかつてくる夢を見た」と言つた三日

後にほんとに接触事故にあつたことがある

アイツのは本物だ、俺のような紛い物ではない

妹の進言を聞き入れるのは兄の務めだし、信用できるものだからな

念入りに二週間位は気を付けるか

といったところでまあ気を付けるようなことしないんだけどね！

「さて、どうやつて言い訳すつかな～」

(兄様、昔から嘘が嘘じやないんですから)

「さて宮崎さんのところに行こうかな♪」

「・・・ん？あの子雰囲気が違うな、確かに・・・あれ？誰だつけ？まあなんにせよ要注意だね」

「大佐さん！」

「ん？ああ穂花くんか、書類かい？」

「うん、まあ後は宜しくお願ひします！」

「公の場では敬語にしなさいよ？」

「気を付けます！」

(この子本当に大丈夫だろうか)

「そういえばここの二日で何発撃った？」

「・・・多分、三百発くらい？」

「そうか、だとすると毎月千発くらい頼んどくか」

「何故です？」

「一月大体三日くらいしかやらんのだよ、射撃訓練」

「そうなんですか!?」

「それに憲兵は発砲の機会自体がそもそも少ないから二月に一度くらいで足りるしね」

「へえ、では少し工廠へ向かいますからまた♪」

「バイバイ」（あれはぞつこんになるわ、提督さん）

「さて、明石さんとこいこ」

「明石さん?どこですー?」

「ここだよ、穂花ちゃん」

「次は何をします?」

「時空間転送装置はね、まだ完成していないんだよ」

「なんで一々漢字でいうんです?タイムマシンでいいじゃないですか」

「専門家ぼくないでしょ?かつこよければ何でもいいのだ!」

「確かにそうですね」

「さて、まあ気を付けるとはいってもどうしようもないんだよなあ」

「ブービートラップとかならいざ知らず『なにかわからんがまあ気を付けろ』じゃあ無理だろ」
提督、小包が届きました

提督、幌筵の艦娘に襲撃をくらう 調整

小包……妹の予知夢で多分死ぬかもって予想されている

……ん？爆弾じやね？まあでも狙われる事もないし、オウムのオジさんたちは捕まつてたりするからテロとかの可能性もない

でも運命つて分からなあからなあ

「ありがとう加賀さん、中身何か知ってる？」

「一応食べ物らしいですよ？」

「……そう」

宛名は俺で送り主は幼馴染みだつた女子大生だ

十一月と言つて思い浮かぶのは……ないぞ？一ヶ月早いクリスマス？

辞世の句を詠む勢いで小包を開けると普通に値段の張るチョコレートにカードらしきものが入つていた

「それは？」

「知り合いからのプレゼントだと思う」

「そうですか、まあ仕事も全部終わりましたし提督も休んでくださいね？」

「ああ（こやつはわしが偽装書類書かんといかんことしつとるんか？）」「では」

「さてと幌筵で開発中だつた新兵器どうすつかな？」

「証拠つつつても報告書見る感じ舌の長い化物は五十七ミリの餌食だし人間モドキはS I Gと89式にミンチのうえ焼却したから無いしなあ」

「新型爆薬と新型特殊兵装の開発実験中の事故か地下貯蔵の燃料弾薬に引火したとかが確実だろうな」

「多分大佐もやつてるだろうが、こつちも一介の士官としてやることはやらんとな」

幌筵爆発事故に関する被害と考察

2001年11月中旬の発生した北海道千島列島幌筵島にある幌筵泊地の爆発事故による被害報告

泊地本棟と地下施設及び三百リットルの特殊重油、五百キロの特殊砲弾に百名近くの艦娘や二十名の陸軍軍人とそれを指揮する『七瀬透』大佐の喪失

それに関する一個人の考察

老朽化が進む地下施設の電気系統の腐食により地下に保管されていた燃料弾薬の一
部に引火し爆破

本棟のガス管内部にも引火し施設が吹き飛ぶ

高熱により暴発した砲弾が資材庫に着弾しこれもまた爆破

このように連鎖的に発生した爆破事故であり至急的に軍属、軍事施設内に存在する地

下施設等の電気配線を点検すべきと提案する

とまあこんな形で書類を二十枚近く書き上げた

「つつつつしゃあ！ 終わったあ！」

「これで！ 地獄の二日間が！ 終わったぜ！」

「にしても今ライフル二挺、拳銃二丁に対物ライフル一挺持つてのけどそんなに使わ
ねえな」

『そいやおまえさ』

「つ！ つた～！ ピックリして膝ぶつけた」

『なんかすまん、お前5・7mmも6・5mmも12・7mmも一回も使ってないよな
んなこといつたって8mmと7・7mmで現状事足りるからな』

『ならなんで揃えたんだ（困惑）』

『6・5mmは小動物狩りとかに使えるし5・7mmは貫通させたいとき、12・7m

mはその名の通り装甲板ぶち抜くときに使うんだよ』

『んで、あの峠流石に整備し直さないといけないと思うんだが……』

「使つてないとはいえ軍用地の中にある道路が、しかもレーダー基地までの道があれ
じやあかんだろ」

『土木に関しては陸軍だろ?』

「まあそりだが……』

さて、アスファルトの整備を頼みに大佐の所に行く、前にまず明石に頼むか
「明石く、居るか?」

「あら提督どうしたんです? 整備ですか? 開発ですか?」

「どつちかつて言うと整備だな、敷地内の峠道あるだろ?』

「ええ』

「あれを直したいんだが直せるか?』

「ああ、東京行く前に弥生さんが『足回りがおかしい』って言つてた原因ですね?』
「多分な、どうだ出来そうか?』

「路面の荒れは最悪私達用のバーナーで炙つて表面溶かせばいけますし隆起部分は炙り
ながら叩いて直して隙間にアスファルト押し込めば簡単に直るんじゃないですか?』
「めつちや力業じやん!』

「引き直すほどの余裕はないんです」

「にい、さつきぶりだね」

「ああ、穂花か」

「明石さんは多分応急修理的な考え方じゃないかな？」

「まあ、直るなら良いんだが」

「では、今から行つてきますね」

「なあ気のせいかな山の方から煙が見えるんだけど」

「安心してにい、私もだから」

「もしかして、アイツ火炎放射兵みたいにやつてないよな？」

「さあ？」

「ヒヤツホーイ！汚物は消毒だー！妖精さん宜しくお願ひします！」

「了解！ロードローラーだ！」

みるみるうちに舗装と側溝が修理されツルツルになつた路面は妖精さんによるロードローラーのローラー部分に凹凸着けて踏み固めるという特殊処理で凹凸が付きまし

た

「姉貴！終わりました！」

「ありがとうございます！妖精さん」

「提督終わりましたよ?」

「マジで!? まだ一時間ちょいしか経つてないよ?」

「工廠の妖精さんたちはプロですからね」

「ちょっと走つてくるわ」

「行つてらっしゃい」

「ということで、車に乗つたわけだがどういうわけか調子が良い」

「行つて帰つてくるまで二十分で行ければ御の字だな」

まず思いつきり吹かしながらトップスピードで登り終えついでにレーダーの様子を見ながら得意の下りで内側を攻めつつ戻つてくる

「……パーエクトだ、明石」

重傷

「仕事も終わつた、したいことも終わった」

「暇じゃ！この野郎」

如月空二十二才絶賛ニート状態である

幌筵の艦娘仕分けも終わつたし、報告書も片付けて峠も走つた後でやることがない、のにまだ五時だから夕飯でもなく仮眠を取れるほど時間あるわけでもない

ぶつちやけ暇すぎて死にそうである

「なんなら地下でヘカートとF N撃つてみるか？でも、弾が沢山あるわけでもねえしな……」

「入るぞ」

「駄目です」

「なんでや！弟よ何をそんなにぶつぶつ話してんのだ」

「ああ、暇なんだよ」

「ならここにトランプがある」

「ババ抜きか？ブラックジャックか？どっちも一人じやつまらんだろ」

「ふつふつふうボーカーだ！」

「……ほう良いだろう」

姉のおかげで『暇すぎて死ぬ』事態は避けられた
ボーカーの結果？当然圧勝でしたよ、しかもそのうちの一回はロイヤルストレートフ
ラツシユだつたぜ

……とまあいつ何があるか分からず戦々恐々とした一週間を過ごした

「さて、一週間経つた何も無かつたな」

「珍しく穂花の予想が外れたか？うーん？」

「……司令少々宜しいでしようか」

「ん？朝潮か、どうぞ？」

「失礼します」

「どんな御用で？」

「いえ簡単な頼みなのです」

「ほう、俺に出来ることであれば何でも良いぞ？」

「それは良かったです、ものすごく簡単ですよ」

「んで俺は何をすれば良いんだ？」

「ただ、これに当たつて死ね！」

「なっ！」

そう言つて『朝潮』は駐屯所に保管されていたはずの証拠であるM1911コルトガバメントを躊躇なく俺の胸に向け引き金を引く

更に太ももと肩にも一発づつ撃ち込まれる

「兄様！ どうしまつ！ 貴様！ 今すぐ離れて銃を捨てろ！ しなければ殺す」

「無能の妹もまた無能ですね、艦娘に向けたところで意味無いに、決まつていてるでしょ

！」

「ほの……か！」 「舐めるな」

その直後連續した七発の銃声が俺の最後の記憶だった

「……ぐ、……べく……目覚めてく……」

「んっ」

「……とく？……いですよね、！？……下……りです」

「う」

俺は生きてる……のか？ そとか上手くいった様だな、かなり厳しい賭けだつたが勝て

て良かつた

まだ眠いな、お休み

「司令官早く目覚めてほしいのです」

「……そうね」

「早く目覚めた方がいい、皆待つていてる」

「響はどさくさに紛れて何司令官の頭撫でてるのよ」

『なあ、早く起きろよ空』

『……ん？ おはよう波音』

『つ！？ おはようじやねえよ！ いつまで寝てんだ阿呆』

「んつふあ～……つてこ～どこ？」

「司令……官？ 起きたのね！ 電お医者さん呼んできて」

「わっわかつたのです」

「しつじれいがんー、よがつだよ～」

「暁！？ 大丈夫か？ 急に」

「司令官、それはこっちの台詞だよ大丈夫なのかい？」

「俺か？ 俺は大丈夫だ、ほらこのとおう！？ つてえ～」

「まだ完全に治つてないんだから駄目だよ」

「連れてきたのです！」

「軍属さんか、ドクターに聞きたいんだが良いか？」

「ええ」

「ここはどこで何でここにいるんだ？まあ体を見るに怪我だろうと思うが、何でなつたかよく覚えとらんのだ」

「分かりました説明しましょう」

「ここは北海道の札幌にある軍病院です

貴方の体に入つていた弾丸の摘出に必要な設備がここにしかなかつた為です

次に今は貴方が運び込まれてから二ヶ月が経っています

一発は心臓と肺、更に動脈などを綺麗に通り抜けて背骨の近くの肋骨に止まつてました

もう一発は肩を掠りつつで通り抜け最後の一発は太ももに埋まつてましたね

六時間の大手術で全弾摘出しましたが出血量と体力の関係でしようね、二ヶ月昏睡状

態でした

「（　；。Δ。）」

「それで手術から二週間ほどで通常病棟に移つてから毎日のようにご友人の方達がお見

舞いに来てましたね」

「マジですか?」

「マジもマジで大マジです」

「……包帯の下は?」

「さあ? 私も見てませんね、折角ですし取つてみます?」

「お願いします」

「うそでしょ? 何で銃創が無いんです?」

「さあ? 何ででしよう」

「にしてもよく内臓に当たりませんでしたね」

「……撃たれんの分かってたんで心臓撃たれる前に体をちつと動かしたんですよ、ここまで上手く行くとは思つてませんでしたがね」

「まあ大動脈にあつていても心臓と結果変わりませんでしたけどね」

「にしても二ヶ月かあ、退院はいつできます?」

「色んな検査とかしてからなので多分一週間後くらいですね」

「……だつてさ、第六の皆にお願いしたいんだが鎮守府の皆さんに伝えておいてくれるか?」

「分かったわ、任せなさい」

あれから二ヶ月兄様は大丈夫だつたかな?

大丈夫だつたら良いな、少なくとも帰つてきてから一月はお守りしなきや

「喉が渴きました、水を下さい」

「……どうぞ」

目の前の営倉に入つてているのは駆逐艦『朝潮』です

兄様に銃を向けあまつさえ殺害をしようとした重罪人です、即刻独断による死刑をしようとしたのですが大佐さんに言われ四肢と腹に撃ち込んだ弾丸を軍医さんに摘出してもらい軽い処置をしたあと、ドックにて高速修復材を使用しその後憲兵さんに連れられ営倉行きになりました

何故殺させてくれないのか大佐さんに聞いたところ「ここの最高責任者は如月少佐だ、の人なら多分許すだろ?俺達が勝手な事しちゃ駄目だ」という答えが帰つてきた

会話

「すいせんトイレに行きたいんですが」

「どうぞご自由に?」

「貴女の方のせいでのご自由に出来ないんですか?」

「チツ仕方ないです、はいどうぞ」

そう言つて私は鍵を開ける、すると『朝潮』は「どうもでは行つてきますね、ところ
であの人は生きてるんですかね?」と言つてくる

貴様がやつた癖に何を言うかと思いつつ「あの人は死にませんよ?あんな簡単には
ね」と答える

「そうですか、なら良かつたです」

「は?」

「貴女からこの二ヶ月話を聞いてやつたことを後悔してますよ、これでも」

「へえ、何も変化なかつたので話が分からなかつたのかと思つてましたよ」

「貴女も言いますね」

「そりやあ兄をやられましたからね」

さて、二ヶ月病院に籠つていた俺だがあと一週間もすれば退院できる事が分かつている

そんなことはどうでも良いのだ、作戦どうしようかしら

何にも考えていない作戦を後一月以内に立案して訓練しなければならない

大湊警備府はぐるつと回つて樺太を哨戒しつつ海域を奪回し日露貿易路を確保する任務がある

千島・アリューシヤン列島の警備、解放は俺達単冠湾と幌筵でやる予定だつたのだが幌筵は潰れて（というか潰して）しまつたため俺達計百名程の艦隊で回さなくてはならなくなつた

「どうしよう」

「その話なんだけどさ」

「!? 中島元帥殿！ ピックリしたぜ全く」

「ここじや幼馴染みの親父だよ、ところでなんだけど」

「なんで知り合いと仕事の話をせにやならんのか」

「まあ仕方ないね、んでさ？ その作戦に前後してドイツから技術提携の艦隊が来るんだ

よ」

「は？」

「この話は一応加賀くんに話してある」

「おつとう、でドイツ艦隊が何のようで？」

「艦娘技術で世界一の日本にドイツ最強の飛行艇を造つて欲しいらしくてね」「その為にわざわざ？」

「一応英仏露との大艦隊による北極海の奪取も任務らしい」

「はあ、んで俺達は艦隊を大海戦中に迎えてどうしようと？」

「まあ図らずして人類の合同作戦になつた訳で艦隊の補給、修理と横須賀までの護衛リ

レーに設計図の迅速な輸送をしてもらおうかとね」

「つまり？俺は資材無い中艦隊に満載補給して修理しつつ中央の権益の為だけに青森までの護衛艦隊出して妖精さんにでも設計図を届けてもらえと？」

「説明ありがとう！まあそういうことだ」

「俺らの負担デカくないっすか？つか、皆まとめて横須賀に輸送機で送れば良いんじや？」

「まあそなんだが横須賀の飛行場空いてないのよ」

「なら米軍や羽田とかは？」

「米軍は戦時体制で往来が激しいから無理だし、羽田は民間の国内線があるから無理！」

「役立たずめ、大本營の理不尽な権力は何処行つた」

「五十五年の千代田クーデターでマリアナ海溝の奥底に消えた」

「はあゝまあそれ起こした一人がうちのじいちゃんですけど」

「んじやつまり一ヶ月後には大海戦して人守つて書類送れば良いんだね?」

「飛行機は止まるどこ無いから設計図を大本營の屋上に投下してくれ」

「どこだつけ」

「皇居内の隅っこ」

「それで良いのか日本軍」

さて、もう一週間経つた訳だが……流石に忙しすぎやしません?どうやつて千島列島行きのフェリーに乗るかも分からんのに、12時までには泊地に戻らんといかんしな「すいません如月空さんでしようか?」

「……ええ、そうですがなにか?」

「私如月少佐殿の送迎を任せられました、山口昇兵曹長であります!」

「は?え?俺が乗るの?それに?マジで?だつてそれ士官用の車両だろ?」

「……少佐殿は士官でありますぞ?」

「ごめん今テンパつてるからさ、その目が点なの止めよ?」

つてか兵曹長にしては歳いつてない？もう三十くらいだよね？絶対

「……ゴホン、んで貴官の歳は幾つだ？」

「ハツ！小官は今年六月で三十二であります！」

「そうか、ならもう車に乗るとしよう」

「どうぞ」

「ありがとう」

「さて、兵曹長これから何処に向かうんだい？」

「ここから一日ほどかけてブユニ岬まで行きそこからフェリー内で仮眠をとりつつ押搗島へ向かいます」

「12時までに出来れば来てくれと言われたんだが無理か？」

「無理です」

「無理か、にしてもハツキリ言うね」

「まあ無理ですかね」

「確かに大事だな」

「といいますか少佐殿は軍人らしくないでありますね」

「だろうなあ、まあ俺に威厳もカリスマの欠片もないからな」

「あついえ決してそういう意味では……」

「ああ大丈夫大丈夫気にしてないから」

「はつはあ」

「にしても見事に全部持つてきたよなこれ」

「まあ軍人は基本自らの装備品は机身離さず持つてますからね」

「衛生兵さん救急隊員に引き渡すとき大変だつたろうな」

「良く見ると少佐殿は海軍の人間とは思えない装備してますね」

「まあ九四式拳銃に三十年式銃剣、三式軍刀の性能向上版である零式軍刀だしな」

「見事に陸軍装備一色でありますな」

「辛うじて九四式は海軍も採用したがな」

「どいうか少佐殿つて言いづらくない？ 提督で良いよ？」

「ではお言葉に甘えさせていただきます」

復帰

「では、提督殿ここが本日の宿泊所です」

「高速にあれからすぐ乗った後に帯広までで六時になるとは思わなかつたぜ」「まあ一部混んでもましたからね、仕方ないといえば仕方ないでしよう」「あそこまでガツツリとは…」

「そんなことより早く入りましょう」

「そうだな」

「提督殿のお部屋はこちらになります」

「山口兵曹長はどこ行くんだい？」

「隣の部屋で待機しています」

「なら何かあれば隣に行けばいるのだな？」

「そうであります」

　　というわけだが、ほんとに一日になるとは思わなんだ

　　こつちに来るときどうやつて来たんだか（いやまあ多分ドクターへり的ななんかだと

は思うが…)

「まあいつか、どうせなんも起こらんし休暇だとでも思うか」

(なあお前よく生きてたな)

(いくらなんでもその言い方はないと思うぞ?)

(まあいいじやん、結局無事だつたんだし)

(そういやお前俺のこと動かせなかつたのか?)
(一回やつてみようとしたんだが無理だつた、たぶんお前自身から変わるか半覚醒状態
でしかできねえんじやねえかな?)

(まあつまり寝起きでしかお前が出ることは出来ねえってことか)

(ああ、にしても上官口調出来ないんだな)

(人に偉そうに出来る様な奴じやないからな)

(だろうな)

穂花や灯、鎮守府のみんなは大丈夫だろうか?まあ、加賀さんや大淀さんに幌筵の方
には長門もいるから大丈夫だろう

今気にしても意味ないのだが、どうしても気になつてしまふ

さてと夕飯を買つてくるか

ということで近所のコンビニに来たのですけれど…何で明太子がないんですかねえ

！（半ギレ）おにぎりと言つたら明太子だろ！（ほかのおにぎり好きにケンカ売るスタイル）なら黒色の炭酸飲料は？と思つたらこれもまた売り切れ！このコンビニはやる気あるのかと思いつつツナマヨを買って帰る

まあ五月終わりのもう六月と言つていい時期でようやく六時半過ぎに日が沈む北海道だが、一応心地よく感じる様な気温になってきた

二十分ぶりに戻ってきた部屋でもしやもしや一人食べるツナマヨは何故か悲しみの味がしました

やることないと人間死ぬほど暇なんだなど感じるわけですが、とりあえずテレビでも見ようと思います

「（こ）の所海軍五大鎮守府がある横須賀、舞鶴、呉、佐世保、大湊では反戦デモが散発しております、警察が対応に追われています」

「へえ、まあ辺境提督にや関係ねえな」

「デモ隊の主張として膨れ上がる軍事費の割に一向として目立った動きの見せない海軍は早く何かしら実績を示すべきであり示せなければ海軍を潰すといった弱腰の軍部を批判するものが大部分を占めます」

「まあ暇だし九四式でも見つつ寝るかなあ」

「さあやつて来ましたよ、純白の部屋なんですけども！空だけは今日も綺麗です！」

「なに馬鹿なアナウンサーやつてんだよ」

「おま今どつから!？」

「お前が見上げた空からだが?」

「鶯が降ってきたと思ったらお前だつたのかよ!」

「まあな!・・・んで? 作戦は? 編成は?」

「決まらんのだよそれが」

「お前大丈夫かよ、本来は半年前から準備しとくもんだろ!?!」

「最終的な備蓄量も分からんのに立てられる作戦があるか! 阿呆

「んで? 備蓄はいくつになる予定だ?」

「燃料1kL、弾薬7000発に補修用鋼材60000、アルミ20000だな」

「アルミだけ多いな」

「北の担当はうちらだけでな、制空権取るには戦闘機が山ほどいるんだよ」

「火力増援も見込めないしな」

「そいやこいつって心なしか、もしくは俺に縁がないせいか分からんが線が細く見える
あれか? 可愛い系男子か?・・・ごめん、ないわ

「ああ、死ぬう起きたくねえよ引きこもりてえよ」

「提督、朝であります」

「うん、着替えるから待つてて」

「で、メルセデスの中でコンビニおにぎりってどういうスタイル？」

「いいじやないですか、しかもC117ですかね」

「それって高いのか？」

「知りませんよ官用車ですしね、まあ将官用よりは安いんじやないですか？」

「そう、でいつ着きそう？」

「そうですね多分六時くらいかと」

「んで、昼前にはフェリー発着場まで来たわけですね」

「ではここで、あとはそれにのつて押擣島まで行けば单冠湾の人気が迎えに来てくれるはずです」

「了解」

「ああ～ゆつたり気持ちええんじや～」

船に揺られて四時間ほどたつて押擣島に着いたんだが、なぜ海軍士官の出迎えが陸軍憲兵の士官なんだよおかしいだろ

「如月提督、お迎えに上がりました」

「大佐、頼むから止めなさい」

「良いじゃないですか、まあ乗つてください」

「そう言つて俺をくろがね四起の助手席に乗せてくる宮崎大佐だが・・・あんた仕事はどうしたんだ

「提督、あなたを撃つた朝潮だが俺達の宿舎にある営倉で絶賛監禁中だ」

「まじですかい」

「まあ海軍士官、上官を暗殺しようとしましただから本来はその場で射殺なんですね」「しようとじやないさ、俺がさせたんだよ」

「ホントあなたつて人は分かりませんね」

「落ち着かせる為にや仕方のないことさね」

「そんなものですかね？」

「そんなものです」

「提督！」

「お迎えですな」

「ああ」

「そう言いつつ正門前で車を止める大佐さんマジカツケエゼよ

「提督、二ヶ月も空けずに早く帰つて来てくれれば良かつたのに」

「すまんな、仕事丸投げして」

「いえ、
お帰りなさい提督」

提督、初めての作戦に参加する 作戦

ところで加賀さんや、お前さんは一体なぜ涙ぐんでいるんだい？

「加賀さん？」

「帰つて来てくれてホントよかつたです、みんなもしかしたら死んじやつてたりするんじゃないかとか、仕事を辞めてしまうのではないかつて不安の声がいつも上がつてました」

「俺が辞めるわけないだろ？ 自分から望んでここに来てんだ、逃げるくらいならいつそ死んでもここにいるね」

「ところでずいぶん前に、赤城のせいでうやむやになつた作戦会議覚えてるか？」

「グス：スウ、ええ覚えてますよ」

泣くほどのことでもないだろうに、深呼吸をして落ち着かせつつ話す加賀さん
覚えていたようで良かつた、作戦を詳しく練り直さないといけないな
「いいか？ 今から作戦会議を執務室でやる…あとはもう分かるな？」

「ええ、緊急招集をかけます」

あれから数分しかたつていないので、空母機動部隊の面々と主力艦隊の面々が集まる
という異常現象である（軍隊なら確かに当たり前だが艦娘は元民間人だからね）
なので、まあ：気にせずやつていきましょう!!

「これより、七月に行われる北方海域アリューシャン列島奪還作戦立案会議を行う
「一航戦、二航戦、一水戦ここに集結しました」

「ん、では今回は旧軍が行つたような隠密作戦ではなく大規模な航空戦と同時に砲雷撃
戦を実施し、揚陸部隊の存在を攪乱、特殊陸戦隊および陸軍一個中隊が強襲という想定
で私はいるんだが何か意見のあるものはいるか？」

「…」（何もないんだけど）

「提督、よろしいでしようか？」

「ん？ いいぞ？ なんだ？」

「まずは確認なのですが強襲部隊に護衛は付くのでしょうか？ 次にそこまでのルートと
護衛機の飛行場について、最後でようやく意見ですが島の北側に集結しているであろう
戦艦部隊と周辺を周回している機動部隊を同時に相手取るのではなく南から進入しつ
つ敵空母の能力を奪い東側の湾から強襲前の艦砲射撃を行つてはどうでしょう」

「赤城お前……本当に赤城か？」

「失礼ですね！ 正真正銘一航戦赤城です！」

「そうだな、では答えようか」

「まず護衛部隊だが一水戦のうち駆逐艦三隻を小型輸送艦に付けようと思つてゐる、次にルートはここから千島列島を北上しロシアの半島を経由してアツツ島まで行くがアツツ島は日本の反抗作戦の半月前にロシアが奪還する予定になつてゐるため奪還出来なければ燃料がギリギリになつてしまふから半島から輸送艦に乗つての出撃になるだろうな」

「あと南進入に關しては手薄になつてゐるところを狙つて攻撃出来るからやりたいんだが如何せんそれするには航空機が馬鹿みたいに必要なんだよ、いくら米露から少數援護が来るとはいえ余りにも危険だ」

「なんならただでさえ砲雷撃戦の案でさえ君達が沈没する可能性があるんだ、出来ればそもそもこの作戦をしたくないんだよ」

「提督、では幌筵の娘達をこの作戦に投入するのはどうでしよう？元々北方海域は半月で幌筵と単冠湾合同で行うはずだつたんですから」

「！阿武隈お前冴えてるな」

「いえそれほどでもありますね～」

「第六、幌筵の長門を連れてこい」

「はつはいなのです、行くのですよ皆」

「これで一応は提督の言つていた『負傷のリスク』が減りますね」

「まあな、大丈夫安心しろお前らが沈んだら引きずり戻してやるから」

「まあ船少ないですもんね、うちは」

「ああ、まあ百隻以上いる時点で少ないので分からんがな、それでもお前らは一人だからな」

「戦艦長門参上した、提督何用であろうか」

「そんな思いつめた顔しなくとも…安心しろ、誰もお前らを処分しちまおうなんて思つてねえから」

「つ！あつああすまないな」

「話と言うのは大規模反抗作戦についてだ」

「反抗作戦？分かつた、何でもしよう」

「君達にやつてほしいのは重巡クラス以上で陽動部隊への一時的編入と軽巡以下による輸送艦の護衛だ」

「そんなことでいいのか？貴方に発砲しているんだぞ？」

「すまんな、最近物忘れが多くて何の事だかサツパリだ」

「そんなことで許されるか！あんなことは当事者は勿論責任者も本来死罪だ！分かつていらつしやるのか！」

「……うるせえよ、んなこと知らねえしやられた側がこれやつてくれつて言つてんだよ、下らん罪の意識擬きより上官の命令を遂行することを考えたらどうだ？」

「……すまない、我ら幌筵残存艦隊は单冠湾攻略部隊への一時的編入をし、如月少佐の指揮下に入ります」

「安心しろ、遅くとも二年後までには元の生活だ」

「失礼しました」

「んじや丁度良いんでここで終わりにしますか」

「では、解散！」

作戦が取り敢えず決まつた為概要の提出と実施の許可を求める作戦計画書を作らんといかん

「面倒だな、取り敢えず海図と赤青鉛筆だしてつと何処にあつたかな」

「弟よ、愛する姉に会わずに何を探しているんだ、普通退院したら真っ先に家族のところだろ？」

「灯か、愛する姉を持つた記憶はないし退院したら真っ先にアニメの確認だ、更に言うと忙しい空くんは現在進行形で白海図を探してるんだ」

「それなら、机の一番下だ」

「ホントだサンクス！そいや穂花は？もう一時間くらい経つてんのに会つてないんだけ

ど

「営倉で朝潮ちゃんの監視」

「鍵これだから出してやつてくれ、俺もしかして穂花に嫌われたかな?」

「この鈍感野郎が」

「誰が鈍感だ、バカ姉が」

秘密

「うーむ、ここに寄つてから手前のアツツ島でロシア艦隊と合流するから…航路はこれでいいのか？わからん！作戦の順番はこれで決まつたから…」

「そういえば、陸軍さんも恐らく来るだろうから準備しとかなければ…」

「ふあああ！めんつどくせえええ！つざけんなよ！誰だよこんな作戦考えたのどこのどいつだよ！俺だよ！畜生め！つはあはあ」

「さてと、空に言われたからには鍵を開けに行かんとな」

「…姉様、そこで一体何してるので？」

「つ！ビツクリしたぞ？妹め！」

「それで何しに来たの？」

「朝潮を出しにな」

「…そなんだ」

「ああそれと空に会いに行つてやれよ？」

「うん」

「どうしたそんなに暗い顔して」

「何でもないよ？」

「そうかならしいんだが」

「じゃあ行つてくるね」

「ああ」

「…どうした？いかないのか？」

「やつぱり無理だよ、兄様のところになんて行けないよお」

「はあ、手のかかる妹だまつたく」

「WTF！なんで一々大本営まで作戦計画書を送らなければならんのだ！」

「にい、ちよつといい？」

「あ？穂花か、いいぞ」

「…あのね？言いたいことがあるんだ？」

「ん？」

妹が泣きそうな顔で姉と一緒に執務室まで来た

俺は何か前世でやらかしたのでは？と思うほど帰ってきてから一時間も経つてない
のに二人に泣かれるという不幸

そんなにこの阿呆の何が良いんだ？皆のことを泣かしたくて来てるわけではないんだがな：

「二ヶ月前助けられなくてごめん：なさツグス」

「ああもう泣くな泣くな、ほら無事に帰つてきたからいいだろ？ほらこつち来て」「嫌だよお：もう居なくならないでつて約束したのにい」

「…いいか？あれはな？撃たれたんじやない、撃たしたんだ」

「嘘言わないでよ！兄様なら撃たれる前に対処できた！撃たれても急所を狙われるようなことしないでしょ！」

「…」

穂花は俺の胸の中で俺の顔を見てくる

「私は兄様が死んじやうんじやないかつて心配だつたんだよ？」

「すまない」

「兄様は自殺願望でもあるんじやないかつてくらい突つ込むんだから絶対突つ込んで行かないでよお願いだよ？」

「ああ、姉さんもすまないな本当に」

「取り敢えずその服はクリーニングだな」

「・・・じや宜しく」

「私はそろそろドイツに戻らないといけなくなつた」

「どうしたんだいきなり」

「友人の誕生日会をするらしいんでね」

「嘘つかな、姉さんは嘘をつくとき必ずズボンのポケットに手を入れるんだ
・・・ふう仕方ないか、仕事さ」

「仕事なんてしてたのか？」

「してなかつたらどうやつて銃の金立て替えたんだ・・・」

「まあそうだよな」

「何の仕事かは言えないがな」

「ホント姉さんは昔から秘密が多いよな」

「知つてるか？女は秘密が多い方が良いらしいぞ？」

「告白されて秒でフつたことのある奴がよく言うぜ」

「仕方ないだろう？当時は気になる人が居たんだ」

「じゃあこれ頼んだ」

「ああ、優秀な姉に任してくれ」

「よろしく、さあ計画書上げなきや」

（なあ本当に大丈夫か？）

「何が？」

（妹さんだよ、このままじや引きこもりかねないんじやないか？）

「安心しろ、あいつは俺と違つて強いし夕飯時にはいつもの明るい女の子だよ」
 （そりゃ）

沈黙が支配する執務室で一人話す提督は何処か哀しそうな雰囲気を纏わせている
 そんな中、木で出来た無駄に重厚感のある扉の前で壁に背中を預け前に抱える書類に
 視線を落としている人影があつた

「・・・なあ、そこに誰か居るんだろう？入つてこいよ今暇なんだ」

「いつから氣付いてたんです？」

「穂花達が入つてきた辺りからそこに居たろ？」

「ええまあ、入るタイミングを見失つてしまつたので」

「んで大淀さんや、お願ひめつちや手伝つて?!」

「今までのシリアルな雰囲気ぶち壊しですね？」

「仕事終わんねえんだよ、誰だよ二ヶ月寝てたやつ」

「あとシリアルな、シリアルつてなんだ美味しそうだな」

「分かりました、何をすれば良いですか？」

「海図に作戦経路書いてくれ」

「まあ提督の絵心は地獄の産物ですからね」

「ボロクソ言うなよ」

「事実ですからね、例の場所はどうしたんです？」

「書類は病院行く前に提出した」

「そいや大淀さんこの仕事終わったら一週間休んでくれ、隈でひどい顔だぞ？」

「誰のせいだと・・・まあでも休ませて頂きますね」

「すまないな、去年君らにやひでえことはしねえって言つた筈なんだがな」

「良いんですよ、なんやかんや言つても皆好きでやつてるんですから」

「まあ、常に六、七十人は暇と言つても良いんだがな」

「何かしら業務やつてますよね」

「駆逐艦達は花壇の整備やら自分の部屋の片付けやらやつてそれを艦娘みんなでやるから休まねえしな」

「まあここじやそれが一番効率的な休み方ですからね」

「これつてうちの環境不全な気がするんだが」

「ですね」

休みが休みじゃない日本人の気質を再確認した空だった

仕事

さて空達はあれから仕事を終わらしにかかつたが、仕上げとして作戦計画書を大本営まで郵送しなければならない

官用郵便で届けるものだが、それ用の封筒と機密と書かれたハンコが見当たらない

「大淀さんや、ハンコしらんか？」

「えーと下から二番目の引き出しだと思ひます、資源の受領書へ押したときにそこにしまつたので」

「あーあつたあつた、ありがとうございます」

「ほかになにがありますか？」

「いやこれでおしまい、つてことで明日から大淀さんは一週間の強制休暇ね」

「…はい、通信系の仕事提督がやらないでくださいよ？」

「ぬうチャンスだと思ったのに…夕張にでも任せるとか」

「なら、喜んで休ませていただきます」

「ん、ちゃんと寝ろよ！」

ということで、封筒に入れ後は発送するだけだがここで問題がある

連絡船が週一でしか来ないため今すぐ送れないものである

(ぜつてえ言われるぞ、作戦ひと月前に計画書出す奴がどこにいるんだつて)

(しようがないだろ、お前が二か月寝てたんだから)

(おう原因お前だろ絶対)

(言いがかりはやめてもらおうか)

(傷跡残つてない時点でお前しかありえないだろ! どう考へても!)

(お前言うけどな! 冠動脈だか太い血管切れてたの治したんだからな!? 感謝しろもつと
!)

(急に意識飛んだと思つたら原因[おまえか!])

「チクシヨー！」

悲しみの叫びは外にまで聞こえ、かくれんぼをしていた七駆に（靈的な）恐怖を植え
付けたという

「あいつは半刻前に札幌空港に行つちやつたしなあ、さすがに振り込まないといかんか」
姉

そういうと空は机の上に書置きを残して町に出た

ここは紗那村というまあまあ賑やかな町である史実では法律上でだけ存在する村
ここには軍事基地の近くという立地の関係上元軍人が八割を占める

つまり軍人が必要だけど當内にないものが取り揃えられているということだ

「とりあえず銀行行つて振り込むか：空いてるかな？」

さてここで胸元の懐中時計を見てみよう 16：50

「あかーん！（宮川）飛ばせっ！お前は今だけチーターだ！」

ジムニー君のギヤは買つてからそのまま後ろに横たわっています（とつととつけろ）法定速度ギリギリで飛ばすが、結局間に合わない

「…むしろチーターになりたい」

「最初からおとなしくコンビニ行けばよかつたぜ全く」

「五十万振り込むとか詐欺だろ一周回つて」

愚痴を吐きつつも感謝はしているのであつた

その後おにぎりと黒色炭酸を買い、ボケーとしながら鎮守府に戻ると穂花がガレージで待つっていた

「どうした？」

「にい、ちょっと一緒にドライブしよ？」

「いいけど急にどうしたんだ一体」

「いいからいいから夕飯時までに帰つて来よう？」

「ああ」

ええとですね、なんで帰つてきてすぐに妹とデートせにやならんのだ
いやまあ確かに迷惑掛けたしお礼も言いたいし丁度良いっちや良いんだけれども！
と、思考の海へ落ちていく空であつた

「なあ穂花」

「なに？」

「心配かけたな、約束も破つたし本当にすまない」

「子供の時の約束でも女の子は忘れないんだよ？」

「ああそうだな、一度だけ何でも言うこと聞いてやろうか？お詫びになるかわからない
けど」

「じゃあそれで今回のチヤラでいいよ？でももう絶対に無茶しないでよ？」

「分かつた、にしてもこの島も広いな、ショッピングモールもあるとは思わなかつた」
(もう兄様を危険な目に遭わせない、あのころみたいには絶対させない)

「なあこれ旨そうじやね？食つてみようぜ」

「うん、これ二つおねがいします」

「はーい！まいどあり！」

「クレープつてこんなに旨いんだな」

「そうだね！いやー今度はみんなで食べたいね」

「だな、なあ次で時間的に最後だがどこに行きたい?」

「屋上遊園地!」

「子供か!?」

ショッピングモールに入つてから幼児化している氣がする穂花を連れ、屋上遊園地に向かうとそこには十メートル級の観覧車があつた

「ねえ!にいあれいこつ」

「分かつた、わかつたからとりあえず落ち着け」

中に入ると小さい外見通り大人二人が対面で座る程度の座席しかなかつた
そして向かい合つて座るとどんどん高さを増し、夕日がきれいに見え始めた
「アツ待つて高い!怖い!死ぬう!」

「にい!見て綺麗だよ夕陽!」

「…ふうふう下を見なければ大丈夫下を見なければ大丈夫」

「大丈夫?高所恐怖症だもんね、にいは」

「ふえ!?んなわけないだろ!?怖くないぞ全く!」

「無理しない方がいいよ?」

「大丈夫だ、遠くを見てれば怖くないってホントに夕陽綺麗だな」

そう言つて横を見ると穂花が少し悲しそうな顔をしていた

そのまま少し見ていると視線に気づいたのか笑顔になる

「どうしたの？」

「なに、こんなに綺麗で可愛かったつけ？と思つてな」

「なつ、恥ずかしいよ！」

すると結構本気で背中を引っ叩いてきた

顔が紅いというと夕陽のせいだともう一度同じところを引っ叩いてくる
いつの間に一周したのかお早めにお降りくださいと心の声が聞こえる気がするアナ
ウンスがされた

「お…降りるぞ凄い痛てえ」

「うん…ごめんね」

「悪いと思つてるならせめて違うところにしろ」

兄妹水入らずの時間を過ぎし鎮守府に戻ると食堂が賑わっていた

「遅れちまつたな」

「急がないとね」

「ああ」

「提督、おかれりなさい」

「ん、ただいま、今日は何があるんだい?」

「今日は金曜なのでカレーとかカツ定食なんかありますよ」

「んじやカレーをくれるか?」

「私はカツ定食で!」

「はい分かりました」

「はい美味そのなので瞬殺です」

「ここつて判定的には何になるんでしょう?」

「ああつと? 多分ここは陸海合わせて漸く120人位だからなあ、しかもここ一回放棄されてるから多分『基地内にある軍属軍人が経営する食堂』みたいなかんじじゃないか?」